
Accelerando-Amami poco, ma continua.-

砂菊博尾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Accelerando - Amami poco, maco
ntinua . .

【Nコード】

N1241V

【作者名】

砂菊博尾

【あらすじ】

生まれつき常軌を逸した身体能力をその身に宿していた青年、御鏡悠夜。国から被験体として扱われ、様々な裏社会の事件に巻き込まれ、時にDSなオタクの友人にこき使われながらも日常を愛し、日常と非日常の境に生きていた彼は、ある日、何の脈絡もなく“魔女”を名乗る少女に襲撃された。そして彼は知る。裏社会の陰には“魔女”と呼ばれる存在があり、自身が彼女たちによるバトルロイヤルに巻き込まれてしまったという事を。全てを知った彼が選ぶミ

手は、果たして。

序章・1（前書き）

本作品に登場する人物・団体・その他名称や設定は全て妄想の産物です。

また、主人公は別に一般人じゃないのでトンデモバトルに巻き込まれても結構活躍したりします。多分、強いです。なお、この物語には女の子は沢山登場しますがヒロインは今のところ予定していません。

ほそく：最強ハーレム物は、読む分には好きですが自分で書くのは苦手な作者です。

序章・1

仄暗い闇の中で、身動きする影が在った。地獄の淵にも思える其処には、様々な怨嗟と痛苦の声。時に激しく、時に小さく鳴るのは不愉快な鉄錆の音色。繋がれた“彼ら”は、ひらすらに絶望と悲哀の声を上げる。

蒼生した石畳の上で、“彼女”は独り膝を抱えて蹲っていた。周囲の嘆きを遮るように両手で耳を塞ぎ、ぎゅっと強く目を瞑ってその華奢な身体を震わせる。

“彼女”は思う。如何して自分はこんな所にいるのだろう、と。何故こんなにも辛くて悲しくて痛くて寒くて怖いのに、自分は独りなのだろう、と。

いつも傍に在った温もりは、何処へ消えてしまったのか。何時如くなる時でも護ると誓ってくれた暖かな光は、何故今此処にないのか。

此処は嫌だ。此処は怖い。此処にはいたくない。

そんな願いは空しく闇に吞まれ、周囲の呻き声によって塗り潰されてゆく。昏く深い闇は除々に“彼女”を食み蝕み、その無垢なる魂を無慈悲に削り取ってゆく。

そんな絶望の澱の底で、タスケテと“彼女”は呟く。最愛の人へ、唯一の想いを込めて。

お兄ちゃん助けて、と。

「あー、くそ、何だつてオレがこんな所に来なきゃいけないんだよ」

高校に入学してから二回目の祝日、憲法記念日。死ぬ可能性すらあつた冗談みたいな一週間を潜り抜け、晴れて手に入れた輝かしい休日に、晴天の下で、悪態を吐きながらオレは大勢の人が行き返す繁華街を歩いていた。手に持つのは昨日帰り際に渡されたメモ。そこに書かれているのは、多分、機械のパーツの名前。多分と言うのは、それらの名前の羅列が全く理解出来ないモノだったからだ。

オレは賭けに負けた己の運の無さと、こんな面倒臭い罰ゲームを与えてくれやがった万年引き籠りオタク、その二つに対して内心で幾百もの罵倒を繰り返しながら歩いていった。

と、その時。

「ねえ、ちよつと良い？」

余りにも唐突に、目の前に一人の少女が飛び込んで来た。比喻表現では無く、本当に横合いからオレの前に立ち塞がったのだ。

「んん？ あー、悪いけどキャッチセールスとか勧誘なら間に合ってるぜ。他を当たってくれや」

が、記憶に無い顔の為、オレは勧誘か何かだろうと辺りをつけて

ひらりと少女を避けながら再び歩き出す。

それで問題なく終わると思っていたのだが。

「……おい。流石にしつこくねえか？」

少女は、再びオレの前に立ち塞がった。

「もっつ、いきなりそんな事言わないでよ！ ちょっと位こっちの話を聞いてくれても良いでしょ？」

「いや、って言われてもな……」

そこでオレは気付く。彼女の手には勧誘のチラシヤキャッチセールスに必要そうなモノが何一つ無い事に。或いはお洒落な手提げ鞆の中に入っているのかもしれないが、明らかにこれからデートしやすと言わんばかりな格好と合わさって、その可能性は低そうだった。

その段階になって、オレは改めて少女を観察する。

顔立ちは、はっきり言って可愛い。と言うよりも綺麗と言った方が良いだろう。青みがかった黒髪をポニーテールにし、耳には可愛いらしいピアス。派手にならぬ程度に施された化粧が、より一層彼女の魅力を引き立てている。服装に関して詳しい事は分からないが、十六、七程度と予想出来る見た目と合わさり今時の女子高生っぽいイメージを受けた。

いや、そのイメージは偏見かもしれないが、いずれにせよお洒落に気を使っているのは間違いない。

「えっとね、それで、その、話し掛けた理由なんだけど……」

そして何故か、いきなり前髪を弄ったり視線を彷徨わせたりして、もじもじとした態度を取り始める少女。本当に訳が分からない。一体何が起きているのか、オレはやや混乱した頭で現状を把握しようと試みる。

だがそんなオレを無視して、少女は何かを決意したかのような表情になってオレを見つめて来た。

頬を赤く染めて真剣に見つめて来る彼女に、嫌な予感を覚えて口を開こうとした直後。

「あ、アタシとデートしてくれないっ?」

なんて、意味不明な言葉がその愛らしい唇から飛び出した。

しばし硬直した後、口から零れる言葉。

「……、あー、聞いても良いか?」
「な、何!?!」

ぐつと距離を詰めて上目遣いに問い掛けて来る少女。その瞬間にふわりと香った香水の匂いに僅か眩暈を覚えながら、オレは更に言葉を重ねてゆく。

「オレとお前は、初対面だよな?」

「うんっ、そうだよ」

「新手の詐欺とか、そんなんじゃないやねえんだよな?」

「当たり前じゃん！ 詐欺でこんな事言わないよ！」

頭を掻きながら、最後の確認。

「つまりこれは、初対面の女に逆ナンされてるって考えで良いのか？」

「う、うん……そだよ」

再び頬を赤く染める彼女に、今度は純粹に呆れと驚きからの眩暈。目の前の少女は、本気でオレを逆ナンパしているらしい。訳が分からない。

とにかく冷静になろう、と自分を落ち着けた後に、オレはもう一度女の様子を見てから、これまでの一連の態度を思い返しつつ口を開く。

「あんな、どんな魔が差したのかは知らねえけど、慣れてない事はするもんじゃないぜ？ つーかだな、普通に可愛いんだから、こんな見ず知らずの男を逆ナンする前にまともな彼氏でも作れよ」

「なっ」

頬を赤くしたままの絶句。オレはそんな少女の様子に、はあ、と溜息を吐く事しか出来なかった。今までの態度を見ていれば、ナンパ慣れしていない事は一目瞭然。逆ナンパの理由は分からないが、チャラチャラした見た目に反し純粹そうなこの少女にはちゃんとした恋愛がお似合いだろう。

「ま、そう言う事だから、じゃあな。精々良い彼氏見つけるよ」

これで流石に終わっただろう、と安堵と共に歩き出したオレは。

「ま、待って！」

服の端を摘まれてそう言われた時点で、今日が最高についていない厄日なのだと確信してしまった。

「あんだよ。まだ何かあるのかよ？」

流石にそろそろ不機嫌にならざるを得ず、結果としてかなり不愉快そうな声が飛び出したが、それにも怯まず、彼女は決意の籠った瞳でオレを見据えながら言葉を続ける。

「アタシ、貴方に一目惚れしたの。こんなの初めてで、自分でも戸惑ってるけど……でも、このまま何もせずに終わりにたくないの」「……………」

真っ直ぐな瞳と言葉を受けて、思わず言葉に詰まってしまった。

（一目惚れって、おい。そんな漫画じゃあるまいし……マジかよ）
などと内心で思いながら、けれどその言葉と瞳に嘘が無い事を悟る。

少女の決意を理解し、加えてこのままでは埒が明かないと、否応なく確信してしまった。

（あー、クソツ、面倒くせえ。つか絶対コイツ離してくれねえだろ。て言うか断ったら泣くだろ、お前）

だから、気付けば再度の溜息と共に言葉を放っていた。

「チツ。分かったよ。デートすりゃ良いんだろ？ けど、勘違いすんなよ。お前が余りにも強情だから、仕方なく折れただけだぜ」
「あ……う、うん！ ありがとうっ」

ぱあっと顔を輝かせた少女を見て不覚にも見蕩れてしまったのは、不可抗力と言う事にしておいて欲しい。

取り敢えず、暗邸^{アンポウ} オレにパシリを命じた友人 には急用が入ったから遅くなるとメールを入れておけば良いだろう。いやそもそも、正午を少し過ぎた今の時間ならアイツは眠っている筈だ。何せあの二トは、午前六時に寝て午後六時に起きる信じられない生活を毎日繰り返しているのだから。

不規則な生活を繰り返すアイツに溜息を吐きながら、気を取り直してオレは少女に問い掛ける事にした。

「んで、デートするのは良いけどよ、大事なモンの交換がまだ済んでねえよな？」

「……？ あっ、」

一瞬きよとんとした後に、漸く思い至ったのか少女は頬を赤く染め、照れた風に言葉を続ける。

「えと、アタシの名前は一之瀬神楽^{いちのせのかぐら}。霧桜高校二年、十七歳の現役女子高生だよっ」

「……マジで？」

オレが一瞬耳を疑った理由は幾つかあるが、最大の理由は少女神楽が所属している霧桜高校^{きりおうこう}と言う名前に、聞き覚えが有り過ぎたからだ。

何となく気まずいモノを感じながら、ガシガシと頭を掻きつつこちらも名乗る。暗邸に厨二ネームだね、と言われた余り好きではない自身の名前を。

「オレの名前は御鏡悠夜^{みかがみ ゆしや}。まあ、なんだ。霧桜高校一年、十六歳の現役男子学生だ」

「……へ？」

目を丸くする神楽。コイツ年上なのかーと内心で思いながら、オレは気まずさが極まって視線を逸らす。

「まあ、そう言う事だ。ヨロシク、先輩」

「え、ええええええええ！？」

流石に驚き過ぎだろう常識的に考えて、と思いながら、オレは面倒な事にならなきゃ良いけどなーなどと無駄な期待を空に託すのだった、まる。

*

「うわー、騙された。だって、どう見ても二十歳くらいじゃん。それで十六なんて詐欺だよ、詐欺」

「うるせえ。老け顔は気にしてるんだから言うんじゃないよ」

衝撃的な出会いから約十五分。オレは有り得ないと連呼する神楽を連れて喫茶店に来ていた。神楽が昼を食べているかは分からないが、喫茶店ならどうとでもなるだろうとの判断だ。

「大体、さっきから有り得ないって言い過ぎだろ。アレか、お前は

年上専門か何かなのかよ？」

「や、そうじゃないケド……」

コーヒーに口をつけてぶつぶつと呟く神楽に、溜息。ちなみに先輩だから敬語を使おうかとも思ったが、今更感が溢れていたのやめておいた。向こうがこっちの粗野な口調を気に入らなければ、その内何か言い出すだろう。

「うん、まあ何て言うか、その……第一印象でビビッと来たから声を掛けたんであって、決して年齢を気にしたワケじゃないんだけど……ビビクリしたって言うか。戸惑っちゃったって言うか」
「……はあ」

煮え切らない態度の神楽に対し本日何度目か分からない溜息を吐きながら、一口コーヒーを飲んだ後にこちらから煽りを入れてみる事にする。

「んで、オレが年下だから神楽としては冷めちまったって解釈で良いのか？ それならそれで構わないぜ、どうせこの後は」
「そんな事ないっ！！」

オレの言葉を遮るように強い語調で言葉を放った神楽。その顔に見え隠れするのは、怒りの色。

「さっきも言ったけどそんな中途半端な気持ちじゃないし、アタシはもっともっと悠夜の事が知りたいから、だから……」
「じゃあ別に良いじゃねえか、年齢なんて細かい事はよ」

そんな神楽の反応に予想が当たっていた事を確認したオレは、今度は逆にこちらから神楽の言葉を遮って言葉を続ける。ポンポン、

と頭を撫でたのは、まあ何と言うか癖である。

「折角のデートなんだろ？ だったら、精一杯楽しもうぜ。明日以降会うかは分かんねえけど、少なくとも今日一日はオレも全力で楽しむからよ」

だから下らねえ事でグチグチ言うなよ、と三割増し程度に優しく言ってるやうに、オレは神楽の頭から手を退けながらメニューを手に取る。

「取り敢えず、オレは腹が減ってるから何か適当に頼むけど……神楽はどうするよ？」

「あ……、……、あ、アタシも何か食べる……」

顔を赤くして途切れ途切れに言葉を紡ぐ神楽に、初心な奴だなと内心で苦笑しながらオレはメニューを手渡した。

それから更に三十分ほど経って、頼んだメニュー 神楽はクラブサンド、オレはスパゲティ が届き、ある程度食べ終えた頃には、互いにすっかり打ち解け会っていた。

「ふうん。そっか。そうだよな。今一年生って事は、つい一ヶ月前に入学したばかりだもんねー。見た事無くても当然か」

「まあ、だろうな。ただでさえ割と授業サボってるしな、オレ」

どうやら神楽もオレと同じく人見知りするタイプでは無かったらしく、当初の煮え切らなさに反して呆気ないほどスムーズに会話が弾んでいる。

「って、確かにウチの学校は規則とか緩いけど、流石にサボりは拙

いでしょ。それに一年生からサボるとか、流石に問題あるんじゃない？」

「いやまあ、キツチリ単位は計算してるし。それに入学時の実力テスト、学年ベストスリーに入ってるんだぜ？ これでも」

「えー、それ年齢よりも嘘臭いんだけど。や、確かに頭が悪そうには見えないんだけど、如何にも不良ですーって感じの見た目じゃない」

「うるせえ、ほっとけ。ポーズだよポーズ。こうしてりゃあ鬱陶しい奴らに絡まれずに済むんだよ」

ふうん、と頷きながら、神楽は上から下まで無遠慮にオレを観察した後、クラブサンドを一口食べる。意外な事にその仕草から上品さを感じられ、チャラチャラした格好ながら育ちは良いのだろうと予想出来た。

「でも、だったらそのポーズもあんまり意味ないかもね。こうしてアタシに絡まれてるし」

「っておい、自分で自分が鬱陶しいって自覚してたのかよ」

「あはは、まあねー」

飲み込んでからニツと笑って放たれた言葉に、思わず入れてしまった突っ込み。何と言うか、調子が狂う女である。

「だっていきなりナンパされたらそりゃ鬱陶しいし。アタシだって、正直断られるだろうなーって思ってたからさ」

(いや、お前が強引だったから折れただけなんだけどな？)

などと思いつつもそんな事は口にせず、なるほど、と呟いて会話のキャッチボールを続ける。

「『一』事はあれか、その口ぶりからすると、やっぱり結構ナンパとかされるのかよ?」

「んー……まあ、ね。これでも自分なりにお洒落には気を使ってるし、モデルにスカウトされる程度には顔が整ってるみたいだし。街を歩いててもそうだし、学校でもやっぱり鬱陶しいかなー」

「はあん。ま、納得のいく話だわな。そんだけ可愛けりゃ、そりゃ周りの男子たちは放っておかねえだろ」

「……さつきも思ったけど、その、可愛いつかストレートに言い過ぎじゃない?」

頬を薄ら赤く染めて軽く睨んでくる神楽。嬉しさと羞恥の割合は、羞恥の方がやや上か。一目惚れした相手に容姿を褒められて嬉しいが、それ以上に銜いの無い褒め言葉に慣れていないと言った所か。

オレとしては、単純に思った事を言っているだけなのだが。

「いや、実際可愛いし。アレだ、オレは言葉をオブラートに包むのが苦手なんだよ。面倒くせえしな。……『一』か、むしろ意外だな。てつきり可愛いとか言われ慣れてると思ってたんだけどよ」

「うーん、そりゃ言い寄られた事は結構あるけど、真っ直ぐ目を見て何の気負いも無く言われるなんて全然無かつたし。それに、可愛いつか言う奴は大抵が軽薄で軟派なのが丸分かりだったからさ」

「ふうん。つまり、オレは神楽から見ても硬派なイメージがある訳か?」
「うん……。こうして話してて思うけど、悠夜は嘘を言わないヒトだつて分かるんだよね。芯が一本通つてるつて言うか、明確に自己を確立してるつて言うか」

(自己を確立つて……今時の女子高生にしては語彙が豊富なのな)

内心で神楽の評価を上方修正しつつ、温くなった二杯目のコーヒ
ーに口をつける。

「ま、別に他人からどう思われよう構わねえけど、取り敢えず褒め
言葉として受け取って置け」

そこまで言い終えてから腕時計に目を落とすと、時刻は午後二時。
もうしばらく此处で駄弁ついても良いが、色々と街を見て回るな
らそろそろ出た方が良くもしいない。

「取り敢えず、この後はどうするよ？　ここで駄弁つても良いけ
どよ、折角のデートなんだから積極的に街に繰り出すのもアリじゃ
ね」

「んー、そだね。じゃあそろそろ出よっか」

「うし、じゃあ行くか。会計済ませとくから、先に入口ん所で待っ
てくれよ」

席から立ち上がって伝票を抜き取り、そう言い残してからレジへ
向かう。後ろで少し慌てたような気配がするが、気にする必要は無
いだろう。

「ほい、会計頼むぜ」

カウンターの上の伝票を手を取った店員の少女は、チラッと伝票
を見た後に無言でレジを打つ。

帽子は目深に被ったままで、品物名を読み上げる事も無く。

「……合計で二千五百円」

「あ、お、おう。んじゃあ二千二百円から頼むぜ」

「二千二百円のお預かりで……五十円のお返し」

「……」

余りの無愛想さに思わず口籠ってしまったが、正直、誰もオレを責める事は出来ないと思う。いや、実際この愛想の無さは有り得ないだろう。幾ら個人経営の喫茶店とは言え、接客マナー以前の問題ではなかるうか。そもそも敬語が出来てない時点でどうかしている。

艶やかな黒髪をショートカットにした、外見だけは少なくとも可憐な少女に対し何か釈然としないモノを感じながら、オレは釣りを受け取って店から出た。

カランカラン、と言うドアベルの音の後には、当然の如く“ ありがとうございました” の声は無かった。

「……いや、流石にゆとり過ぎだろ」

「？ どうかしたの、悠夜」

「いや、何でもねえ」

そっか、と頷いた後に、ハツとした表情になって神楽はバッグから財布を取り出そうとする。勿論、取り出される前にスツと彼女の手を押さえるが。

「こつ言う時は男に格好つけさせりゃ良いんだよ、男の安っぽい見栄って奴だ」

「で、でも……」

「ほれ、さっさと行くぞ。時間は有限だぜ？」

まだ言葉を重ねようとする神楽の手を取り、オレは気遣いながらもこちらが主導する形で歩き出す。手を握った時に「あ……」と言う潤んだ声が聞こえたが、当然無視である。

(つか、手え繋ぐだけで頬赤らめるとかどんだけ純情なんだよ)

今時珍しいほど初心な神楽に少々戸惑いながらも、オレは彼女と共に人混みの中へと足を踏み入れて行った。

「……」

カランカラン、と言うドアベルの後に青年が去った事を確認したレジの少女は、窓の外で青年が少女と会話するのを見つつレジから離れる。

「ちよつと黒塚さん、貴女」

「……煩い」

黒塚と呼ばれた少女は、まなじり 眦を釣り上げて叱責を向けて来たチーフに対し、スツと掌を突き出した。

途端、変化は劇的であった。

「ええと、厨房の方をお願いしても良いかしら？」

チーフの女性は、一瞬放心の色を見せた後に笑顔になってそう告げたのである。明らかに直前まで叱責しようとしていたのに、である。

「……任せて」

少女は一言呟くと、そのまま厨房に向かわず裏口へ向かい、帽子

と制服をゴミ箱に捨ててから店の外へ出た。そして悠夜が去って行った方向へ顔を向けた後、店の裏に置いてあった櫛で出来た二メートル程度の杖を手に取りそれを翳す。

直後に置きた現象を、何と説明すれば良いのか。

一陣の風が吹いた次の瞬間には、彼女は漆黒のローブと同色の三角帽子に身を包み、誰もいない路地裏に独り佇んでいた。

その姿は、さながら御伽噺に登場する魔女のよう。ただし、飛び切り可憐な、と言う形容が文頭に付くが。

「アレが、御鏡悠夜……。……………」

じい、っと視線を向け続けていた少女は数分後に視線を外すと、トン、と杖の先で地面を一つ叩いた。

「 Whirlwind 」

風に溶け混じるかのような囁きの後、彼女の足元に複雑な紋様の円陣が淡い燐光と共に現れた、次の瞬間。

一瞬にして、少女はその場から消え去っていた。

後に残ったのは、ひっそりと息を殺して静まり返った無人の路地裏だけだった。

……………

喫茶店を出た後、オレと神楽は客観的に見ても思い切りデートを楽しむ事が出来たと思う。

「あ、ねえねえ。この服さ、超可愛くない？」

「ん？ あー、確かに似合いそうだな。でも、こっちの方がお前の可愛さを引き立ててくれると思うぜ」

「そ、そうかな。じゃあちよっと試着してみるね」

ショッピングモールの洋服売り場で着せ替えを楽しみ。

「うー、悔しいなあ。あとちよっとで取れそうなんだけど……」

「ケケケ、下手だなあ。貸してみそ。こう言うのはコツがあるんだよ……っつ」

「わ、凄い。一気に二つ!？」

「ほれ、一つやるよ。もう一つはオレが後でバッグに付けて、まあお揃いって事で」

「あ……うん、その、ありがとう」

ゲームセンターのUFOキャッチャーで男としての面目を保ち。

「見る、人がゴミのようだって言えば良いのか？」

「あはは、懐かしー。て言うか此処からじゃ遠過ぎて人なんて見えないって」

「いや、そこはほら、高い所のお約束的な？」

「ふふっ、何それ」

市内一の高さを誇るタワーの最上階に行って駄弁って。

「うう、凄く良い話だったね」

「ああ、久しぶりに当たりだったかもな」

「うん……。でも、意外だったな。悠夜って恋愛映画とか見なさそうだけど」

「あー、つか映画は全般的に見る感じだな。割と雑食だからよ」
適当な映画館に入って、恋愛映画を見て意見を交わし合っ

そんなこんなであつと言う間に日暮れとなり、今現在。オレと神楽は駅へ向かって歩いていた。

「んーっ、今日はすっごく楽しかったなあ」

伸びをして微笑みながら言う神楽に、同意の頷きを返す。茜色に染まる街を歩く神楽の横顔には、隠しようもない嬉しさと充実感。

「だな。久しぶりに充実した休日だったぜ」

「あはっ、アタシたちって結構相性良いのかもね」

「ま、少なくとも一緒にいて退屈しねえってのは分かったぜ。何だかんだ、結構話合っしな」

「む、そこは素直に相性バッチリもうメロメロ、って言ってくれれば良いのに」

「調子に乗るんじゃないよ」

軽くチョップを入れてから、ぶーぶーと口を尖らせる神楽のポーズに苦笑。

「取り敢えず、これでデートは終わり、か。オレも時間がリミット近いし、実は神楽も結構門限キツイんだろ？」

「ん……そだね」

表情を改めると、僅か神妙な面持ちになって急に口数を減らす神楽。オレはそんな彼女の様子を見て、本当に今日一日を彼女は楽しみ尽くしたのだなと実感する。

「それで、どうよ？ デートしてみて、まだオレに一目惚れしたって気持ちは変わんねーのか？」

「……その言い方だと、私に一目惚れされて嬉しくないみたいだね」

更に陰りを含んだ呟きを漏らす神楽に、はあ、と溜息を吐いてからオレはその頭を撫でてやった。

「んな事ねーよ。お前みてえな可愛い女に一目惚れされて、嬉しくないワケがねえだろうが。今日だって、すっげえ楽しかったしな」

けど、と言葉を続ける。

「今の所、オレは恋人を作る気がねえ。だからどんだけ惚れられても断らざるをえなくて……まあ、何だ。結局気持ちに伝えてやれねえんだな、コレが。だから、あんまし歓迎はしたくねえんだよ」

「そか……」

彼女なりに分かっていた答えだったのだろう、神楽は小さく呟き、しばし二人の間に訪れる沈黙。

そのまましばらく無言のまま歩き続けていて やがて最初に沈黙を破ったのは神楽だった。

「……でも、さ」

トンツ、と一ツステップを踏んで前に出ると、オレの方に身体を向ける神楽。その目は真っ直ぐオレに向けられていて、震える唇はそれでも想いの込められた言葉を紡ぐ。

夕陽を背にして立つ彼女の姿に、目を奪われる。朱色と彼女以外の全てが視界から抜け落ち、彼女の言葉以外が全て遠くなる。

「それでもアタシは悠夜が好きだから、例えこの気持ち片想いだとしてもずっと抱き続けていたい。……それも、迷惑、かな？」

不安げに揺れる瞳でそこにいる神楽を見て、オレは素直に彼女の真っ直ぐさが羨ましくなった。今のオレには決して真似出来ない、純粋なそのココロ。

“ 大好きだよ。ずっとずっと、一緒にいようね ”

そして思い出すのは、かつて永遠を誓い合った最愛の少女の記憶。愛しくて、切なくて、苦しくて。それが許されない恋であると知りながら愛し合い、そして災厄の形で最低の終わりを迎えた過去。

未だに昔のココロが自分の中にあり、だからこそ愛せない、愛したくない。

そうやって過去に囚われた人間がオレだ。

「オレは……」

そんな無様なオレを、こうまで真つ直ぐ好いてくれる奴がいる。それだけでオレは胸が熱くなり、或いは彼女となら良い関係を築けるのではないと思いきうになるが、その思いをグツと呑みこみ、下す。

“あの最悪”から、二年と少し。十年以上の年月を重ねて築きあげたココロが、そう簡単に忘れられる筈も無い。

そして、そんな状態のオレが誰かを愛して良い訳がない。

「神楽、オレは……」

言葉を口にしようとした、その直後。

神楽の鞆の中から、着信を告げる無機質な音が流れ始めた。

「！」

それを聞いて神楽が浮かべるのは驚きの色。その驚きの深さに違和感を覚えた瞬間、彼女は既にその手に携帯を持っていて、携帯の液晶を視認していた。

ギリツ、と唇を噛んだ後に彼女が浮かべた表情を、何と形容すれば良いのか。悲しさとも悔しさともつかないソレは、けれど刹那の間。

神楽は即座に申し訳なさそうに笑いながら、手を顔の前で合わせる。

「あ、あはは、ごめんねー。ちょっと急用が入っちゃって、直ぐに

でも帰らなきゃいけなくなっちゃった。本当ごめんっ」

嘘だ、と直感的に悟った。なぜなら、そんな理由ならばあんな表情をする事など有り得ない。

それに、そう。オレの違和感に拍車を掛けるのは、今さっきの着信音。間違い電話が掛かってきた時の着メロは、流行りのJ・P・O Pだったのだ。友人や家族ならば個別に設定していても不思議ではないが、未登録の番号にそんな着メロを設定するとは考えにくい。

あの着信音がデフォルトの設定ならば、個別に設定したであろう、今さっきの冷酷なまでに無機質な着信音は一体誰からのモノなのか。

「えと、と、とにかく今日はすっごく楽しかったよ！ 返事は保留でも良いから、学校で会ったらよろしくねっ」

「あ、おう……」

急ぐように背を向けて駆け去って行く神楽を見送りながら、オレはしばしその場に立ち尽くす事しか出来なかった。

更なる拒絶で傷付けずに済んだ事に対する安堵と、事情に対し一歩すら踏み込む事が出来ない己への自嘲、そして 一抹の不安。

それら全ての感情が、否応なく物語っていた。

オレ自身が、少なからず一之瀬神楽に惹かれてしまっている事を。

「……ままならねえなあ、クソッ。つか最悪じゃねえか、オレ」

未だ暗邸の罰ゲームを果たしていない事を思い出し、オレは機械

のパーツを置く為に再び街へと繰り出した。

序章・1（後書き）

色々あって、神楽の名字を火菜沢 一之瀬に変更。

序章・2 (前書き)

初回につき二話連続投稿。基本的には一週間サイクルで更新する予定です。序章が終わるまでは看板に偽りありみたいな状況で、申し訳ありません。が、所詮毒にも薬にもならない小説なので、本当にお暇になった時にチラリと覗く程度で問題ないかと思われます。

序章・2

「あー、やっべ、かなり遅くなっちゃったな」

店員に聞きながらパーツを買い揃え、電車に乗って暗邸の住む住宅街の最寄り駅に降りて、アイツの家へ向かって歩いている今。既に完全に日が沈み、見上げれば其処には何処までも広がる夜空。星一つ無く月すらも雲に覆われている現状、周囲の夜闇は深い。

「何て言い訳すっかなー。いや、でも別に言い訳なんていらねえか。あんなニート、一時間や二時間放っておいたってどうって事ねーだろ」

あの壁紙だらけの部屋で、美少女ゲームをやりながら出前の寿司をゆっくり咀嚼しているに違いない。

手に取るように想像出来る暗邸の姿に苦笑しながら、鼻歌交じりに住宅街を歩いていると、不意にポケットの中で携帯が振動するのを感じた。

「……ん？」

誰からだ、と思いつながら携帯の液晶を確認したオレは、それが今正に向かおうとしている暗邸からの着信である事を知る。

「何の用なんだ……？」

疑問に思いながら通話状態にし、携帯を耳に当てる。そして向こうから聞こえたのは、ナチュラルに他者を見下すような響きを帯び

た声。

『やあ悠夜、昨日振りだね』

「んだよ、今から行く所だつてのに、そんなに待ち切れなかったのかよ？」

『いや、ただキミに伝えなきゃいけない事が出来てね。むしろ、キミがボクの家に来る前で良かったとすら思っているよ』

「あん？ 何だよ、そりゃ」

一拍の後に暗邸は告げた。

『ぶつちやけしばらくボクの家には来ないでくれるかな？』

「どつという事だよ、またいきなりだな」

『いやいや、少しばかり面倒な事になつてね。悠夜と遊んでばかりもいられなくなつたんだ』

おどけたような口調は常と変わらないが、声は僅か真剣さを帯びていて。

「しゃあねえな。オーケー、んじゃあ今日は大人しく帰る。で、いつ頃からならまた行けそうなんだ？」

『すまない、それも未定なんだ。ただ、ボクもキミと共に過ごしたいのは確かだからね。なるべく早く終わるように努力するさ』

「プツ、努力つて、お前に一番似合わねえ言葉だろ、ソレ」

『うん、確かにそうかもしれないね』

笑い合いながら、「んじゃ切るぜ？」と言って通話を停止しようとしたオレは、暗邸の静止の声でその動きを止める。

『ああ、ちょっと待ってくれないか。最後に一つだけ』

「どした？」

常に歯切れの良い暗邸にしては珍しく、僅か躊躇うかのような間を置いて。

『良いかい、悠夜 決して夜遅くに歩いては行けないよ？』

「……おいおい、お前はオレの母親か何かだよ」

『フツツ、ボクが言いたいのはそれだけさ。じゃあ、お休み』

呆れ混じりのオレの言葉に苦笑で返した後、暗邸の方から通話を切ったらしい。物言わぬ携帯をしばし無言で見つめた後に、オレはそれをポケットに仕舞ってから元来た道を歩き始めた。

「……ってオイ、このパーツどうすんだよ」

今更ながらに気付く、オレの右手からぶら下がる袋の中で存在感を主張するパーツ群。オレは捨てるかどうかを真剣に悩んだ上で、結局持ちかえる事にした。

(まあ、流石に捨てるのは可哀想だろ)

「しっかし、どうすっかなあ」

暗邸の家でダラダラ過ごすつもり満々だったオレは、降って沸いた時間の使い方に真剣に悩んでしまう。此処最近は特に暗邸の家に入り浸っていた為、余計に何をすれば良いのか分からなくなってしまう。

腕時計によれば、時刻は午後七時。既に街で飯を食っている為、どこかの店に入る選択肢は限りなく薄い。

「……ん？ あ、いや、そっぴやアイツの家もこの辺りじゃね？」

唐突に、オレはちょうど良く時間を潰せる存在がいる事を思い出した。確かアイツの家はここから一駅か二駅ほどの場所にあった筈だ。

再び携帯を開き、アドレス帳から名前を探してメールを送信。

果たして返信は僅か数秒で帰って来た。

「うおっ、相変わらず早いな」

高速で携帯のボタンを押すアイツの姿を連想しつつ、了承を得たオレは早速駅に向かって歩き出した。

*

「あはっ、悠夜センパイからウチに来てくれるなんて華恋、感激です」

「ま、暇だったしな」

住宅街から駅へ歩き、駅から二駅分電車に乗って降りた後、更に歩く事、約五分。オレは目当ての人物の家に着していた。

葉月華恋^{はつきかれん}、十五歳。中学時代の後輩であり、小学生の頃から雑誌の読者モデルを務めている少女。当然その肩書に見合う美少女ぶり、オレが中学にいた頃の話になるが、化粧をしていると勘違い

され洗顔させられそうになつた逸話の持ち主である。

オレが幸せヘアと密かに呼んでいる、ふわふわとした天使の輪のような髪。長いまつげと人形以上に整つた目鼻。表情の一つ一つが魅力に溢れている癖に、更にそれぞれの表情が最も映える角度すら完璧に計算する小悪魔っぽさ……正に“可憐”である事を追求した果てに生まれたかのような少女なのである。

「ささつ、入って下さいよお。センパイの為に綺麗にしておいたんですからあ」

「おう、邪魔するぜ」

玄関口から中へ入ると、それがさも当然であるかのように自然と腕を絡めてくる華恋。変わらねえなあ、と苦笑しながらオレは彼女に手を引かれ居間へと向かう。

「ふうん、内装は変わってねえのな」

「当たり前じゃないですかあ。センパイが前にウチに来てから、まだ二カ月も経ってないんですよー？」

「んで、両親は相変わらずいねえのか」

「あはは、あんなクソ親の事なんてどうでも良いですから、ソファに座ってて欲しいです。今コーヒーを入れますからあ」

名残惜しげに絡めていた腕を離しキッチンに駆けて行く華恋。そんな後ろ姿も、また凶悪なまでに魅力的で。と言うか、膝上十五センチなんて目じゃないそのミニスカートは何なのか。見えそうで見えないそのスカートの動きすら、きつと計算しているに違いない。

「つか、休日なのに制服とか狙い過ぎて魂胆バレバレだろ」

オレが制服好きなのを知っていてやって来る辺り、本当に先輩想いの悪い子である。だからこそ微笑ましくもあるのだが。

「何か言いましたかあ？」

「うんにゃ、何でもねーよ」

変わらない地獄耳に苦笑していると、意外な事にすぐに華恋は戻って来た。手に持つ盆の上には、きっちり二人分の湯気が立ち上るコーヒーカーップ。

「って、随分早えなオイ」

驚き混じりのオレの言葉に、またしても恋人のような距離感で隣に座りながら華恋は答える。

「あはは、センパイが来るって知ってから、時間を計算して準備してたんですよ」

「マジか……。そいつは何と言うか、サンキュウな、氣い遣ってくれて」

「いえいえー、センパイの為ならこの程度の労力は全然無問題ですよ」

「……、」

「っつ言つセリフをさらりと言える辺り、この後輩は本当に凄いと思う。オレでなければとっくの昔に陥落して甘く絡め取られている事だろう。」

「えっとお、センパイ、お砂糖は一つでしたよねー」

そう言って、手元に置いてある洒落た小瓶の中から角砂糖を一つ

取り出しオレのコーヒーカップに落とす華恋。

「おう、悪いな。お前は確か七個だったよな」

それに感謝しつつ、オレはひよひよいつと角砂糖を七個、華恋のコーヒーカップに入れた。

「あは。センパイ、覚えてくれたんですかあ」

「そりゃあな。お前に関する事なら、何一つだって忘れる事あねーよ」

「……あはは、やっぱりセンパイは女誑しですねえ」

「だから、オレは自分に正直なだけだって言ってるんだろ」

そう。コイツとの思い出を忘れるなど、そんな事は有り得ない。

何せコイツには中学時代、比喻なく本当に命を救われているのだから。コイツがどれだけ色々なモノを犠牲にしてオレを救ってくれたか理解していて、それでもなおそんな大恩ある奴に関する事を忘れられるほど人間をやめてはいないつもりだ。

「自暴自棄になってたオレを身体張って受け止めてくれたお前の事だぜ？ 何一つだって忘れるワケにはいかねえさ。あれが無かったら、多分オレは自殺してたしな」

そう言って笑い返すと、不意に華恋は笑顔を消して俯く。そんな彼女を見て、オレは言葉選びをミスった事を理解せざるをえなかった。

「……前にも言いましたけど、アレは百パーセント私の自己満足の為でしたからあ……。私はセンパイに感謝されるような人間じゃなく……あ」

「それでも、だ」

だからオレは、言葉を遮って華恋の身体を抱き寄せ、髪を梳きながら語りかける。コイツがそんな悲しげな表情をしているのは、嫌だったから。

「オレがその百パーセントの自己満足で救われたのは、確かなんだからよ」

完全に身を委ねた華恋は、その言葉を聞くとオレの肩に頭を置いて目を閉じる。香るのは、オレが好きな香水の匂い。

脳裏に蘇るのは、最愛の恋人と最悪の結末を迎え、全てに対し自暴自棄なり自壊すら始まっていたあの頃。

“私が代わりになりますからあ。センパイの痛みも苦しみも辛さも怨みも憎しみも妬みも全部全部、華恋にぶつけて良いですよあ”

オレはその言葉に甘え、縋り、溺れ、損なった恋人の代わりとして華恋に依存した。自身の中にあつた悲しみや怒りを、全て華恋の身体に叩きつけた。

そうして気付いたのである。誰もアイツの代わりにはなれない事、損なわれたアイツは二度と帰って来ない事、そして あんな最低の結末を迎えてなおオレはアイツの事を愛していて、そんな彼女が損なわれた事を認める事が出来ていなかった事を。

……酷い話である。言ってみればオレは、かつての恋人への愛を確認する為に華恋を踏み台にし、その上で捨てたと同然なのだから。

だからこそ、オレは華恋の事は何一つとして忘れないと誓った。散々に甘えて、縋って、溺れて、にも関わらず愛する事は出来ないと言う結論を出したからオレだからこそ、せめて愛してくれる華恋の事は全て記憶しようと思ったのである。

その結論も結局は華恋に甘えているだけなので、それも含めてオレは一生この後輩に頭が上がらないのだろう。

「うーん、感謝ついでに、私の事を本気で愛してくれるようになってたら最高だったんですけどねえ」

「それは、まあ……って言うか、真面目な話の最中にお前は十二してんだよ」

オレは自分の太股と胸元を這う華恋の手に対し、ジト目で見つめる。それに対する反応は、小悪魔の微笑み。

「あは、だってえ、センパイが自分から抱き寄せてくれる事なんて殆ど無いですから、この機会について思いましたえ」

「……お前、まさかさっきの悲しそうな俯きは演技とかじゃねえよな？」

「んふふ、どうですかねえ」

楽しそうに笑う華恋を見て、オレは確信する。若干唐突に感じた悲しげな俯きは、こうしてオレに抱き寄せて貰う為の演技だったのだと。

「あー、クソ、騙された。つか流石にその引つ掛けはエグくないか？」

「そこは気付かないセンパイが悪いんですよ。そもそもその話題はもう決着がついた事ですからあ。私は自己満足百パーセントな自

分を全面的に肯定して、センパイは私への感謝を忘れずに私の“おふざけ”には極力我慢する……そう約束したじゃないですかあ」

そう。実は今と同じような遣り取りは既に過去にした事があるのだ。その時はまだ今ほど割り切る事が出来ず、互いに思う所も多々あり 例えば華恋は罪悪感や悲しさに溢れていたし、オレは申し訳なさとして自己嫌悪で引き籠りになった 今みたいな遣り取りを経て、取り決めたのである。

取り決め一、葉月華恋は利己的な自分を全面的に肯定しても良いが、その代わり罪悪感やそれに付随する諸々でネガティブになるのは禁止。

取り決め二、元カノを忘れる必要は無いが、御鏡悠夜は感謝の気持ちを常に持ち、葉月華恋が求めたら許せるギリギリまでの身体的接触を許可する事。

互いに押し潰されそうだった状態を打開する為のモノだったが、正直突っ込み所が満載過ぎる。

(つか取り決めって何だよ、取り決めって)

恐らく、適度にアルコールが入っていたのがいけなかった。互いの本音をぶちまける為に必要だったとは言え、胸の裡を吐き出した後の良く分からないテンションになったのは完全に酒に呑まれた結果だった。

もつとも、そんな取り決めた未だに二人とも護っている辺り、互いに思う所が多すぎるのだろう。

頬を上気させて潤んだ目をした華恋は、その反則的なまでの可愛さと共に言葉を紡ぐ。

「私はセンパイを絶対に諦めませんよ。もう既にいない人だから、浮気にはならないですしい。あとはセンパイが私にコロっで行ってくれば、ゼーんぶ解決ですう」

「今の所は有り得ねーから安心しとけ。……あー、それはそれとしてよ……流石にちょっと大胆すぎじゃね？」

具体的には、オレの下腹部より更に下の辺りを撫でまわす手とか。

「あはっ、センパイが望むなら、どこまででも良いですよあ」

「ん……」

視界に飛び込んで来るのは、制服の胸元から覗く双丘。と言うか、さつきから気になっていたのだが。

「お前、ブラしてねえな……？」

「……てへっ」

小さく舌を出して笑う華恋。片手はオレの下腹部に、空いた片手でオレの手を取り自分の太股へと乗せる。

「センパイだって、ちょっとは期待……したんじゃないですかあ？」

「いや、んな事あるワケねえだろ」

確かに軽くじゃれ合う程度に華恋と暇つぶしをしたい、と思ったのはその通りだが、これは流石に大胆過ぎるのではないだろうか。オレとしては軽いノリで髪の毛とかを弄ったり弄られたりをしつつ、華恋の家にある最新のゲーム機で遊ぶだけで何も問題はない、と言

うかむしろそうする気満々で来たのだが。

いや、童貞じゃないのでこの程度で戸惑う事は無いが　それでも、当然ながら拒絶したくはある。オレはアイツへの気持ちを忘れてないし、特に今日は、純情少女な神楽とデートしたばかりなのだから。

フラツシユバツクする、夕陽を背にして立つ神楽の姿。だが、何故だろうか？　そのイメージは段々とぼやけていき、意識が曖昧と薄れて行く。

「んふふ、隠さなくても良いですよ。忘れてケリをつけたいけど、忘れる事が出来なくて楽になれない　センパイのそんな二律背反については、よく分かってるつもりですからあ」
「うっ……」

ドンドン積極的になる華恋。今や彼女が手に取ったオレの手は、そのスカートの内側、際どいラインにまで接触している。当然、片方の手はその間も動き続けていて。

「ホント、そこまでセンパイに想われてるあの女に嫉妬しちゃいます。で・もお……もう割り切っても良いんじゃないですかあ？　据え膳は、美味しく食べる為にあるんですよー？」

それにい、と、甘く蟲惑的に囁きながら華恋はそつと耳に唇を寄せる。

「実はセンパイ、もう半分以上割り切ってるんじゃないですかあ？」

声を潜めた囁きに、心臓が大きく鳴る。

「会って間も無い女にココロ揺れる事は無くても……私みたいに付き合いが長くて、憎からず思っている相手だったら良いかも……とか思ってますよねえ？」

「いや、それは……」

おかしい、何故こんなにもクラクラするのか。この程度の接触は慣れている筈なのに、今日に限っては華恋の甘い一息が触れる度、身体の芯が熱くなり頭がぼうつとして来る。と言っか、今日の華恋はいつもに増して、色っぽい魅力に溢れていると言っか……。

「何も悪い事なんて無いんですよ。センパイは寂しがり屋さんですからあ。人の温もりが欲しくて、でも昔の自分とあの女に縛られているから自分から求める事は出来なくて……。全然、普通ですよ！今のセンパイが異常なんですう」

「あ……」

気付けばオレは押し倒されていた。そうされる事でより強く、より一層華恋の柔らかな肢体を意識する。

「愛されて、愛したい……ヒトとして当然の欲求を、センパイは無理やり抑えつけてる」

……。その鍵は堅いですけど、でも……。こうしてちよつと緩めるだけで、ほら、センパイはこんなにも私を求めていますよあ」

目と目が合うと、きゅつと彼女は目を細めてくる。気が付けば、彼女に取られた手はいつの間にか彼女の胸元へと導かれていた。

「ずっとずうっと、触りたいって思っていましたよね？ あの時みたいに、気持ち良くなりたい、メチャクチャにしたいって……思っ

ましたよねえ」

いや、それは違う。そんな事は無い……等、なのだが……。いや、そうだった、のだろうか？ よく、ワカラナイ。

何かがおかしい気もするが、正直どうでもよくなつて来る。

こんなに魅力的で、付き合いも長くて、自分を愛してくれる少女が目の前にいて、自分を誘っている。どうしてオレは、手を出していないのだろうか？

「んふふ、センパイは自我が強いですから、もうちょっと効き目が薄いかと思ってましたけどお……案外、ちょっとは対象として意識くれてたんですかねえ」

だったら嬉しいなあ、と、可憐な小悪魔のように微笑んで彼女は口付けを落とす。桜色の唇はふわふわと柔らかく、それでいて蕩けるような甘さを含んでいて、気付けばオレは完全にその口付けの虜になつていた。

「んん……んはあつ。やん、もうセンパイってば強引ですねえ」

くすくす笑う彼女の淫蕩な可愛らしさに、オレは自分の中の牡が強く彼女を求めている事を悟った。そう、このまま体勢をひっくり返し、抑えつけて、“あの日”のように彼女と一つになれるならそれはどんなに……。

「華恋……オレは、お前が……」

期待に満ちた彼女の表情を見ながら、熱に浮かされたように言葉

を発したオレは。

P r u u u u u

居間に響いた電話機の無機質な音を聞き、一瞬で意識が覚醒した。霧が晴れたようにクリアになる脳内で、オレは先ほどまで自分を支配していた感情に戸惑ってしまう。

オレは今、何をしようとしていたのか。

気付けば華恋はオレの上から降りていて、「ちえっ……あと少しだったんですけどねえ」などと訳の分からない呟きを漏らしていた。

「あー、電話、取らなくて良いのかよ？」

多少の気まずさを覚えながら問い掛けたオレに、ぶつくり頬を膨らませて華恋はそっぽを向く。

「良いんですよ。どうせあのクソ親ですしい。……本当、折角の時間を邪魔して、KYだなあ……」

後半の方は殆ど聞き取れなかったが、恐らく電話を掛けて来た親に対する不満だろう。とは言え彼女の家庭事情は知っているので、彼女の親への暴言を嗜める事も逆に同情する事も無い。

それに何より、彼女にとって嫌いな物事の第五位に“家庭事情に突っ込まれる事”が入っていると知っているオレが、彼女に対して何も言える筈がないのである。

付け加えると四位がゴキブリで三位がオタク、二位がデブだ。それを聞くだけで彼女の性格が分かると言うモノだろう。ちなみに、堂々の第一位はオレの元カノである“アイツ”だそうなの。

「うーん、気も殺がれちゃいましたしい……ゲームでもしますかあ？」

「おう、つか普通に最初からそれで良かっただろ。適当なパーティーゲームやろっぜ」

「じゃあゲームディスク持って来ますねえ」

そう言っただけで自分の部屋へと向かう華恋を見送りながら、改めてオレは自分の節操の無さに落ち込まざるを得なかった。

いや、確かに華恋の事は憎からず思っている。アイツと別れた現状、恐らく一番好きな異性は華恋だろう。友情的にも、恋愛的にも華恋からのベタベタとしたイヤ付きを受け入れている時点で慣れも存在するが、実はもう、オレの気持ちはアイツでは無く華恋に移り始めているのかもしれない。

(まあ実は無茶苦茶オレ好みだしなあ、華恋)

とは言え、だ。それでもオレの中にアイツへの愛情はまだまだある訳で、流石にそんな状態で別な女に手を出すほど軟派な男では無いつもりだ。

いやまあ、アイツへの気持ちにケリを付ける事が出来れば据え膳も美味しく頂くようになると思うが。

少なくとも、今はまだ無理だ。

「の、割には何故かすげえノリノリだったよな……クソツ。何でだ？」

催眠術は言い過ぎにしても　そもそもそんなモノ存在する筈無いが　何か暴走のトリガーはあった筈なのだが、分からない。思いつかない。

華恋が戻って来るまで考え込んでいたオレは、結局気の迷いや欲求不満なのだと結論を出す事にした。答えの出ない事を考えるのは時間の無駄であり、それならば華恋と一緒にレースゲームや落ち物、人生ゲームを楽しむ事だけ考えていた方が何倍も有意義なのだから。

そうして電源・非電源を問わずゲームで盛り上がったオレと華恋は　途中行つた罰ゲームはむしろ積極的に負けようとする華恋に焦らされた　やがて時計が午後十時を指し示した事で、解散の流れになった。

「ん〜、次はもっと御持て成ししちゃいますから、遠慮なく来て下さいねえ」

「おう、今日は楽しかったぜ。……あー、あとエロい事は自重な」

「あはっ、無理ですう」

「とか付けんじゃねーよ」

表現技法的に拙いのである、色々。

そんなやり取りを交わして、名残惜しくもオレは華恋の家から外へ出た。そのまましばし歩き、華恋の視線が届かない位置まで来た所で歩みを止める。

見上げれば星空が綺麗に広がっており、しばしその美しさに目を奪われた。星灯りが煌めく夜空を見つめながら、オレは数分ほど空を見上げ続けていた。

「ま、取り敢えず缶コーヒーでも買って帰るべ」

やがてポケットに手を突っ込みながら歩き始めたオレは、曲がり角を曲がった次の瞬間、身体に走る衝撃を感じた。

「つと、大丈夫かよ？」

咄嗟にぶつかって来た相手を支えたオレは、その人物が同じ年くらいの少女である事に気付く。確かこの制服は、この辺りで有名な某お嬢様学校の制服だったと思う。

「うう、何だか大木に頭をぶつけたみたいな……つとと、申し訳ないっす!!」

顔を上げた後に再度頭を下げた少女を見て、テンション高えなあど驚きつつヒラヒラと手を振る。

「いや、気にする必要はねえよ。ただまあ、急いでたのかもしれないけど、前方不注意はよくねえぜ？」

「やはは、いやー、本当に申し訳ないっす。サークルの帰りなんですけど、バスが深夜料金になる前に乗りたいと思っていたので……」

「ふうん？ まあ、オレには関係ねーけど、だったら無駄話してる時間は無いんじゃないかね？」

「やは!？ そ、そうっすね! それじゃあ名も知らないおにーさん、優しくしてくれてありがとうっす!」

ハツとした表情になって駆け去る少女に、変な笑い方をする奴がいるんだな、と思いながら再び駅を目指して歩き始めるオレ。

ちなみに、敬語を使わなかったのは外見年齢ゆえではなく、リボンの色が某お嬢様学校の一年のモノだったからだ。

「取り敢えず、今日はいつても以上に充実した一日でした、まるで所か」

無駄に呟いた後、欠伸を噛み殺しながらオレは帰路についた。

当然ながら、駆け去った筈の少女が俺を観察するようにつめていたなど、この時は知る由も無かった。

序章・3

神楽とデートし、華恋とゲームをした、その翌日。朝。オレは欠伸くびと共に通学路を歩いていた。

「あー、眠い。うぜえ。やっぱりサボろうかな」

「だ、ダメだよつ。ただでさえ御鏡くんは先生たちに目をつけられてるんだから」

「つつてもよお……。葵あおいは真面目ちゃん過ぎるぜ」

「御鏡くんが不良なだけ、だと思っけど……。真面目ちゃんをつまんない女の子なのかな、私……」

しょんぼりした様子で俯うつむく葵に、そこまでは言っただろ面倒くせえ、と内心で呟つぶやきながらワシワシと頭を撫でてやる。

「あー、そこまでは言っただろ。ウジウジすんのやめれ、綺麗な顔が台無しだぞ」

はうう、と顔を真っ赤にしてされるがままの葵から手を離し、少し乱れてしまった髪を整えてやりながら言葉を続ける。

「真面目が悪いなんて言っただろ。お前はそれで良いんだよ。オレが不良だから、むしろ釣り合いが取れて丁度良いくらいだ」

「そ、そうかな……？」

涙目の上目遣いで尋ねてくる葵に、本当に子犬っぽくて可愛いよなあと思いつつながら苦笑と共に頷き返しておく。これが赤の他人ならば面倒臭さゆえに適当にあしらっていたかもしれないが、友人関係にある葵に対してそれは有り得ない。

「おう、だから胸張ってそのままいりゃー良いんだよ、葵は」
「う、うん……ありがとう、御鏡くん」

お礼をされる理由は全くないが、それがコイツの味だろうと思いい直して素直に受け取っておく事にした。

今更だが、オレの隣を歩く少女　葵はクラスメイトである。ひよんな事から知り合い、気付けばこうして一緒に登校するようになっていた、学内で二番目に親しい女子だ。

青みがかった黒髪を二つ縛りにした、優しげな面立ちと垂れがちな愛らしい瞳が特徴の女子。弓道部に所属しており、その腕前は達人に絶賛されるレベル。成績が致命的に悪い点を除けば、パーフェクト美少女を絵に描いたような存在である。家事も万能なようだし。

付け加えれば、オレはそこまで重要視しない要素だが、窮屈じゅうくつそうに制服を押し上げる二つの膨らみは一種の凶器かもしれない。いや本当、正直発育し過ぎだと思っただが。

「ところでよ、葵。お前ってさ、確か姉さんがいるとか言ってたよな」

「え、あ、うん。いるよ、二年に」

そんな彼女の名前は　一之瀬葵。

つまり、まあ、葵は昨日デートした一之瀬神楽の妹らしいという事だ。名前に加え、聞いていた髪の色が同じでお洒落な人、という要素とも合致したので、間違いないだろう。

実は神楽の名前を聞いて驚いたのは、その事も理由だったりする。

「お前の姉さんってどんな奴なんだ？」

葵から神楽への印象が気になった為に質問した直後、オレは棚上げしていた問題を思い出す。

（って、そう言えば学校で会った時何て言っか考えてねえな……）

同じ高校にいるのだから遭遇する可能性は多いにあるし、何より向こうから会いに来る可能性も決して低くはないのだ。

完全に失念していた己の迂闊うかつさを呪いながら葵へと視線を向けたオレは、

「……、うーん、そうだなあ」

彼女の横顔に僅か浮かんだ色を見て、即座にこの話題が地雷だったと気付いた。

気のせいにも思える表情の陰り。だがそれは気付けば明白で、それだけで彼女が姉に対してどんな感情を持っているのか把握出来た。だから。

「ま、どうでも良いか。聞いてみたけど、実はお前の姉さん自体にはあんまり興味ねえしな」

オレはそんな嘘混じりの言葉を付け加える事で、この話題の転換

を図る。

「え、でも……」

突然の話題転換に混乱する葵。それは予想の範囲内だったので、オレは更に言葉を続ける。

「何だかんだお前の事あんまり知らねえから、もっと知りたいと思つて聞いたけど……よく考えたら、お前の姉さんの話を聞いてお前の事が分かるワケじゃねえしな」

胸に抱いているであろう劣等感は、分かってしまったけれど。

「……」

無言で、と言うよりも頬を赤くしてぼやーとした状態の葵に苦笑しつつ、言葉の間に気を付けながら誤魔化している事を悟られないように口を動かし続ける。

「お前はお前であつて、お前の姉さんがどんな奴でもお前の価値がオレの中で変わるワケがねえんだ。だったら聞くだけ無駄だろ？」

最後の一言は、劣等感を覚えているであろう葵へのフォローのつもりで続けたが、繋げ方が無理やりな上に論点も当初とズレており、違和感を覚えられても仕方がないセリフ。

だが。

「そ、そうだよね、うん……」

幸せそうに嬉しそうに目を細める葵を見て、オレは自分の判断が正しかった事を確認する。葵自身の肯定と、あくまで興味があるのは葵について、と言う二つの要素を満たせば、多少言葉が不自然でも誤魔化せると踏んだのは間違いではなかったようだ。

葵の姉に対する劣等感とオレに対する好意に付け込んだ形になるが、葵が幸せでオレも精神衛生上幸せなのだからこの程度の誤魔化し、何も問題あるまい。

(まあ、“ソレ”もどうするか問題なんだよなー)

ソレと言うのは、葵がオレに抱いている“好意”に関して。

いや、ここまではからさまな態度を見せられれば、正直誰でも分かると言うモノだろう。暗邸がよくやる美少女ゲームの主人公、あんな鈍感な存在なんて幻想だ。

不自然にどもりながら積極的に昼飯を共にし、途中から道が同じだから一緒に登校しようと真つ赤になって告げ、オレの言葉の一つ一つに面白いように初心な反応を返す……これで好意に気付かない男は、ぶっちゃければ阿呆以前だろう。

今でも理由はサツパリなのだが、好かれてしまった現状、好意の原因は些細な事。問題は、どうやってそれに対処するか。

オレは葵との会話や時間を気に入っている。これを失いたいとは思わない。と言うより維持したい。だがそれはあくまで“友情”であって、“思慕”では無いのだ。そもそもかつての恋人への未練を断ち切れない現状、オレが異性として葵を好きになる訳もないのだし。

神楽に対するのと、同様に。

「それでね、お隣さんで子犬が産まれて……」

気付けば話し始めていた葵に適度な相槌あしづちを打ちつつ、オレは一之瀬姉妹への対応を考え続けていた。

そうして二人で歩き、校門を潜って玄関へと向かう途中で、オレたちの前に一人の男子生徒が跳び込んで来た。ちなみに、比喻無く真横からいきなり跳躍して来たのである。

空中で一回転しながら登場し、親指を立ててキラリと光る歯を見せる男。

「やや、これはこれは一之瀬嬢に御鏡殿、今日も仲良く登校ですか
な？」

「……」

オレは溜息を吐きながら、葵を庇うように前に出てから男に側頭蹴りを叩き込んでやった。

疾ッ　そんな風斬り音の直後に届く砂利を擦る音。

「うおっ！？　あ、危ないではないか御鏡！」

「うるせえ、お前は永久に土に埋まってりゃあ良いんだ」

間一髪で蹴りを避けた男に舌打ちしつつ、抗議に悪態で答える。

この奇妙極まりない男の名前は二ノ宮健介、このみやけんすけ何故か中学時代から腐れ縁が続く友人だ。黙っていればクールな二枚目なのだが、口を開けばおかしな発言ばかりする為、学内では満場一致で変態扱いされている。

いや、コイツが単なる変態でない事は分かっているが、コイツの変態でない側面は残念ながら浅い付き合いの奴には分からないのである。

つまり、どう足掻いても二ノ宮健介という男は変態のレッテルを剥がせない訳なのだが。

「あ、えっと、わ、私ちよつと部室に用事があるから、ここでお別れっ」

あからさまに健介を警戒して去って行った葵を見送って、その姿が見えなくなってからオレはジト目で健介を睨む。

「つたく、人の朝の清涼剤を追い払ってくれやがって……何か怨みでもあんのかよ？」

「はっはっは、すまん、そんなつもりでは無かったのだが。うむ、だがお前も悪いぞ？　一之瀬嬢ほどの美少女と仲良く登校するなど、羨ましいにもほどがある……」

「……うし、今の科白は録音したから、紫亜子ちゃんに聞かせてやるか」

「マジすいませんでしたー！！」

見事なスライディング土下座を見せた健介に呆れつつ、「ほれ、さっさと行くぜ」と立ち上がるよう促す。

……まあ、つまり二ノ宮健介とはこう言う男だ。ノリの良すぎる馬鹿、とでも言おうか。彼曰く同士と日夜密会し、様々な悪事を企てているらしい。この奇抜さゆえに、学内で知らぬ者はいない。ほぼ全教科トップで合格した上で、新入生代表挨拶を務めた際にコイツが言った出鱈目な発言は、今でも語り草となっている。

出自も家族構成も私生活も何もかもが謎の男。変態馬鹿。唯一分かっているのは、こんな変態の癖に婚約者がいると言う驚くべき事実だけだ。ちなみに婚約者の名前は三乃院紫亜子さんのいんと言って、さる名家のお嬢様らしい。二、三の顔合わせしかした事は無いが、郊外にある自宅から出られぬほど病弱であるにも関わらず、それを感じさせない明るさとひた向きさを持った女の子だ。

正直に言えば、今でもどうして紫亜子ちゃんが健介に惚れているのかわからない。幼馴染らしいのだが、恐らく紫亜子ちゃんの心は菩薩ぼつのように広いに違いない。

「あ、うむ。そ、それは良いのだが、御鏡？ ま、まさか本当に録音などはしてないだろうな……？」

立ち上がりながら、恐る恐ると言った様子で尋ねて来る健介。そんな彼に対し、「当たり前前の事言わせんじゃねえよ」と半目になって返事をしたオレは、ポケットの中にあるICレコーダーの停止ボタンを探り押しながら健介と共に歩き出す。

「ははは、そうだろう、そうだろう。俺はお前を信じていたぞ！ さっきの土下座は俺なりにお前の清涼タイムを奪った事を悔やんだからこそ、なのだ。お前がそんな事をするような奴ではないと、俺だけは信じているぞ、うむ」

「安い土下座だなあオイ。ま、別に良いけどよ」

嘘は言っていない。何故なら健介の言葉に対し、オレは“当たり前”の事言わせんじゃねえよ”と返しただけなのだから。ちなみに、ICレコーダーを持っているのは授業中に眠りしても授業内容が記録出来るからだ。授業自体をサボる際も教室の机にバレぬよう設置する事で、家に帰ってからの勉強に活かせる為相当に役立つ。

(このレコーダー、マジどうしようかなー)

そんな事を内心で考えながら、オレたちは下らない会話を交わしつつ教室へと向かった。

*

「そう言えば、御鏡よ」

「あん？ どうかしたか？」

下駄箱で靴を履き替えていたオレは、靴紐を結びながら健介に言葉を返す。

「いや、同志から得た情報によればお前は昨日、あの一之瀬神楽とデートをしていたそうだな」

「……」

ピタリ、と手を止めてオレは健介へと振り返る。視界に入るのは不敵な笑みを浮かべた健介。

「ふふん、どうやらその反応は当たりのようだな」

「あー、まあそりゃそうか。休日だし、見られてても不思議はねえわな。んで、それがどうかしたのかよ？」

「いや何、少しばかり珍しかったからな。デートに誘われたとしても、お前はまず間違いなく断るだろう？」

「いや、まあ、普通はそうなんだけどよ……まあ歩きながら話そうぜ」

健介を促しながら思い出すのは、絶対に譲らないという強い意志を込めてオレを見据えていた瞳。

「もしあそこで強引にでも断って無視してたら、多分、粘着ねんちやくになってたと思うんだよなあ……」

「ほう、話した事はないが、噂や同士からの情報を聞く限りヤンデレちゃんになるようなタイプとは思えんが？」

隣りを歩く健介は興味深そうにオレへと視線を投げ掛け、それに応えるようにオレは頭を掻きながら口を開く。

「そうじゃなくてよ、一之瀬神楽は良くも悪くも純情直進型少女なんだわ。前も神楽みたいなタイプに会った事があるから分かるんだけどよ、ああいうタイプは思い切って互いに精一杯楽しんだ方がスッキリするんだよな。後腐れなく縁を切れるっつーか、気持ちを昇華出来るっつーか。頭が良いからこそこの気持ちも察してくれるしな」

そう。これはあくまで過去の経験からの推測でしかないが、オレが思うに神楽はあそこで断っていれば意地でもオレの事を調べようとしていた気がするのである。そして最悪、本人が気付かぬまま粘着的行動を行うストーカーになっていた可能性も。

「なるほどな、流石はモテモテプリンス御鏡悠夜殿だ。女性のタイプを見抜くのも扱うのもお手のモノと言った所か」
「勘弁してくれよ、そう言うの。オレはどうすりゃお互いに傷付かないかいつだって考えてんだからよ」

最もその結果が現在の一之瀬葵との曖昧な関係であり、別な形でスッキリして片想い少女になってしまった純情直進型少女の誕生である為、間違っても女性の扱いが上手いなどとは言えないだろうが。

確かに生まれた時点で特異な性質を持っていたオレだが、それは身体的な面に関する事だけであり、内面的に言えばただ人並み以上に面倒事に巻き込まれる事が多い高校生でしかないのだ。アニメや漫画のプレイボーイ補正が掛かった奴らと同じ真似なんぞ、出来る訳がない。

知り合いの占い師の言葉を借りるなら、合縁奇縁に魅入られた異端の寵児ちようじ だったか。

「……ん？ オイ健介、ありゃ一体何だ？」

これ以上この話題を続けるのが億劫おっくうになった事もあり、何か話題になる事はないかと視線を巡らせたオレは、中庭にて多数の生徒が群がっている光景を目撃した。異常とも思えるその光景の中心には一人の女子生徒がいて、何故かヴァイオリンを弾いている。

「ああ、そう言えばお前は一週間ばかり入院していたのだったか。うむ、アレはお前がいない間に復学したこの高校の生徒だ。その美しさと毎朝弾く素晴らしいヴァイオリンの音色に、ああして生徒たちは引き寄せられると言う訳だ」

「ほー、ソイツはまた、何とも凄いと云うか非現実的と云うか。学

内で堂々とんなモン弾くなっつーか、復学って事は休学してたのか。何があつたんだ？」

「さてな、家庭の事情だそうだが……オレにもよく分からん」

興味も無いしな、と付け加える健介。美少女好きなこの男が“美しい女子”に興味すら見せない事に、軽い驚き。

「随分珍しいじゃねえか」

「いやなに、俺の灰色の勘が告げているのだよ。アレはかなり厄介な女だと。下手に興味を持って取り込まれでもしたら敵わん」

「ふうん……」

脳細胞じゃないのかよ、と言う突っ込みは脇に置いておき、オレはむしろ健介がそこまで言う彼女に少しだけ興味を覚えた。

「ああ、一応忠告しておくが、もしあの女に近付くなら決して取り込まれるなよ？ 私見だが、アレはこの校内でも有数のDQN女だと思われるからな」

「DQNって……いやまあ、別にこっちから関わりに行くつもりはねーよ」

何せ、今のオレには一之瀬姉妹への対処と言う大きな問題があるのだから。これ以上問題が増えるのは、正直に言ってしまうえば面倒くさい。

「そうか。まあ、そう言い切れるお前ならばあの女と接近しても切り抜けられるだろう。余計な不安だったな、うむ！」

何故かオレが彼女に会う事前提で話す健介に胡乱な眼うろんを向けつつ、オレはもう一度視線を窓の外へ向けた。

「んで、何て名前なんだよ」

「うむ。花京院^{かきょういんつきこ}月子 天下の花京院グループ次期会長だ」

いつもと変わらぬ軽い口調で、サラリと健介は爆弾発言をしてくれやがった。

「ってオイ、花京院グループって……“あの”花京院グループかよ！？」

「ふむ？ まあ、そのお前の想像する花京院グループで間違いあるまい」

花京院グループ 日本を代表するコングロマリットの一つであり、財界と政界のどちらにおいても絶大な影響力を誇るグループ。

「そんなビッグがウチの学校にいるとか……信じらんねー」

「まあ、俄^{にわ}かには信じ難い事実ではあるがな。確かに長い歴史を持つ霧桜だが、それを踏まえても奇妙だ。……ふん、それが俺が警戒する理由でもあるがな」

鼻を鳴らした健介は、ところで、と言葉を繋げて興味深げにこちらを見つめて来る。

「お前の先の驚きよう、単純に有名グループだから、と言うだけでは説明のつかない色があつた気がするが……聞いても？」

「……っ」

健介は時々恐ろしいほどに鋭くなる。今回も正直、内心で舌を巻かざるを得なかった。

「あー、まあ何つーかだな……」

だが、果たして話して良いモノなのだろうか、あの“冗談のような一週間”において起きた出来事を。

剣林弾雨が平然と飛び交う、様々な悪意が複雑に絡み合った果てに生まれた非現実的な一週間。人体実験の果てに生まれた異形や強化人間など、科学のおぞましさと進歩を圧倒的なまで見せ付けられたあの日々。そしてそれらを平然と併せ呑む、花京院グループに代表される日本国内外の様々な勢力が入り乱れる権謀術数の裏社会。

性質の悪い小説みたいなの出来事は、表の社会しか知らぬ健介にとつては到底信じられるモノではあるまい。更に言えば、知るだけで健介にも害が及ぶ可能性もある。

常時ふざけた態度の健介だが、数年来の付き合いからコイツが真剣にオレの身を案じている事くらいは分かる。だからこそ、オレは申し訳なさを感じながらもこう口にするのだった

「何でもねーよ。ほれ、さっさと行くぞ。時間は有限なんだからよ……フツ。了解だ」

それ以上追及しない健介に感謝しつつ、オレたちは教室へと向かった。

*

健介と別れた後、オレは自分の所属する教室に向かう途中で、一

人の少女を視界の端に認めた。

「よう、葵。何やってんだよ?」

オレの言葉にビクツと身体を震わせ、バツが悪そうに少女
—
之瀬葵がこちらへ顔を向ける。

「あ、あはは……さっき振り、かな?」

「だな。んで、こんなに早く教室に着いてるって事は、やっぱり部
室に云々は嘘だったワケだ」

「あうう……ご、ごめんね。そ、そのう……」

「気にすんじゃねえよ。つーか、むしろあんな変態を前にしたら当
然ってモンだろ」

ひらひらと手を振って言えば、あからさまにホツとした様子の葵
の姿。彼女は照れた風に頬を赤くして、「二ノ宮くんが悪い人じゃ
ないのは分かってるんだけど……」と言葉を濁す。

そのお人好し具合に呆れつつも、どこか微笑ましいモノを感じて
オレは苦笑する。

「ま、取り敢えず教室に入ろうぜ。もうすぐ朝のHRが始まるだろ
うしな」

「そ、そうだね」

教室に入ったオレたちは互いの席に座り、再び話を始める。ちな
みに、葵の席はオレの隣だ。

「それにしても、御鏡くんって凄いやね」

「ん? 凄いつてのは、健介とつるんでる事が、か?」

「う、うん……。だって、ほら、健介くんってその……アレだし」

葵の“アレ”と言う言葉に吹き出しつつ、まあアレだしな、とオレも同意を返しておく。「でもま、別にそんな大した事じゃねえよ。慣れると面白いぜ?」

「な、慣れたくはないかも……」

嫌われてるなあオイ、と流石に健介への同情を禁じ得ないオレだった。

「そ、それよりッ!!」

と、不意に葵がぐぐつと身を寄せて来た。オレとしては構わないのだが、制服の胸元から谷間が見えている事に彼女は気付いているのだろうか?

指摘して勘違いされるのも面倒だったので、オレは葵の顔を見るようにして胸元へは視線を送らなかつた。何と言えば良いのだろうか、確かに人並みに性欲はあるが、葵の事は“そう言う対象”として見られないのである。

友人である事も理由の一つだが、何よりも葵の行動一つ一つに微笑ましさを感じているのが理由だろう。非常に愛らしい小動物を見ているような、そんな感じ。

「さ、さつき友達から御鏡くんっぽい男の子が昨日女の子と歩いてたって聞いたけど、本当なの!?!」

「……またいきなりだなあ」

(どんだけ知れ渡るのがはええんだよ霧桜！)

などと内心で突っ込み。まさか友人二人から連続して同じ話題を振られるとは予想すらしていなかった。

だからこそ僅か動揺してしまったが、葵の唐突な切り出し自体には慣れていたので、即座にオレは気分を落ち着ける。

「まあ、取り敢えず昨日は中学時代の後輩と会ってたぜ」

嘘は吐いていない。昼間に会っていたのは一之瀬神楽だが、夜にはきちんと後輩である葉月華恋の家で華恋と会っていたのだし。

それも自分に対する方便ではあるが。本当の事を言えば間違いない地雷を踏む事が分かっているからこそ、オレは何も告げないのである。

葵が姉である神楽への劣等感諸々を持っていると言う事を鑑みれば、オレに好意を抱く葵がオレと神楽のデート話を聞いてどうなるか想像するのは容易い。

だからこそ、神楽の存在は徹底して隠す。幸いにして、その葵の友人とやらはオレと歩いていた相手が神楽である事には気付いていないようだし。

「そ、そっか……」

葵が浮かべる、安堵と不安が入り混じった表情。オレは彼女が何を悩んでいるのか察し、なるべく自然な流れで不安を晴らせるように言葉を紡ぐ。

「ダチの頼みでパソコンのパーツ買いに行ったただよ、偶然会ってな。ついつい話し込んだんだよ」

「えっと、そつか……。じゃあ、その後輩は彼女とかそう言うんじゃないんだよね？」

「彼女？ おいおい、冗談だろ。アイツはそんなじゃねーよ。それ以前に、オレには彼女とかいねえしよ」

「そ、そうなんだ……」

目に見えて安心した風な表情を浮かべる葵を見て、素直な奴だなあと苦笑。もちろん表には出さない。そして一頻り^{ひとしき}内心で苦笑した後、頭の片隅で囁かれる、自分が酷い人間だと言う自覚。

（分かつちやいるんだけど……どうしたもんかなー。やっぱ、こっちから直接切り出した上で振るか？）

状況さえ整えばいつでも振れるだけの誠意はあるが、オレが一番怖いのはこの友人関係が壊れてしまい、お互いに不幸になる事だ。オレだけが不幸なるならば構わないが、それで葵まで必要以上に悲しませるのは絶対に御免だった。

（それとも、今のスタンスは逃げ、か？）

不意に思い出すのは、二週間ほど前に健介に言われた言葉。

『まあ、お前が相手の気持ちに気付かぬ振りをしている事をとやかくは言わん。お前なりに誠心誠意真剣に悩んでいるのは理解しているし、友人関係を崩したくない、と言う気持ちは至極当然だしな。だが、それでは答えを先延ばしにしているようなモノだぞ？ 相手は既に変わった。にも関わらず今まで通りに過ごしていれば、歪み

が生じるのは当然だ。その歪みが蓄積された果てがどうなるか……
言われずとも、分かるよな？」

「分かつちゃあいるんだけどな……」

「？ 御鏡くん、何か言った？」

「いや、何でもねえよ」

思わず漏れた呟きに反応した葵に、ひらひらと手を振って答えながら一先ず思考に区切りを入れる事にした。

(まあ、取り敢えず暗邸にも聞いてみるか……)

暗邸とは高校に入学した直後に知り合った仲だが、放課後に毎日アイツの家に入り浸るほど関係は良好だ。信頼度をランキングにすれば、華恋、健介に続いて人生で三番目にランクインしている。だからこそ、この厄介な問題の解決にも力になってくれると素直に信じる事が出来る。

ちなみに、華恋には相談しない。華恋なら迷いなく「いつそ派手に振っちゃえば良いじゃないですかあ。恋人役ならオツケーって言うか、むしろ本当に恋人に……」と言うに決まっているからだ。

表面上では葵と会話を交わしながら、“現実逃避ではないのか”と言う疑問が内心で渦を巻いていて。

ただ友人でいたいだけなのに、どうして此処こゝまで悩まなければいけないのだろう、と胸の裡で溜息を吐きながらオレは視線を窓の外へと向けた。

天気は、オレの迷いを映し出したかのように曇り始めていた。

序章・4

突然だが、人生はままならないモノだ。望んだモノは手に入りにくい癖に、望まないモノはあっさりやって来る。

オレの今の状況が、正にソレだった。

「ふふっ、どうしたんですか？ 悠夜さん」

「いや、まあ何て言うか……」

畳と掛け軸、茶器に引き戸と言った純和風の空間。全国共通ではぼ学内唯一の和室となるであろう、茶道部の部室。穏やかな日差しが差し込むそこで、オレは一人の女子生徒と向き合って茶を飲んでいた。

烏の濡れ羽色の髪をさらりと流し、驚くほど白い肌は白磁の如き美しさで、秀麗な眉目と愛らしい口元が整った顔立ちを更に引き立てている、そんな美女。

花京院月子 数時間前に健介との話題に上った、規格外の背景を持った女子。

そんな彼女が今、オレの眼前にいる。

(どうしてこんな事になったんだろうなあ、畜生)

教室で葵と話していた時は何も問題は無かった。一時限目と二時限目も何気なく過ぎ、トイレへ行く為に教室を出た所も特におかしな事は無かった。

問題だったのは、そう。トイレから教室へ戻る途中で、教師から頼まれたらしい大量の資料を運ぶ三年生を見てしまった事だった。何となく放っておけず声を掛け、驚く彼女を手伝ったのが今の状況を招いた原因だろう。

『本当に助かりました。ありがとうございます、悠夜さん』

思えば、見ず知らずの三年生がこちらの名前を知っている上に嬉しそうにしていた時点で、オレはそそくさと立ち去るべきだったのだ。

彼女から花京院月子だと自己紹介をされ、健介と共に遠目から眺めていた時とそう言えば特徴が一致すると思い、柄にもなく驚いて隙を見せたのが更にいけなかった。

お礼がしたい、是非昼休みはお昼を一緒にしよう、良い場所を知っていますと立て続けに告げられ、気付けばあれよあれよと言う間に一緒に昼飯を食べる事になっていたのだ。

何よりも恐ろしいのは、こちらの隙を突く彼女の巧みな話術だろう。実に巧妙に逃げ道を塞いだ上で、無理やり逃げる事が出来ぬように“茶道部の後輩である一之瀬葵について相談がある為、彼女と仲が良い御鏡悠夜に相談がある”と告げて来たのである。

本当に恐ろしい、と思う。

ちなみに、葵が茶道部と弓道部を兼部している事自体は既に葵自身から聞いていた。こんな形でその事実がオレに関わって来るとは、流石に予想していなかったが。

「どうしたんですか？ 悠夜さん」

花京院センパイは少し首を傾げる。柔和な笑みを湛えて、とても優しい眼差しで。慈愛に満ちた女神か何かではないかと錯覚してしまうのは、恐らくオレだけではあるまい。

「まあ、今の状況に驚いてるだけッス。何せ、オレの目の前に学内有数の麗人がいるんで」

「まあ、お上手なんですね」

上品に笑いながら、でも、とセンパイは言葉を続ける。

「もっとフランクに話して良いですよ？ 何でしたら月子と呼び捨てにしても構いません」

「呼び捨ては置いておくとして……本当に良いんすか？ オレ、すげえ口悪いッスよ」

「はい、構いません。むしろ、話し辛そうな悠夜さんを見てはこちらが申し訳ない気分になりますから」

「……、あー、じゃあ取り敢えず、素で話させて貰うぜ。不愉快だったらいつでも言ってくれや」

そこまで言われたら仕方ないよな、と心の中で自己弁護しながら慣れない話し方をやめて普段通りの喋り方をする。

すると、まるで待ち望んでいた言葉を聞いたかのようにうつとりとした顔になり、センパイは胸の前で手を合わせた。

「ふふ、素敵です。私の回りの子たちはとても丁寧で、それはそれで好ましいのですが……悠夜さんのようなタイプの方は、今までい

なかつたんです」

だから新鮮です、と嬉しそうに告げる花京院月子。オレはその言葉にガシガシと頭を掻きながら答える。

「まあ、そう言ってもらえるなら嬉しいケドよ……」

それは上級生としてどうなのよ、と思いながらそんな事は口に出さない。突っ込む事が怖いのも理由の一つだが、花京院月子と言う存在自体が突っ込み所満載で既に突っ込む気も失せていたからだ。

何よりも気になるのは、何故それほどまでにオレに好意を見せているのかと言う事だ。初対面でありながらここまで好かれるのは、正直異常だと思う。会話の感触から、一目惚れなどでは無いようだし。むしろ、オレの事をよく知った上で好意を持ったと言った感じなのである。

だからこそ、オレは柄にもなく戸惑わざるを得なかつた。先ほどから会話の主導権を握れないのも、オレ自身が花京院月子を計りかねているからだ。

「つーか、良いのかよ、オレと二人きりで飯なんて食って。センパ伊の取り巻きが黙ってないんじゃないかねーの？」

「それに関しては問題ありません。こうして二人きりで会っている事は、他の人たちには内緒ですから」

「はあ……まあ、それなら良いけどよ」

見付かつた時の面倒くささを思えばゾツとするが、彼女は全くその時の事を心配していないようだった。楽観的なのか、それともバシない確信でもあるのか。

(まあ、後者だろうけどな)

花京院月子は、オレを昼飯に誘った際の口八丁を鑑みるにかなり頭の回転が速い。賢しいと言い換えても良いだろう。だからこそ、バレない対策をしている筈である。

「まあ、取り敢えず。そろそろ本題に入ろうぜ」

そこまで考えた所で思考を切り替え、センパイ手ずからいれてくれたお茶を飲みつつ、好い加減このよく分からない状態に痺れを切らせたオレは話を切り出す事にした。

「？ 本題、ですか？」

……したのだが、返って来た反応は不思議そうに小首を傾げるモノだった。それを見て、オイオイと内心で突っ込みを入れる。

「あー、いや。葵に関する相談があるとか言ってたからよ。それが本題なんだろう？」

そう。センパイのその言葉が無ければ、オレは間違いなく無理やりにも逃げていた。逆説的に、その言葉をセンパイが吐いたからオレは此処にいるとも言える。

そうしてオレを留める楔として“葵の話題”を利用したのだから、オレをこの場に居続けさせる為にもセンパイが葵に関する話をしなければいけないのは自明の理。

まさかそれすら方便と言う事はあるまい、と夕力を括っていたオ

レは やはり花京院月子の事を、全く以って理解出来ていなかったのだろう。

彼女は満面の笑顔で口を開き、そして。

「ああ、あの言葉は嘘です。葵さんは非常に優秀で模範的な生徒ですから、彼女に関する問題なんてある筈がありません」

何の臆面もなく、さらりとそう言っただけのけたのだから。

「なっ……」

絶句。いつそ清々しいほどの笑顔のセンパイを前に、オレは珍しく動揺を露わにしてしまう。

(この女、正気か……!?)

「いや、ちょっと待ってくれよ。オレが此処に来たのは葵の話をする為なんだぜ？ それが嘘なんて、そいつは……」

「ええ、申し訳ないと思っています。でも、この位の嘘でなければ悠夜さんは私と一緒に過ごして下さらないでしょう？」

当たり前だろうがこの性悪女、と叫び出そうとする衝動を抑え込みオレは努めて冷静になろうとする。確かに想定外の反応だったが、ならば此処から立ち去れば良いだけの話なのだ。花京院月子は想像以上に性悪で頭が悪かった、それだけの認識を持って教室へ帰れば良いだけなのだ。

「……、じゃあ、つまりオレはもう此処から立ち去って良いって事なんだよな？ 此処へ来た理由が失われたんだからよ」

「いいえ、ダメです。悠夜さんは此処にいなければいけません」

だが、そんなオレの気持ちを打ち砕くように花京院月子は即答する。オレはその言葉で、もはや驚きを通り越し呆然とするしかなかった。

(何なんだ、この女？ 常識を知らないのかよ!?)

頭がおかしいとしか思えない。もはや既に、彼女が何を言っているのかも理解出来ない。意味が分からない。花京院月子の余りの異質さに怖気が沸く。

「悪いけど、もう付き合えねえ。オレにはアンタが何を言ってるのか分からないし、何をすれば良いのかも分からない。だから帰らせてもら」

「ダメです。悠夜さんはここに、私の傍にいなければいけないのです」

「……………」

立ち上がるうとしたオレを制したのは、袖を掴む花京院月子の意外な力強さだった。その瞳は真っ直ぐにオレへと向けられ、表情には絶対に逃がさないと云う意志が強く現れている。

「……………」

気持ちの悪さは、一先ず飲み込む。

一体、何が彼女をここまで駆り立てるのか。何故ここまでオレに執着するのか。頭が悪い以前に理解不能な言動は、何に基づいているのか。

そうして疑問ばかりが積み重なる中で、最悪と言っているいい心象の中で、それでも“その言葉”が口から零れたのは　こちらを見据える彼女の、その瞳の奥にある強い意志の所為だったのだろう。

「……何で、そこまでオレに執着するんだよ」

葵の話題が嘘だと言うカミングアウトからここに至るまでの流れは、完全に意味不明なモノだ。気持ちが悪い。しかし、それでもそれだけ強い瞳を見せるのだから、そこには相応しい理由がある筈である。

それ如何によつては、この既知外としか思えない言動が全く正しいモノである可能性も否定出来ないのだから。

「そう、ですね……。やはり、お話すべきでしょうか……」

オレの言葉でしばし眼差しを伏せた後、何かを決意するように再びオレを見据えた花京院月子。

そして。

「貴方は前世において、私の夫であり星の守護戦士でもあったユーヤ・ウエルシュタインの生まれ変わりなのです。貴方は忘れているかもしれませんが、私たちは何時如何なる時でも共に在り続けると誓い合った仲であり、神に祝福された永久の番。だからこそ今生の世、この学生として生きる現在いまにおいても、せめて休み時間や放課後の限られた時間だけは……」

オレは、袖を掴む手を振り払って全力で逃げ出した。

「ああ……、行ってしまわれました……」

御鏡悠夜が去った後の茶道部の部室。一人残された花京院月子は悲しげに、そつと目を伏せる。その瞳から零れるのは、一筋の光。

「やはりまだ思い出せていないのですね、ユーヤ様。私はこうして思い出したと言つのに……やはり、黒き魔女の呪いは健在なのですね」

その光景は、抜き取ればそれだけで名画になりそうな程に美しいモノでありながら 彼女の呟く言葉が、全てを台無しにしてしまっていた。

そう。彼女は、心底から御鏡悠夜が前世の夫であると信じ切つてしまっていた。そこに偽りはなく、だからこそ彼女は躊躇わない。迷わない。どのような手段を使つてでも、御鏡悠夜を傍に置こうとする。

それが正しい事であると、信じ切っているから。

傍から見れば単なるDQN電波だった。

「あの日、星の終焉が迫る中でユーヤ様が下さった言葉……それが

あつたからこそ、幾星霜の時を経て私に貴方を愛し続ける事が出来た。こうして再び出逢う事が出来ました。だからもう二度と離しません。今は思い出せないかもしれないかもしれませんが、すぐに思い出します」

そこまで言うてから、何を想像したのか頬を赤らめる月子。頬に手を当てながら、うっとりとした表情で彼女は呟く。

「ああ……ユーヤ様。お慕っています、前世から」

……

「有り得ねー、マジキチー。冗談キツイぜ」

オレは冷や汗を掻きながら特別棟 音楽室や美術室などが纏められた棟 の廊下を一人で歩いていた。そうして思い返すのは、先ほどまで会話を交わしていた花京院月子の事。

「何だよアレ、電波とかDONとか、そんなチャチなモノじゃねえだろ常識的に考えて。くそっ、くそっ、何であんな既知外に目を付けられるんだよ」

百パーセント己が正しいと信じて疑わない、あの瞳。前世などと言ふふざけたモノを心底から信じ、有りもしない想いを遂げようとする歪な愛情。

思い出しただけでも寒気がする。

(あー、クソ、時間無駄にしたじゃねえか。これなら葵か健介と一緒に食ってた方が万倍もマシだったじゃねえかよ畜生)

とは言え後悔は先に立たないからこそ後悔なのであり、だからこそこれは全く無意味な怒りの発露に過ぎなかった。

「……はあ。まあ取り敢えず、今日は何かもうどーでも良い。サボるか」

何とか思考を切り替えて、気分転換に街へ繰り出そうと思いつ。適当に繁華街のゲームセンター辺りで遊べば、それなりに気も紛れる事だろう。

そんな不健全過ぎる思考と共に特別棟を出たオレは、教室に戻らずそのまま校門へと足を向ける。昼休みが終わっていない所為か、校庭にはちらほらと生徒たちの姿。イチ生徒の事など気にならないのか、良い具合に校門へ向かうオレの事をスルーしてくれている。

どうやら誰にもバレずにサボれそうだ、などと思いつながら校門付近まで来た所で。

「……あれ？ 御鏡くん？」

オレは、サボり計画が失敗した事を理解して溜息を吐かざるを得なかった。

振り返ればそこにいる、きよとんとした表情の葵。オレはがしが

しと頭を掻きながら、「何でもねえよ……」と答えつつ葵の方へと近付いて行く。

「んで、葵の方こそどうしたんだよ。確かダチと一緒に飯食うんじやなかったのかよ？」

「あ、うん。そのつもりだったんだけど、先生に用事を頼まれちゃって……」

「そうか、そいつは大変だったな」

流石に生徒をパシリにし過ぎだろう教師連中、と呆れる思いだったが、そんな気持ちはサボリが失敗した事への残念さと併せて掃き捨てる。目の前でサボれば葵が悲しげな顔をするだろうし、教師が生徒をパシリにするのも正直に言えばどうでも良い。

「まあ取り敢えず、教室に行こうぜ。まだ余裕はあるけど、適当に雑談してりゃあ時間も潰れるだろ」

「そ、そだね。うん……」

何故か複雑そうな顔をした葵に疑問を抱きつつ、共に歩き出そうとした正にその時。

くう、と言うお腹の鳴る音が、可愛らしさを伴って耳に届いた。

「……あー、理解。そりゃ飯食う前に頼まれたら、仕方ねえよな」
「あつう……」

顔を真っ赤にして俯く葵。そんな彼女に同情を込めつつ溜息を吐いて、オレは学ランのポケットから菓子パンを一つ取り出す。

「奇遇な事にオレも昼飯がまだなんだよ。一緒に食おうぜ」
「ふえ……………」

驚いて顔を上げる彼女に、オレは面倒臭さを感じながらも更に言葉を重ねる。

「いや。だから飯食おうぜって話だ。教室に行けば弁当あるんだろ？ オレも一緒に飯食う約束がおじゃんになってよ」

正確には、おじゃんにせざるを得なかったのだが。

「それとも、オレと飯を食うのは嫌か？」

「そ、そそそそんな事ないよ！！ 全然嫌じゃないって言うか、むしろバッチ来いって言うか、その、あの……………」

「良いから落ち着け」

ぺちんと軽く頭を叩けば、あうう、と言う情けない声。少し潤んだ瞳の葵は、おずおずと言った様子で口を開く。

「えっと、その……………よ、よろしくね」

「おう」

(今まで何回も食べてるんだから、よろしくも何もねえだろに)

相変わらずよく分からない発言をする葵に苦笑しつつ、オレたちは飯を食う為に教室へと向かった。

「そう言えば、御鏡くんは通り魔についての噂って知ってる？」

教室へ着いてから、オレたちは飯を食べながら雑談に興じていた。最近身の回りであつた出来事だったりドラマの話題であつたり様々だが、話す話題と過ぎる時間はどれも和やかで実に素晴らしいモノだつた。

少なくとも、花京院月子の万倍は。

そんな話題が一転して不穏なモノへと変わったのは、正に今の葵の科白によるモノだつた。

「通り魔だあ？ なんだよそれ、そんなモンがこの風羽市にいるのかよ」

「うん。私も噂でしか知らないんだけど、もう何人も犠牲になつてるんだつて」

「ほー、ソイツはまた、何と云うか物騒な話しだなオイ。つか、犠牲つて事は死んでるのかよ？」

「ううん、被害者はみんな無事みたい。ただ、襲われた人たちは例外なくみんな凄く衰弱して倒れてるんだつて。外傷とか薬物投与とかは無いのに、身体中の色々な機能が低下してるらしいよ」

葵の言葉に、オレは何とも不可解な話だなと思つた。衰弱状態なんてモノは短時間であつさり作れる訳ではない。薬物か極端な外傷を与えればそれも可能だろうが、葵の話では外傷など無いと言つ。少なくともオレには、それ以外に短時間で相手を衰弱させるような方法は思い浮かばなかつた。

いや、それよりも気になる点が一つ。

「つか、随分と詳しいな、お前。噂にしちゃ薬物投与とか機能低下とか、知り過ぎじゃね？」

「あ……えと、それは……」

言い淀む葵。言えない事情があるなら構わない、と告げようとしたオレは、けれど彼女の表情を見て制止する事をやめる。重い空気ならば止めていただろうが、彼女の表情から察するにそんな気配は欠片も見当たらないからだ。単純に、言って良い事なのかどうか判断がついていないだけのようだ。

待つ事、約十秒。可愛らしく悩んでいた葵は声を潜め、少し困った風に微笑みながら口を開いた。

「えっと、実はお父様が警察本部の本部長で……それでその、あくまで被害者のプライバシーに関わらない範囲でだけど、色々教えてくださいるんだ」

「なん……だと？」

余りと言えば余りの葵の言葉に、思わず呆気にとられてしまった。こんなに呆然としたのは人生でそう何度もあるまい。いや、驚き具合で言うならば人生でトップスリーに入るかもしれない。

本部長、である。いや、これが地方などのいわゆる小規模警察本部の本部長ならば驚きは少なかったのかもしれないが 無論その場合でも驚いていただろうし、小規模とは言え本部長の時点で目玉が飛び出すほど偉いのだが この風羽市は、区分で言えば大規模警察本部が存在するK県。

その本部長の階級は 警視監。最高位である警視庁長官を除けば、階級としては日本警察の上から二番目。

(有り得ねえ……大規模警察本部の本部長の娘と高校時代に偶然知り合うとか、どんだけ天文学的な数字なんだよ……!?)

「お、おい、葵。それ、う、嘘じゃねえよな……?」

「あ、うん。な、内緒にしておいてね!? 本部長のお父様が被害者の情報を身内に漏らしてるっていうのは、その……」

小声で叫ぶという器用な事をする葵にこちらも慌てて頷き返しながら、オレは深く、深く溜息を吐かざるを得なかった。

(つまり、アレか。オレはK県警察本部長の娘を振る事になるワケか)

非現実的な今の状況に対し、呆れを混ぜた放心状態だったオレは、ふとそこで葵が顔を俯けながら弁当を箸で突いている事に気が付いた。

「あー、どした、葵。んな暗い表情で」

「……その、やっぱり引いちゃう、よね。警察本部長の娘とか……何でそんな奴がこんな所に通ってるんだーとか、思っちゃうよね……」

ズーン、と重い空気を纏いながら途切れ途切れに呟かれた葵の言葉で、父が警察本部長という事実も葵にとってはコンプレックスなのだと悟る。

(いや、常識的に考えてコンプレックス多すぎだろう。面倒くせえ

……)

実は葵もかなりハイレベルな地雷だったのかもしれない、などと思いつながら、即座にどうでも良いかと思いついて口を開く。

「あんま暗い顔すんな、折角の可愛い顔が台無しだぞ」

「ふ、ふや……」

ぶにぶにとした柔らかい頬を軽く摘んだ後に、真つ直ぐに葵の目を見据えて告げる。

「確かに驚いた。すげえ驚いた。大事な事だから三回言うぜ？ メチャクチャ驚いた。でも 突き詰めちまえば関係ねえんだよ、んな事は。これが赤の他人だったら面倒に思つて引いてたかもしれないけど、オレはお前のダチで、お前はオレのダチ。だったらそこに親の階級云々なんて関係ねえよ」

そう。確かに葵は面倒臭い人間かもしれないし、客観的に見れば間違いなく地雷だろう。だが、彼女は友なのである。オレが掛け値なしに背中を預けられると信じられる存在なのだ。

例えどれほど否定的な感情が自分の裡に生まれても、決してその感情は友情を呑み込むほどにはなり得ない。

「……、そっか。そう、だよね……えへへ」

最初呆然としていた葵の表情に広がっていくのは、憂いを帯びた微笑み。それは微笑みでありながら、存在するのは僅かな喜びに深く混じり合った悲しさと切なさ。

「……………」

そんな葵の表情を見て、少々酷だったろうかとも思う。だがこちらに恋愛をする意図がない以上、恋心を諦めさせる方向で動くべきだろう。そう言った意味で言えば、むしろ“友達”を強調する事が出来た今回の話の流れは幸いだったと言える。

(あとは、少なくともしばらくはこっちに女を作るつもりがない事をさり気なく、かつ確実に伝えるだけか……それで諦めてくれんだろ、流石に)

方針が固まった事でこれ以上この話題を続ける意味はないと判断し、転換を図る為に改めて口を開く。

「で、そっぴや何の話をしてたっけ、オレら」

「……………？ ああ！ そ、そう！ 通り魔なんだよ、御鏡くん！」

こちらの意図を汲んでくれたのか天然なのかは分からないが恐らく後者だろうとは思うが 葵は見事な反応を返してくれた。ただ、少しばかりリアクションがオーバーに過ぎたようだが。

「……………、落ち着け落ち着け。で、通り魔が何だっつてんだ？」

「あ……………あつう……………」

突然叫び出した葵に驚きつつ こちらを振り向いたクラスメイトたちには何でもないと手を振る 赤面するくらいなら叫ぶなよ、と内心で突っ込み。だが眼前で気持ちを落ち着けているらしい葵の様子から察するに、どうやら件の通り魔事件は葵の中でかなり大きな扱いになっているらしいかった。

そんな血生臭い事件にこの少女がそこまで関心を抱く事の珍しさに、好奇心がくすぐられるのを自覚する。

「あのね、えっと……つまり私が言いたいのは、夜遅くには出歩かないでね、って事なの。犯行が行われるのは決まって十時とか十一時とかその辺りの時間帯だから……」

(ん……これはつまり、単純にオレの事を気遣ってくれた、の……？ いや、それにしちゃあ……)

「オーケー分かった、気遣ってくれてサンキュウな。けどよ、随分珍しいじゃねえか。その手の話が苦手な葵が自分から振るなんてよ」

こちらが想像する以上にオレの事を案じてくれていたのだろうか
などと思いつつながら投げられた言葉に対する葵の返事は。

「……え？ だって、それは……当たり前、だよ？」

スツと真剣な表情になるという、想定外のモノだった。余りにも唐突な変化過ぎて、困惑が波打つ。気のせいか葵の纏う雰囲気も変質しており、一瞬にして彼女が異質なモノへと変わってしまったかのような錯覚。

静かにこちらを見つめる葵の透明な眼差しに、僅かな寒気。

「だって、本当にこの街は危険なんだから。凄く、凄く……だから、絶対に夜遅くには出歩かないでね？ 御鏡くん」

「……、お、おう。分かった」

こくこく、と頷きながら、オレはこの話題がこれ以上踏み込んで

はいけないモノだと認識する。

（何だよ、この変わり様……本当に葵、なのか？ これじゃあまるで）

二重人格みたいじゃないか、と心の中で呟きながら、そんな馬鹿げた発想を振り払うように頭を振って口絵を開く。

「と、取り敢えず飯食っちまおうぜ。そろそろ昼休みも終わりだしよ」

「うん、そうだね……」

その後も彼女の空気が元に戻る事はなく、結果として五時限目が始まるまで何とも言い辛い時間を過ごした事になった事をここに記しておく。

人の気配が失せた女子トイレ。廊下からの足音や話し声も聞こえず、密やかな静けさを保つその空間は、曇り空が窓から差し込む筈の日の光を遮っている所為もあり、常のそれよりも陰湿さを感じさせる。

「そう、危険なの、御鏡くん。今の、この街は……」

そんな空間に、一つの声。だがそれは静けさを切り裂くのではなく、その静けさに溶け込ませたかの如く、また密やかに紡がれる。

「御鏡くんは知らないと思うけどね？ 誰もがいつ死んでもおかしくないの、本当は。特に、御鏡くんはすぐに狙われてもおかしくない、だって……」

トイレの個室に籠り、誰に言うでもなく呟き続けるそれは、少女の声だ。本来は鈴を振ったように愛らしい筈のその声音は、しかし今、憂いと陰りにより空間に似つかわしい音へと成り果ててしまっている。

「それに、私だって本当は……ううん、もう“関わってしまったているからこそ”、私も凄く死ぬ確率が高いんだ……いつ死んだって、おかしくない……」

紡がれる度に暗く、重くなってゆく声。やがて少女が大きく溜息を吐いた時には、深い、深い陰鬱とした音色が残されていなかった。「だって言うのに、友達、なんだね……御鏡くんにとって、私は。いつ死んじゃうか分からないから、せめて御鏡くんの隣で少しで良いから夢を見たい……そんな願いも、叶わないのかな……ッ」

唐突に鳴り響く不愉快な音色。それは少女が壁のタイルに爪を立て、思い切り引つ掻いた事で生まれた不協和音

「確かに最初は友達で、それだけで嬉しかったけど……でも、もう私は御鏡くんを恋をしちゃったんだよ？ 初めて誰かに恋をして、初めてだれかとずっと手を繋いで一緒にいたいって思えるようになったのに……そんな小さな願いも、叶わないの？」

空いた方の手の爪を少女は噛む。強く、強く。何かに耐えるように 或いは、何かを抑えるかのように。

「そんなのは、嫌……お願い、御鏡くん……私の事を、友達として
じゃなく、女の子として見て下さい……お願い、だから……何でも
す」

不意に。

「ッ!! あ、ああ……ああ!!」

何かを悟ったかのようにハッと顔を上げた葵。その表情には、天啓を受けたかの如き驚きと感激の色。

「うん、そっか……そう言う事なんだ……」

ドロリ、と瞳の奥で鈍く輝く光。

「そう、だよな……私から何もせずに好きになってもらおうなんて、
傲慢にもほどがあるよね……。好きなら、好きになって欲しいなら
もっと……もっと……」

その後もしばしの間ぶつぶつと呟いていた少女は、やがて六時限
目の開始を告げる鐘が鳴り響いた事でパタパタと慌てた様子で個室
から飛び出す。

「わわっ、大変っ。早く教室に行かなきゃ怒られちゃう!!」

あわあわとした表情で駆け出す少女の声には、先ほどまでの鬱々
とした暗さなどは欠片もなく。ただただ愛らしく可憐な、鈴を振っ
たような音色だけがあった。

.....

序章・5 (前書き)

取り敢えず、ギリギリ13日までに更新。いや、本当にギリギリでしたね。

序章・5

五時限目と六時限目を潜り抜け、晴れて放課後という自由を手にしたオレは、三々五々と散って行くクラスメイトたちに合わせ教室の外へと出た。

「確か、今日だったよな……」

携帯のカレンダーを見ながら予定を確認し、頷きと共に廊下を歩き始めたその時。

「みつ、御鏡くん！ い、一緒に帰ろうっ」

そんな声が、やや後方から聞こえた。それが聞き慣れた葵の声である事を把握し、何気ない動作で振り返る。

「いや、まあ良いけどよ。部活は良いのかよ？」

「あ、うん。今日は自主練だから……」

頬を赤く染めてこちらを窺う葵に対し、ポリポリと頭を掻きながら「あー、でもよ、」と再度言葉を投げ掛ける。

「自主練つつつても、部活動の一環だろ？ 部のエースが率先してサボって良いのかよ」

「あう……それは、その……」

途端、気まずそうに目を逸らしながらもチラチラこちらを窺う葵に対し、オレは嫌な予感から冷や汗が流れるのを自覚した。

(まさか、さっきの友達発言が逆に“振り向いて貰おう”って発破掛けになっちまったのか……!?)

一之瀬葵という少女の真面目さはよく分かっている。その彼女が自主練習だからと言って部活をサボるとは、俄かに信じ難いが……もし想像以上に葵のオレに対する好意が強かった場合、有り得ない話ではない。

「い、良いのっ。今日はちょっと体調も悪いし、それに……その、御鏡くんは、私と帰るの……嫌?」

「う……」

上目遣いで僅か涙目になりながら薄紅色の頬で、心なしか胸を強調するように身を寄せて問い掛けて来る葵。その仕草に明らかな作爲的意図を感じ、オレは予想が確信へと変わった事を理解する。

(クソツ、やべえな。何つー面倒な事に……。つか色気が普段の二割増くらいか? 色仕掛けは葉月のお陰で耐性出来てるっちゃあ出来てるが、にしてもコイツあ……)

「いや、まあ、嫌ってワケじゃねえんだが……」

言葉を考えながら、思う。何がここまで彼女を変えたのだろうか、と。思い当たる理由としてはやはり“友達発言”なのだが、それにしてもこれは唐突過ぎではないだろうか?

(ダメだな、今考えても答えは出ねえ。とにかく、今日に限っちゃあ正当な理由もあるんだ。ここは……)

「悪いな、今日は用事があんだよ。だから、無理だ、すまん」

「用事……それって、どんな？」

「ああ、まあ、定期健診だよ、面倒くせえ事にな」

「定期健診って事は、み、御鏡くんっ、何処か身体の調子が悪いの！？」

再度彼女が浮かべた色は驚き。その慌てように関してはよく知るいつもの葵クオリティだったので、多少の安心感を覚えながら簡単な説明を行う事にした。

「いや、悪いつてワケじゃねえんだ。何っーか、結構珍しい体質だよ、オレの身体。その検査だな。調査って言い換えてもしれねえけど」

「珍しい、体質……？ それって、どんな？」

「……ん」

流石に少ししつこいな、と思うも、葵を邪険にする事など出来る筈もなく。

葵ならば信頼度的にも問題ないだろう、と内心で結論付けてから溜息と共に葵へと背を向ける。

「ほれ、取り敢えず校門まで行くぜ。道すがらつつつても十分程度だけど、その間に説明してやつからよ」

「あ、う、うんっ。ちょっと待って、御鏡くん！」

葵が追い付いてオレの隣に並んだ事を確認し、そのまま歩きながら言葉を続ける。

「まあ、アレだ。オレの身体って生まれ付き異常を抱えててよ」

「異常……?」

「おう。まあ、オレの身体能力はな、一般的な人間の水準よりも異常なほど高いんだとよ」

「それは……えっと、どう言う事なの?」

当然の反応だよな、と頷きながら咳払い。

「例えば、だ。百メートル走で9秒を切れる人間がいたら、そりゃもう世界記録だろ?」

「う、うん……」

「ぶっちゃけ、オレ、それが出来るんだわ。すげえ使い古された上に漫画っぽく聞こえて嫌なんだが、言ってみりゃ超人みたいなモンだな」

より正確に言うならば、生身で百メートル七秒台を叩き出せるのだが。

「超人……」

困惑を隠そうともしない葵に苦笑しつつ、これでようやく主導権をこちらに移す事が出来たと深く安堵しながら会話を続行。

「おう。どんだけ異常かは葵にも分かるだろ? だからオレは体育会系の部活に入りたくはねえし、スポーツ全般のあらゆる公式試合に参加する事が偉い所から禁じられてるんだな、これが」

「えっと……それは冗談なんかじゃないよね?」

「当たり前だろーが。ま、普通の人間じゃ有り得ない身体スペック持ってたら、研究対象にされて当然だわなって所だ」

つまらない話だろう? と問えば、戸惑いと共に口をパクパクさ

せている葵の姿。完全に何と言えば良いのか分からない状態のようだが、これが、普通の反応だ。

考えてもみて欲しい。いきなり知り合いが『俺は超人並みのスペック持つてるから研究室で研究対象にされてるんだぜ』と言って来て、信じる事が出来るだろうか？ オレならば信じられない、むしろ熱があるかどうかを確認する。

「ま、信じられないのも無理はねーけど、嘘じゃねえぜ。証拠もあるしな」

「しよ、証拠？」

「おう。えーと、何処に仕舞ったか……ああ、あったあった」
鞆の奥底から一枚のカードを取り出し、それを葵に手渡す。

そして。

一見すれば保険証のようにも見えるそのカードの印字を見た瞬間、葵の目が点になった。

歩みを止めた彼女に合わせ、こちらも立ち止まる。階段の踊り場で二人揃って立ち止まったものだから行き交う生徒からチラチラ視線を向けられるが、全て無視。

「特殊生物学研究所って……もしかして、あの？」

「おう、それで合ってるぜ。まあこの街にあるのは、支部みてーなものだな」

“特殊生物学研究所” それは、約十年前に日本が新たに立ち上げた機関の名称であり、簡潔に言えば『現代常識の範疇に収まらぬ生物現象の本質の解明』を目指す研究所である。基礎生物学研究所

とは一線を描いた存在であり、その活動内容は公にされていない。よほどのマニアか大規模な組織の上層部しか存在を知り得ない、秘匿部分が多すぎる研究機関である。

「しかも、この研究協力者・御鏡悠夜って……」

「ああ、まあだからさつき言っただろ。検査受けてるって。正確に言うなら研究の被験者なんだが、まあそんな違いはねーだろ」

絶句、という表情の葵を見て、これだけ証拠を示せば不満はないだろう、と思いながらカードを葵の手から取り戻し、再び鞆へと仕舞う。

「機密に関わんねえ範囲で言えば、生まれながらに異常な身体能力を持ってたオレは、今じゃ国家レベルの研究の被験者ってワケだ」

医者曰くの“人体の限界水準を大きく逸脱した異常者”、生物学者曰くの“常識では絶対に有り得ない超生物”、科学者曰くの“規格外生命体”、偉いさん曰くの“化け物”。

「ま、つーワケだからその検査で今日は一緒に帰れねーんだ。悪いな」

「あ、ううん、そんな理由があるなら仕方ないよ……うん。そういう事、なんだね」

「……？」

ふと、オレは葵の様子に違和感を抱いた。まるで何かに納得したかのような、そんな表情を抱く彼女に。

困惑し続けたままならば、分かる。

オレを気味悪がり距離を置くならば、分かる。

だが、納得するとはどういう事だろうか？

それではまるで以前からオレに関する何らかの疑問を抱いていて、その疑問が今の話で解決されたようではないか。

こんな異常な話を聞いて納得出来るような、そんな“異常な”疑問を、葵が……。

「ごめんねっ、御鏡くん。そんな事情があるって知らずに無遠慮に聞いちゃって、無理やり誘おうとして……」

「あ、いや、まあ別に気にする必要はねえよ。だからそんな申し訳なさそうな顔すんな」

慌てた様子で謝って来る葵を契機に、オレは覚えた違和感を頭から締め出す事にした。考えても不愉快な推測しか浮かばなさそうだったし何より。

(例え葵が何を隠しても、オレに不利益なんてねーだろ、流石に気にするのは野暮ってもんだな)

「ほれ、それよりさっさと行くぞ」

「あ、ま、待ってよ御鏡くん！」

葵の慌てた声を聞きながら、少し歩調を緩めつつ、オレは大きく溜息を吐かざるを得なかった。

今日は何とか葵をやり過ごす事が出来た。だが、明日は？ 明後日は？ これから先、葵の行動がエスカレートしない保証などどこ

にあるだろうか？

それを思えば、とてもではないが気楽に考える事など出来る筈もなかった。

『何でゆうやんはウチを邪険にするんや！　ウチはこんなにもゆうやんを愛してるんやで！？　何で、何で、何で　　！！』

思い出すのは、中学一年の夏。オレに一方的な好意を向けて来て、その果てに好意が偏愛へと変わり狂気を振るつた少女がいたあの季節。初めて女という生き物の恐ろしさを知った、思い出したくもない過去。

なまじそんな事があっただけに、今の葵に対しても警戒せざるを得なかった。

ちなみに、花京院月子に関しては論外だ。アレは既に警戒以前の問題だろう。

「本当、ままならねーよなあ人生は」

見上げた空は、朝よりも一層その昏迷さを増していた。

「やはは、やっと見付けたっすよー」

霧桜高校、正門前。放課後の解放感と共に制服を着た少年少女

たちが帰宅する中、一人の少女がその流れの中で立ち止まっていた。

髪色はブラウン、ヘアスタイルはボブカット。抜けるように白い肌とミニスカートから伸びる美しい脚が特徴的な、ただ其処に佇むだけで人目を引くだろう可憐な少女だ。

少女がチェシャ猫のような笑みを浮かべて見つめる先には、一人の青年の姿。

「やはつ、まさかあの時偶然ぶつかったヒトが“あの”御鏡悠夜で、しかもあんなに美味しそうな魂を持っていたなんて……これはもう運命に違いないっすねー」

にひひ、と笑いながら少女は懐からメモ帳を取り出す。

「御鏡悠夜、十六歳。私立霧桜高校一年生。生まれながらにして異常な身体能力を有しており、幼い頃から被験体として扱われる。ただし何らかの政治的影響により、非人道的な行為は一切行われず、健やかな幼少期を過ごす……」

傍から見れば気味の悪い笑みを浮かべてぶつぶつ呟いている少女は、普通ならば周囲の注目を浴びてもおかしくないが、不思議な事に、行き交う生徒たちは視線一つ向ける事なく過ぎ去って行く。そう。まるでそこに少女など存在しないかの如く。

「“最悪の一週間”と呼ばれた史上最大規模の抗争において、持前の超人的スペックを活かし終結に貢献……特に際立った活躍を行った七人の一人として、表社会・裏社会の両方から大きな注目を浴びて今に至る……」

メモ帳を読み上げた少女は、パタン、とそこでメモ帳を閉じて口元を歪める。

「やはは、とんでもない経歴っすねー。そしてまさか、その“ナチユラルウエポン”が堂々とこんな所で一介の高校生をやっているだなんて……さすがに私も予想外だったっすよ」

少女は青年が去って行った方へと足を向けながら、「まあ、でも……」と言葉を続ける。

「どれだけ常軌を逸した身体能力を持っていても、所詮は人間って事っすかねー。私如きの隠密魔術すら見破れないような素人なら、殺すのは容易いっすね」

堂々と御鏡悠夜の後方、十メートルの位置から彼を追い続ける彼女は、赤い舌でぺろりと唇を舐め、猫のようにその目を細める。

「とは言え、今はまだ日が高くて結界も張りにくいっすからねー。襲撃を仕掛けるなら夜っすかね、やっぱり。やはは、覚悟するっすよ、おにーさん。その高純度の魔力を宿した魂……この土御門アリスが美味しく食べてあげるっすから」

少女　アリスはそこまで呟いた後、怪訝な表情で立ち止まらざるを得なかった。

ストーキングしていた青年　御鏡悠夜が不自然にもピタリと足を止め、頭をポリポリ掻きながら溜息を吐いたからだ。

そして次の瞬間、アリスにとって衝撃的な言葉が耳に届く。

「さて、そこにいるんだろ？ 隠れてないで、大人しく出て来いや」

ドクン、とアリスの心臓が大きく脈打つ。それまで余裕の笑みを浮かべていた彼女は、一転して目を見開き硬直する。

「十秒数える間に出て来なかったらこっちから行くぜ？ いち、に、さん……」

「……ッ」

その言葉を聞き、即座にアリスは頭をフル回転させる。御鏡悠夜が自身に本当に気付いている可能性の有無、それぞれの場合における対処法、向こうが有無を言わず攻撃を仕掛けて来た時の対処法、少なくとも日の出ている内は目立つ事をしたくない自身の現状、少なくとも今現在は人影の見当たらず状況、それら諸々の条件を即座に脳内で検討し結論付けてゆく。

「……はち、きゅう……」

やがて結論が出したらしいアリスは真剣な表情を一転、覚悟を決めたかのような笑みを浮かべながら一步前に踏み出し、声を発する為、口を開けた所で

「……へ？」

間抜けな声を上げざるを、得なかった。

御鏡悠夜の五メートル先にある曲がり角から、一人の黒服の男が

出て来た事によって。

「はあ、コソコソしがやって……オレは逃げも隠れもしねーっての」「これは失礼を致しました、御鏡悠夜様。ですがこちらにも事情が御座います……」

アリスの見ている前で、悠夜と黒服の男は会話を進めて行く。

彼女の存在に、全く気付いた様子を見せずに。

「まあ、前も言ったが……オレは特定の勢力に付く気はねえ。自由気ままに高校生活エンジョイしてーんだよ」

「恐れながら、それは不可能というモノでしょう。貴方の御力は貴方自身をご存じの筈です。それだけの力、表裏問わず様々な組織が欲するのは間違いありません」

「んで、てめえらがオレを保護するっつー名目で飼うワケか。ハッ、冗談じゃねえ。オレは誰にも縛られねーし、誰にも指図されねえ。オレに命令したきゃ総理大臣連れて来いや、タコが」

「……なるほど。どう足掻いても意志は変わらない、と」

思わず無言になってしまったアリスを無視し、状況は淡々と進む。そして更に二、三会話した後、悠夜が黒服の男の脇を通って視界から消え去った段階になり、ようやく彼女は呼気を出す。

「……は。やは……やは……なんすかソレ。こんなに私を焦らせておいて、そんなオチっすか……。人が少しでも寿命を延ばしてあげようと思って様子見してれば、随分と調子に乗ってくれやがるっすね……」

顔を伏せて肩を震わせていた彼女はやがてスツと動きを止め、前

髪を掻き上げ、

「私を虚仮にした事、絶対に後悔させてやるっす」

一歩前へと、足を踏み出した。

ぶっちやけ、単なる八つ当たりだった。

.....

「はあ………つたく、冗談じゃねえ。オレはもうあんな面倒事に関わるのは懲り懲りなんだよ、畜生がッ」

苛々を抑える事が出来ず、思わず傍にあつた小石を蹴飛ばしてしまふ。そうして思い出すのは、先ほどの遣り取り。

道端を歩いていたら現れた、黒服の男。最近、と言うよりも“あの一週間”を潜り抜けて以来、何度も接触を図って来る彼ら。それが裏社会のみならず表社会にも大きな影響力を持つ組織からの使いだという事実を知りながら、けれどオレは彼らからの勧誘を断り続けている。

理由は、単純に面倒臭いから。オレは今の日常が好きだし、満足している。気の置けない後輩の華恋、腐れ縁の友人である健介、一

緒にいて楽しい葵……そんな彼らに囲まれた現在^{イマ}が、何よりも大切なのである。

もちろん、こんな事は恥ずかしくて口には出せないが。それでもオレにとつて今の生活、今の現実がベストである事は間違いのない事実であり。

それを壊す存在など、不必要な要素でしかない。

「あー、くそ、ままならねえな、人生つてのは」

溜息と共にそう愚痴を零した、正にその時。

「やつはー、だったらアンタのその人生、私の手で終わらせてあげるっすよ〜。すよ〜」

そんな声と共に、世界が色を失った。

「！？」

それは、本当に一瞬の出来事。コンクリートの地面や様々な色の住宅、夕焼けに染まっていた空、それら全てから色が“抜け落ちた”のだ。

気付けばオレが立っていたのは、世界一面全てが灰色に染まった空間。そこには生き物の存在感はおろか、風すらも存在していない。

いや、正確にはオレを除き、一つだけ存在感を持つニンゲンがい

た。

「やつはー、面白い位にうるたえてるっすねえ。まあ、そうじゃなきゃ張り合いが無いっすけど」

少なくともカタチだけを見るならば、十五、六程度の美しい少女だ。ブラウンの髪をボブカットにした、間違いなく可愛いと分類される女子。抜けるような白い肌と短いスカートから覗くスラリとした美脚は、それだけで異性の目を惹き付けるに違いない。

だが、その右手に持つ洗練されたフォルムの“銃”と全身から放たれる異様なプレッシャーが、それだけで彼女が単なる少女ではない事を示していた。

「……てめえ、何モンだ？」

ヤクザに喧嘩を売った事があれば用心棒紛いの事もやった事もあり、更に言えばこの間までは剣琳弾雨と化学兵器に囲まれた非日常的な世界にいたオレを以ってしても、欠片も理解出来ない現状。

それだけに内心では疑問と困惑が嵐のように踊り狂っているが、必死にそれを押し隠して問いを投げかける。

そんなオレに、チエシヤ猫のような笑みを浮かべて少女は口を開いた。

「ん〜、名前を言うなら土御門^{つちみかど}アリス、年齢と性別を言うなら十六歳の女の子、職業を言うなら……魔女っすよ」

「魔女……？」

何だ　それは。

（魔女、だと？　宇宙にすら行けるようになった今の時代に？）

「あ、その顔だと信じてないっすね？　ん〜、まあおにーさんにとつては確かに未知で嘘臭いかもしれないっすけど、でも残念ながら事実っすよ。この世界には魔女と呼ばれる者たちがいて、社会の陰で己の業を研鑽したり、政治家や企業家のお抱えとして一般人には不可能な事をやって生きてるんすよー」

「……、ケツ、信じられるワケねーだろボケが。んなファンタジーがあつて堪るかよ。大体、てめえがその手に持つてるのは何だよ。銃じゃねえか。魔女だの何だのつて抜かすなら、杖振つて奇跡起こしたり、魔道書呼んで神秘起こしたりしてみる、電波女」

（取り敢えず、ぶつけてきやがる殺気からして単なる電波じゃねえのは確かだが……魔女？　じゃあこの異常も魔法によるモノだとも？　ケツ、バカバカし　）

そこまで考えた、直後。

爆音が耳に届いた。

「……あ？」

視界の先では、粉々に破壊されたコンクリートの壁。少女　アリスの左手には、開かれた暗褐色の装丁の本。

彼女の口元が形作るのは、三日月。

「お望み通り、見せてあげたっすよ？　何ならもう一度見せてあげ

るっす」

そう告げたアリスの左手の上で、ふわりと宙に浮いた本のページがパラパラと捲られていく。“手を触れてもいない”のに。

「start 奔れ。隆起する大地、形成す大地、猛り狂う大地、巨人の腕と成りて彼のモノを粉碎せよ。土御門アリスが名の下に告げる」

不可思議な現象はそれだけに留まらない。アリスがそう言葉を紡いだ直後、突如としてコンクリートの地面が盛り上がったかと思えば、十メートルを超える巨大な腕を形作り、真横にあった家を粉々に破壊したのだ。

「……」

ぼかん、と呆ける事しか出来なかった。眼前で確かに起きた事実を、脳が上手く認識してくれなかった。

「やつはははは！ その顔凄く素敵っす！ さっきまでの威勢の良さは何処に行ったんすか！？ あははははは！ そのまま額縁に閉じ込めたい位に最ッ高すよ、今のアンタ！！」

笑う、嗤う、晒う、アリスはその無垢な名に反しオレを嘲笑う。今のオレには、その笑い声の一つ一つが呪詛のように感じられた。

これが真実なのだ、大人しく神秘に支配された現実を受け入れる。そうオレに囁きかけて来る。

「何だよ……それ」

余りにも常識離れた光景に、意識が麻痺する。

“あの一週間”に関しては、一から十に至るまで全てが科学で説明する事が出来た。常識の中で思考する事が出来た。小説の如く非現実的ではあっても、幻想の如く非常識ではなかった。

だが、目の前のアレは違う。明らかに非常識にして異質なモノだと、本能が告げていた。

必然的に、一歩足を引いてしまう。理解が出来ず、混乱の極致へと落とされる。

「やつはは、まあ気持ちは分かるっすけど、これが現実っす。怨むなら、一般人の癖にそれだけ上等な魂を持っていた自分を怨む事っすね。おにーさんのその魂、私の魔力の糧にさせて貰っすよ」

その時点で、オレの敗北は決まっていたのだろう。

現実リアルを破壊され呆ける今のオレに、アリスが構えた銃口から逃れる術は無く。

そして、遅まきながら命の危険を察知しとにかく逃げねば、と思っただその致命的なまでのタイムラグ。

「まあ、おにーさんへの手向けとしてせめてコッチで殺してあげるっすよ。これもただの銃じゃなくてアーティファクト魔器の一種なんすけど、まだ自分の理解が及ぶモノで殺された方がおにーさんも納得して死ねるっすよね？」

憐れみとも嘲笑とも取れる声を聞きながら、オレはその銃口から放たれる蒼白の弾丸をただ見つめる事しか出来ずに、死を受け入れるしか

「『Access Shield of Aegis』」

直後に眼前に展開された盾によって、その凶弾がオレに当たる事は無かった。

「間に合った……怪我はない？」

そしていつの間にかオレの右隣で寄り添っているのは、小柄な少女。漆黒のローブと同色の三角帽子に身を包んだ彼女は、こちらに言葉を投げ掛けながらも真つ直ぐにアリスを見据えている。

「チツ……、ちょっと時間を掛け過ぎたっすね。他の“参加者”に割り込みを許すなんて、私もまだまだ未熟って事っすか」

あからさまに表情を歪めて舌打ちをしたアリスは、すぐに表情に笑みを張り付けると小柄な少女へと銃口を向ける。

「まあ、でも。このまま尻尾巻いて逃げるのも癪っすから、精々どの程度の力を持っているのか図らせてもらっつすよ」

アリスの言葉を受け、小柄な少女はオレを制するように左腕を横に突きだす。

「下がっていて。貴方を守りながらだと、アレを打倒するのは難し

「い」

「いや、おまつ……」

訳が分からなかった。一体何が起きている？ と言うか、この少女は一体どこから現れたのか。それに先ほどからオレの眼前に浮かぶ盾は一体何なのか。いやそもそも、その突っ込み待ち全開の格好は一体全体どう言う事なのか。

「……『Access Rondo of Halper』」

混乱から動けないオレを一瞥すると、小柄な少女は一步前へ出て盾に手を触れ、何かを呟く。すると、

「はぁ!？」

次の瞬間、その盾は一瞬にして金色に輝く大鎌に変化していた。二メートルを超えるだろう大鎌を片手で軽々と振るい、少女はその刃をアリスへと向ける。

「その首…… 此处で刎ねさせてもらう。逃げなかった事を、後悔すると良い……」

「ふむふむ、アイギスにメドゥーサの首が無い点といい、ハルパーの癖に大鎌である点といい、神話に語られる武具の粗悪な模造品を作る魔器アーティファクトつて所ところつか。或いは単に言霊を与える事で威力を増しているのか…… やはは、まあ関係ないっす。その生意気な面、グチャグチャに歪めてやるっすよ」

アリスが言葉を放った直後、小柄な少女は地を蹴り彼女へと切り掛かって行った。

間章 Hannah x Alice? (前書き)

これだけでは流石に短いので、序章6も同時更新。また、間章は常に三人称神視点。

間章 Hannah x Alice ?

月無き灰色の空の下、二人の少女の殺し合いが始まった。

アリスへと斬り掛かる小柄な少女の動きはさながら弾丸。瞬く間にアリスの元へ到達し、その首を刈り取らんと大鎌を振り下ろす。

「ハッ、肉体強化なら私だって出来るっすよ!!!」

だが当たらない。アリスは紙一重でその一撃を避けると、魔力によつて強化した脚で大地を蹴り、即座に少女から距離を開ける。同時に彼女は太股のホルスターから銃を取り出し、即座に少女へとその銃口を向けた。

一見すると流麗なフォルムだけの銃だが、ソレはただの銃にあらず。担い手の魔力を弾丸と成し、その意志によりトリガーを引く魔導銃。故に魔力が続く限り無限に弾を撃ち出し、リロードする必要も無く絶え間ない連射が可能となる。

「くたばるっす!!!」

畢竟、少女へ迫るのは無数の蒼白に輝く弾丸。

「……………!!」

それを視認した瞬間、僅か少女の眉根が寄った。何故ならそれは、大鎌で防ぐには余りにも数が多過ぎ上、広範囲に渡っていたからだ。

だからこそ、少女は当然の選択としてその蒼白の嵐を防ぐ事が出

来るモノを作り出す。

「『Access Shield of Aegis』」

少女にしか理解出来ぬ術理により産み出される変化、大鎌は一瞬にして少女の前面を覆う美しき盾となる。

不破の盾の名を冠するソレは、淡い輝きと共に少女へ襲い掛かる嵐の如き弾丸を全て阻み、

「『Access Rondo of Halper』」

直後にその姿を大鎌へと変え、再び少女の手に握られた。

「無駄。その程度の攻撃では……！！」

言葉を放つ直前、咄嗟に少女は地を蹴って左へと跳ねた。そして、その判断の正しさを示すは大地より生えた無骨な槍。

あと僅かでも判断が遅れていれば、間違いなく少女はその槍に矮躯を貫かれていただろう。

「……………」

少女が無言で視線を上げた先には、住宅の屋根に立つアリス。右手で魔導銃を構え、左手に開かれた魔導書を携え、彼女は不敵に微笑む。

「やっはー、こう言う組み合わせは初めてっすか？ 連射可能な魔導銃で相手の隙を作り、同時に唱える魔術で相手を仕留める。これ

が私のスタイルっすよ。そして結果はご覧の通り。あと一步でアンタ、死んでたっすよ？」

その言葉を聞いて少女が浮かべたのは　やはり変わらぬ、無表情だった。

「……下らない。その一步こそ永遠に埋まらぬ差。それが理解出来ない貴女は……此処で死ぬ」

「……、ふうん。そっすか。だったら、やってみたらどうっすか？　察するに、接近戦が得意なようっすけど……近付かれる前に、その身を蜂の巣にしてあげるっす」
「やってみれば良い」

言っが早いか少女は大地を蹴って跳躍し、塀を足掛かりとして再度跳躍。その大鎌を思い切り振り上げる。信じられるだろうか？　それら一連の動きが、全て瞬き一つの間に行われたなどと。

結果生まれた少女の動きは正に死の舞踏。塀を蹴った際に回転を加える事で威力を増した死神の刃は、確かに必殺を以って振るわれた。

だが、少女が人外れならばアリスもまた人外れ。

「ハッ、だから届かないって言ってるっすよ！　『start
其は我が身守る壁ッ！』」

同じく一瞬にして編みあげられた魔術の結晶、岩石の盾が大鎌の一撃を防ぐ。例えソレがバターのように切断されたとしてアリスには関係無い。何故なら、その間に既にアリスは跳躍し距離を空けており、そして彼女は祈り（意志）一つで無数の魔弾を放つ事が出来る

のだから。

「受け取るっすよ!!」

放たれる魔弾、控えめに見積もっても百を超えるソレが、音速を超えて少女を食らい尽くさんと迫る中で。

「Whirlwind」

たった一言、されど力ある言葉は紡がれた。

瞬間、

「!?!」

アリスは見た。正に弾幕に呑み込まれんとする直前、彼女の姿が掻き消えた事を。

そして。

「……ッ!!」

本能に従い彼女が後方へ飛び退いた直後、彼女の立っていた位置に大鎌が突き立てられていた。大鎌の先にいるのは、当然の如く黒衣の少女。

「は……転移術式をワン・アクション一単語で行使するとか、出鱈目っすね」
「そうでもない。出来て当然」

少女の言葉を聞き、アリスは何度目か分からぬ舌打ちをする。

認めざるをえなかった。眼前の少女が、かつてないほどの強敵である事を。

「……」

だがそれは少女も同じ。口では平気と嘯きながらも、未だ相手を仕留められぬ事に戸惑いを覚えていた。

しばしの無言。舞い降りた沈黙は、しかしさしたる間もなく切り裂かれる。

「さて、私としてはこの辺りで撤退といきたい所なんすけどね？」

少しのおどけを含む言葉。だがその裏で彼女は語っていた。これ以上やるならばどちらかが死にかねないぞ、と。

それを理解し、なお少女は頭を振る。

「さっきの言葉通り。貴女は此処で殺す。『Access Co
de - Gunnir』」

少女が呟いた直後、黄金の大鎌は再び姿を変える。そして産み出されるは、かつて北欧神話の主神・オーディンが扱ったとされる神槍の名を冠する槍。世界樹より切り取ったとねりこの柄だ、と言われても納得出来るほどに、なるほどその槍は雄々しさと神々しさに溢れていた。

そして。

それを手に取った少女は、スツと目を細めて腕を引く。

「何を……って、まさか!？」

まだ続けるのか、と半ば呆れと共に魔導銃を構えようとした直後、少女の奇行に 正確には、そこから予測される結果にアリスは目を疑う。

「……遅い」

だが、果たしてアリスが即座に予想した内容に違わず、少女は咳くと同時に思い切りその槍を投擲する !!

「チツ……でも、その程度の速さでっ」

だが驚きは一瞬。アリスは即座に笑みを浮かべ、冷静な判断と共に屋根を蹴ってサイドステップ。確かに飛来する槍の速度は高速だが、反射神経や運動能力を魔術で強化している彼女にとって、ただ真っ直ぐ飛ぶだけの槍を避ける事なぞ造作も無かった。

そう。その槍が、“直角に曲がる”などと言う有り得ざる動きをしなければ。

「なっ……!？」

「だから貴女は此処で死ぬと言った」

アリスの驚愕と少女の眩き。

灰色の世界に、真っ赤な鮮血が飛び散った。

序章・6

「……………」

オレは、無言でその決着を眺める事しか出来なかった。

アリスと名乗った魔女と、突如乱入して来た謎の少女。二人の戦いは人知を超えており、オレが割って入る余地など微塵も存在しなかった。

オレだって、伊達に中学時代からヤクザと遣り合ったり用心棒なんてやっていない。葵に話した通り、一般人の域を遥かに逸脱した頑丈な肉体と発達した神経を備えているオレは、それこそ拳銃で武装した十数人程度なら楽に殲滅出来る。

そんな、一般社会において“異常”の烙印を押されたオレだったが、しかし眼前で繰り広げられる闘いの前では一般人と大差なかった。

無数に迫る弾丸（？）やそれを難なく防ぐ盾、そして有り得ない動きをする槍。そんなモノ、人間が相手に出来る筈も無い。

だから、そう。美しい槍によってアリスと名乗る魔女が貫かれ、自動的に手元に戻った槍を少女が構えるのも、ただ眺めている事しか出来なかった。

「……………無意識の内に致命傷を回避したのは素直に称賛する。でも、どちらにせよ終わり。もう貴女は闘えない」

少女の無機質な言葉に、荒い息を吐いて這い蹲るアリスは答えない。いや、答えられないのか。脇腹を思い切り抉られた彼女を襲っているだろう激痛は、なまじ似たような経験をした事があるだけに、否応無しに想像出来た。

「なん、て……反則。そんなアーティ、ファクト……聞いた事、ないっ、すよ……」

「当然。これは魔器ではなく、アイティファクト エンシエント・ワウン 神器だから」

途切れ途切れのアリスの言葉に、良くワカラナイ答えを返す少女。だがアリスには伝わったらしく、彼女の目が見開かれる。

「や、はは……最初、から……切り札を使って、いた……って事、すか……」

「そう。だから言った、貴女は此処で死ぬと。……切り札を抜いて相手を生かすほど、私は甘くない……」

「……？」

その時、オレは違和感を覚えた。謎の少女は気付いていないようだが、アリスの呼吸が先ほどまでとは変わって来ていたのだ。

それはまるで、荒い息を吐く“演技”をしているかのような、そんな違和感。だが彼女の脇腹から流れる血は間違いなく本物だろうし、先ほどまでの苦しみだって嘘は無い筈だ。

ならば、この違和感は一体……？

「兎に角、これで終わり。貴女の魔力と魂を糧に、私は先へ進む」

「やは、は……それは、嫌、っす、ねえ……」

「……！」

更に二人の会話が進んだ所で、今度こそオレははつきりと気付く。

アリスの口元が、ニイ、と歪んだ事に。

「おいつ、そこの黒いお前！！ さっさと逃げるッ！！」

「……………？ 何を…………… え？」

オレの叫びに少女が振り向くのと、

「アンタは充分に甘ちゃんっすよ、ガキ」

少女の身体にうねる土気色の触手が巻き付くのは、ほぼ同時だった。

「なっ……………これは……………」

「やつはははは！！ 引っ掛かったっすね！？ 私の身体には自動で傷を癒してくれる魔器アーティファクトが埋め込まれてるんすよ。アンタが会話に付き合ってくれたお陰で、詠唱出来る程度には回復出来たっすよ」

咄嗟の事で槍を落としたからかどうなのか、初めて焦りの色を見せる少女と、少しふらつきながらも脇腹を押さえ立ち上がるアリス。状況の逆転は、オレですら容易に把握出来た。

そう、途中から明らかにアリスの荒い息は演技が混じっていたのだ。自分で言うのも何だが、特異な人生を送って来たがゆえに嘘などを見抜く事に掛けては早々右に出る者はいない、と自負しているオレだからこそ気付いた違和感。

更に言えば、少女からちょうど死角になる位置に落ちていた不可

思議な本が、淡い光を放っていたのも叫んだ理由の一つだった。

「……、このレベルの魔術を無詠唱で行う……素直に驚き」

少女は冷静に言葉を紡いでいるように見えるが、触手から抜け出そうと足掻く様子を見る限り、オレには取り繕った冷静さにしか見えなかった。

そしてそれはアリスも気付いているのだろう、その顔に愉快そうな笑みを浮かべて口を開く。

「ぷっ、やはははは！ そんなに強がらなくても良いっすよ。すよー？ それはとっておきっすからね。しかも、今のアンタはエンシエントワンを持っていない……ソレ、手に持つのが発動条件っすよね？ 効果は差し詰め、神話の武器の能力を再現出来るって所っすか。とは言え、アイギスやハルパーを見る限り、若干違っかもっすけど……やはは、どっちにしる、これで貴女は終わりっす」

少女は答えない。無言でアリスを見据えている。既にもがくのをやめているのを見るに、諦めたのだろうか、と思いその表情に目を凝らす。何一つとして、感情を読み取る事が出来なかった。

「……気に入らないっすね。この期に及んで泣き事も命乞いもしないなんて……。まあ、良いっす。アンタはしばらくそこで大人しくしてるっすよ」

と、不意にアリスはその眼差しをこちらへ向けた。しばしこちらを見つめていたアリスは、やがて何を想像したのかその顔に愉悦を浮かべる。

「やはは……まずはそこのおにーさんを甚振らせてもらおうとするっす。おにーさんには、個人的に怨みもあるっすからねえ」

「は……？」

個人的な恨み、と言われて呆気に取られる。オレがあの少女に一体何をやったと言うのだろうか？

「いや、いやいやいや、ちょっと待てよ。オレはお前に何かした覚えなんてねえぞ？」

「やはは、おにーさんは知らなくても、私はきっちり不利益を被ってるんすよ。精神的屈辱って奴っす。さっきの間抜け面を見てけっこー気は晴れたんすけど、折角だからもつと甚振って苦しむ顔を見てみたいなあ、って」

「……」

訳が分からなかった。一体、あのアリスという少女は何を言っているのだろうか？

(まあ、ドSって事は把握したが……にしても、どうする?)

疑問は一先ず置いておき、オレは内心で考えを巡らせる。恐らくそうさしたる間もなくアリスはオレへとその銃口を向けるだろう。そうなったら勝ち目はない。幾らオレが逸脱した身体能力を持っていても、あんな無数の弾丸に狙われては逃げきれない。

既に驚きから立ち直った現状、身体が動かないという事はないが、無駄に動いてもどうしようもないだろう。

(まあ、そうなるとやっぱ、これしかねーか……)

「あー、土御門アリス、だったか？」

だからこそ。

「ん？ どうかしたっすか、おにーさん。命乞いつすか？」

「ハッ、命乞いしたって見逃してくれるような奴じゃねーだろ、お前」

「いやいや、そんな事ないっすよ？ さっきも言った通り、そこそこに気は晴れたっすからね。土下座した後に跪いて靴を綺麗に裏まで舐めたりすれば、心の広いアリスちゃんは許しても良いっすよ？」

「そりゃ優しいこったな、有り難くて涙が出るぜ」

余りにも情けないが、オレは会話による時間稼ぎを選択する。上手く行けば隙が見付かるかもしれないし、運が良ければ状況が変化するかもしれないからだ。

(消極的だっつてのは分かってるよ、畜生が……。でも、これ以外にどうしようもねえだろうがッ！)

誰に言うでもなく自分の無力さに胸の裡で悪態を吐きながら、顔には笑みを張り付けて言葉を続ける。

「にしても、だ。すげえな、お前ら。それが魔法って奴かよ？」

「やはは、正確には魔術っすけどね。まあ、呼び方に大差はないっすけど……概ねおにーさんたちがイメージする通りのモノで間違いないっすね」

「そーかいそーかい、つまり、アレだ。ゲームとかに出て来る魔法使いつてのは、空想の存在じゃなかったってワケだ」

「事実は小説より奇なり、って奴っすね」

なるほどな、と頷きながらオレは、魔法や魔術と言った非常識を自分が受け入れ始めている事に気付き、舌打ち。あんな出鱈目な事象を見せ付けられたから仕方ないと言えるが、認めがたい事もまた事実だった。

(魔法……アリスが言うには魔術、か。そんなモンがあるなんて認めたくねーけど、認めざるをえねえんだろうな、畜生が)

現実の俣ならなさに苛立っていたオレは、ふとアリスが意外なモノを見るかのような目でオレを見つめている事に気付いた。

「ん？　どうかしたか、一目惚れなら勘弁だぞ」

「やは、絶対に有り得ないから安心するっすよ。まあ、アレっすね。この期に及んでそんな軽口を叩けるおにーさんに、素直に驚いただけっす。それが“ナチュラルウエポン”である所以、って訳っすか」

「　！　それを知ってるって事は、アレか。お前たち魔女も裏社会を知ってるってワケか」

「そうっすよ。社会の闇である裏社会、その更に陰に住んでいるのが私たち魔女っすね。だから、ちよっと調べればすぐに分かったっすよ。おにーさんがあの“最悪の一週間”において活躍した七人の一人だ、って事実は」

またソレかよ、と大きく溜息。これはどうやら、あの事件に関わるきっかけとなった暗邸にはそれなりの報復をしなければいけないらしい。

最も、それもこの場から生き残れたら、の話ではあるのだが。

「っーか、それ知ってるならオレに手を出すヤバさは分かるだろ？

色んな所を敵に回すぜ、お前」

「んー、別に裏社会全てを敵に回す訳でもないし、関係ないっすね。何人何十人何百人何千人来ようと、私の前には無力っすから。やはは、私を止めなきゃ核兵器でも持って来い、って話っすね」

「何千人は言い過ぎだろ。確かにあの銃も魔術もすげえけど、全方位から武装された人間千人に襲われたら流石に死ぬだろ、常識的に考えて」

「確かにそんな状況になったら、魔女と言っても大抵の奴は死んじやうっすね。でも、私なら余裕っすよ？ 私には私だけの奥の奥エンシェント・ワンの手があるっすからね」

そこまで言い終えてから、さて、とアリスは愉快そうに言い放つ。

「時間稼ぎはそろそろ終わりで良いっすかね？」

死を告げる、一言を。

「ッ！！」

本能に従い後ろへ跳躍するのと先ほどまでいた位置に蒼白の弾丸が撃ち込まれるのは、同時だった。

「やははははははは！！ さあっ！ さあさあさあ踊るっすよッ！！
踊って踊って、私を愉しませるっすッ！！」

続け様に放たれる弾丸を必死になって回避しながら、オレは自分が遊ばれている事を知り激しく齒軋りをする。

オレが辛うじて避ける事が出来るのは、放たれる弾丸の軌跡が一筋や二筋しか存在しないから。そんな風に手加減されて遊ばれて、

苛立たない筈がない。

右へ避ければ右へ、左へ避ければ左へ、足を地につけた瞬間に其処へ向かって放たれる蒼白の弾丸。それを必死になつて避け続けるオレの姿は、傍から見れば滑稽な踊りを踊っているようにしか見えまい。

「良いつすよ、おにーさん！ その表情！ その悔しそうな顔！
どれだけ異端だ化け物だつて言われても、所詮おにーさんは一般人！ 一般人相手に無双出来ても、私たち魔女の前には無力な存在でしかないんすよ！！」
「ハッ、ハッ、ハッ、……ッ！」

そして次第に上がつてゆく息。アリスの言う事は正しかった。幾ら逸脱した身体能力や体力があるうと所詮は人間。限界が存在するのも、また道理。

誰よりもその事実は分かっているつもりだったが 改めてオレは、その事実を思い知らされていた。

無力感を 撃ち込まれていた。

（クソツ……ああクソツ、情けねえ……！ 何が異端だ何が化け物だ！ あの子生意気なムカつく面を殴る事すら出来ない癖にツ！）

初めて、かもしれない。自分の力のなさにこれほどの悔しさを覚えたのは。“あの一週間”ですら、オレは自分の力に不満を覚えた事はなかった。危うい場面こそ何度かあったが、それでも自分の身体能力を十全に発揮出来れば乗り越えられるモノでしかなかった。

(力が欲しい……ッ！ あの魔女とか言って調子に乗ってる女をぶっ飛ばせる力が……ッ！)

それは偽りのない叫びだったが、現実の非情さは理解している。どれだけ望もうとどれだけ願おうと、追い詰められてご都合的に真の力に目覚める事など有り得ない。謎の超存在から力を与えられるなんて事もあり得ない。そんなモノは御伽噺の中だけだ。

だからこそ。

「あ………」

疲労から思わずバランスを崩してしまったのが必然ならば。

「……やはっ」

アリスの笑顔と共に身体に衝撃を感じたのもまた必然であり。

無防備な腹に蒼白の弾丸を受けたオレは、そのまま地面へと叩きつけられた。

「……！！」

一拍遅れて腹部に感じる灼熱の痛み。最後のプライドで悲鳴こそ上げなかったが、だからと言って耐え難い痛苦が消える訳ではなかった。

「驚いたっすね〜。魔弾を直撃しても焼け焦げる程度で済むなんて、どんだけ規格外なんすかおにーさん。普通なら一発で貫通してるっすよ?」

未だ右手に銃を所持したまま、アリスはこちらへと歩みを進める。その顔に浮かぶのは、嘲笑。

酷く癩に障ったが、今は声を出す事すら苦しいほどに余裕がなかった。ただ銃弾に貫かれるのともまた違う、独特な痛み。

「んー、とは言っても、口が利けない程度には苦しいみたいっすね。まあ、ただの銃弾とは違うっすからねえ……」

てくてく、と歩いてオレのすぐ傍まで来た彼女は、何を思ったのかその銃を大腿のホルスターへと仕舞い、こちらをじっと見下ろす。

「ふうん……こうして見るとおにーさん、本当に格好良いっすね。上手く行けばテレビにも出られるんじゃないっすか？」

余計なお世話だ、と叫び出したい衝動を堪えとにかく体力の回復に努める。何があるか分からない現状、安易に諦めるよりは少しでも行動の選択肢を多く持っていた方が良いだろう。

と、その時。

「……………?」

オレが見ている前で何を思ったのか、アリスはいそいそと右足の靴を脱ぎ始めた。そしてソックスも含めて脱いだ所で、その足をオレの顔の前へと持って行く。

次の瞬間。

「さあ、私の足を舐めるっす。舐めている間くらいは生かしてあげるっすよ?」

余りにも意味不明な言葉がアリスの口から紡がれた。

「は え? いや、……え?」

衝撃の大きさに痛みすら一瞬忘れ、思わず声すら上げてしまった。見上げたアリスの顔に浮かぶのは、嗜虐的な笑み。

「実は私、前から年上のイケメンに足を舐めさせるのが夢だったんすよ。折角の機会だから、おにーさんで試そうかなあ、なんて。それに、もしかしたら舐めてる間に体力も回復して私に隙が出来て、逆転出来るかもしれないっすよ」

「って、何すかその呆れ顔。こんな美少女の足を生でしゃぶれる上に逆転出来るかもしれないんすよ? 好条件じゃないっすか」

本気でそう思っているなら一度死んで来い。

余りの奇行に脱力せざるを得ない中で、そんな意思を込めた睨みが通じたのかニヤニヤした笑みでアリスは晒う。

「分かってるっすよ、プライドが許さないって事くらい。だからこそ良いんじゃないっすか、プライドが高いおにーさんが恥を忍んで私みたいな小娘、それも憎んでる相手の足を舐めざるを得ないその屈辱……想像しただけでゾクゾクするっすよ」

言いながら、アリスはずいっと足をオレの口元へと持って行くが当然ながらオレは口を開かない。

確かに、アリスの言葉には一理ある。痛みが少しずつ引いている現状、時間さえ稼げれば隙を突く事が出来るかもしれない。特に、今のアリスは明らかに隙だらけでもあるのだし。

それを思えば確かに舐めた方が良いのだろうが、そう簡単にプライドを捨てられるほど利口な人間では、オレはない。

更に言えば、あれだけの悔しさと無力感を撃ち込んで来た相手に奉仕する事など出来る筈がなかった。

「……むむ。おにーさんも頑固っすね。良いんすか？ 私がやるうと思えば、今すぐにでも殺せるっすよ？ 例えば、こうやって……」

ホルスターから慣れた動作で銃を取り出した彼女は、くるくると手の中で弄んだ後にその銃口をオレへと より正確に言えばオレの胸へと突き付ける。

「この至近距離で全力で放てば、おにーさん、確実に死ぬっすよ？ 死と一時の恥による生、どっちを取るっすか？」

「……ハッ。お前が本当にオレを生かすなら考えるが……どうせ殺すつもりなんだろ？ だったら変わらねえよ」

「んん、じゃあ条件を変えるっす。私の足を舐めたら見逃してあげるっすよ」

「で、明日か明後日に今度こそ殺すんだろ？」

その言葉に。

嘲りの笑顔を浮かべていたアリスは、初めてその顔に驚きの色を見せた。

「……、驚いたっすね。どうして分かったんすか？」

「へッ、オレは忘れてねえぜ？ 確かお前、言っただよな？ オレの魂が上等だから、それを魔力の糧にする云々って。これでオレを殺す理由が八つ当たりっただけなら気が変わる可能性もあるが……お前が最初からオレの命を狙ってる理由は明確なんだから、心変わりには有り得ねーだろうが」

「……、やは。やはやは、これは素直に驚きっす。あの場面、間違はなくおにーさんは混乱の極致にあつたのに、そんな中で言われた言葉を覚えていて、しかも冷静に思い出せるとか……どうも、思ったほど馬鹿じゃないみたいっすね」

「いや、このくらいは楽勝だろ」

ふむ、とアリスはオレの言葉に考え込むような仕草をする。逡巡しているらしいその仕草が十秒ほど続いた所で、「前言を撤回するっす」と言ってからアリスは言葉を繋げる。

「おにーさん、本気で生かしてあげるっす。ただし、これから当面の間は私の為に生きる事が前提っすけど」

「……あん？」

アリスの目に偽りなき本気が垣間見え、思わず零れる疑問符。彼女は真剣な表情をそのままに、更に言葉を続ける。

「おにーさんの身体能力は目を見張るモノがあるっす。それを私の魔術で強化して戦えば他の魔女に引けを取らない、どころか圧倒出来るだけの素晴らしい前衛になるっす。加えて命を盾に取られても冷静さを失わないだけの度胸があり、頭の巡りも悪くない……しかもイケメン。確かにおにーさんの魂を手に入れられない事は残念っすけど、そのデメリットを補ってあり余るほどのメリットがあるん

すよ、イケメンのおにーさんを味方にする事には」

今気付いて自分でも驚いたっすよ　そんな風に告げる彼女の表情に、嘘はない。これまでのふざけた色は一切なく、真剣なその表情には吸い込まれそうな魅力すら感じた。

と言うか、そんなにイケメンが好きなのか。

「まあ、嘘はねーみてえだな。命を助ける代わりに仲間になれ、か」「そうっす。悪くない取引だと思っつすよ？」

「……、……」

確かに、それは悪くない。このまま戦っても最終的に死ぬ可能性の方が圧倒的に高いならば、どのような条件だろうと確実に生き残れる方を選びたい気はする。

もちろん、先ほどの屈辱は忘れていないが　極論を言ってしまうえばオレの無力が招いた出来事。例えアリスの理不尽な襲撃が原因だったとしても、こうして状況が変われば抑えられる程度にはガキではないつもりだ。

あくまで抑えているだけだが。

加えて。

「あー、まあそうだな。確かにそりゃ悪くねえ。更に言っちまうと、お前の仲間になればオレがこの先“お前以外の魔女”に狙われなくても、生き残れる可能性が上がるしな」

「……、そこまで気付いたっすか」

「ああ、まあな。お前、言っただよな？　“その魂、魔女たる私の魔

力の糧にさせて貰う”ってよ。それはつまり、魔女って奴は人間の魂を魔力に変換出来るって事だ。で、あの謎の女子も魔女って所を鑑みて、どうやら魔女ってのは複数いるらしいからな。そんな複数いる“お前以外の魔女”にとってもオレの魂は有用な糧になる筈だから……お前が確実にオレを殺さないって確定してるなら、お前と手を組んだ方が得なんだよ。単純に仲間が増えるワケだしな」

「……訂正するっすよ。どうやら、おにーさんはその頭脳も化け物並みっすね」

動揺すら混じったアリスの声に、ハン、と鼻を鳴らす。

「この程度、誰だって推測出来るだろ」

「確かにそうっすね。これまでの会話を全て確認する事が出来て、かつ、それを傍観者として認識する事が出来るならの話っすけど。」

例えば、これまでの一連の流れを小説か何かのようにテキストに起こされた形で読む事が出来るなら、出来ると思うっすよ」

「……」

「でも、おにーさんは違う。いきなり意味不明な状況に陥って混乱していて、命の危機に晒されていて、当事者として現在進行形で関わっていて……そんな中で、どうしてそこまで完璧に全ての言葉を覚えていて、かつ自由に参照して推測出来るんすか？ それ、明らかに異常っすよ」

そうまで言われてしまえば、流石に黙り込むしかないオレだった。オレとしては、特別な事をしている意識はないのだが。

「寒気がするほど怖いっすね、おにーさん。まるで神様の視点でも持ってるみたいっすよ。もしくは、本当にそんな能力を持つてるのか……でも、だからこそ価値がある。私が求めるだけの価値があるっす」

足を引つ込めて、これまでの高圧的な態度が嘘のように彼女は屈み込む。そして出来る限りオレと目線の高さを合わせながら、真摯な色を瞳に湛えて言葉を発する。

「その力と頭脳、私に貸して欲しいです。私と共に戦う事でおにーさんは危険に巻き込まれるかもしれないですけど、でも、誓うつす。私より先におにーさんが死ぬ事は有り得ない。死なせない。一よりも一＋一の方が強い事は、おにーさんなら分かってくれるっすよね？」

熱の籠った勧誘。どうやらアリスにとって、オレは是が非でも手に入れたい駒らしい。また、態度を百八十度変えた点からある程度は礼儀を弁えているようでもあり。その点に関しては、好感が持てた。

先ほどのドS具合と変態性は、忘れないが。幾らでも命を盾に取れる状況で敢えてこちらに合わせようとする誠意は、非常にオレ好みだった。

オレにとってもまた、生きる事は最優先課題であり。

「……どうやって、オレを信用させる？」

しばし無言になった後に放つ、静かな問い掛け。オレのその言葉に込められた意志は、間違いなくアリスに伝わっただろう。

オレを信用させられるなら、仲間になってやっても良い。その言葉に対する彼女の反応は。

「だったら、私は……！！」

アリスが答えを告げようとした、その直後の事だった。

彼女は一瞬にしてオレの傍から飛び退き、即座にそのままとある一点へと視線を向けたのである。

先ほどまで謎の少女が触手に囚われていた、その場所を。

「時間稼ぎ、感謝する。お陰で抜け出す事が出来た」

音もなく歩きながら言葉を発するのは、黒衣に身を包んだ謎の少女。彼女はその手に黄金色の大鎌を携え、こちらへと歩み寄ってきた。

その殺意を、アリスへと向けたままに。

序章・7（前書き）

27は合宿中で更新出来そうにない為、少しでも早めに更新。次の投稿は9月2日の予定です。

序章・7

「……やは。驚いたっすね。まさか、あの術式を解除するなんて思わなかったっすよ」

言葉を紡ぐアリスの表情に浮かぶのは焦りの色。どうやらあの術式とやらは、アリスにとってよほどの自信がある代物だったらしい。

「確かに複雑な構成だけれど、あれだけの時間があれば馬鹿でも解ける。余裕に遊んだ貴女の失策」

「……やはは、けど、かなり魔力を消耗してるっすね？ まあ無理もないっす、あの術式は捕縛と同時に相手の魔力を奪い、奪った魔力で更に拘束を強化する術式っすからね……解除する分も合わせて、相当の魔力を持って行かれた筈っすよ」

多弁は、恐らくは追い詰められている証拠。理由は分からないが、明らかにアリスは近付いて来る少女に対し忌避感を覚えていた。その表情が、何より雄弁な証拠。

「そう、確かに減った。でも貴女なら分かる筈。それでも貴女を殺すに十分な魔力が私の中にはある事を」

「チツ……魔力量も出鱈目って訳っすか」

「貴女に与えられた選択肢は二つ。このまま何もせずに死ぬか、切り札を晒して状況の打破を狙うか」

「やはは……私はアンタとは違うっすからね。そんな口車に乗ってこんな開幕序盤で切り札晒すとか、マジ有り得ないっすよ」

会話を交わす二人の少女を見つめながら、オレは必死になって頭を働かせる。何をするのが最も効率が良いかを。

(状況はどう見てもあの黒い女子が有利っぽいが……アリスにはさつき追い詰めた実績がある。話をする限り頭の回転も速いし、早々負ける事はなさそうだが……分かんねえな。情報が足りねえ)

「そう。だったら此処で貴女は死ぬ。それが運命」

黒き少女の言葉には絶対の意志が見え隠れしており、少なくともアリスを殺せる事は疑っていないようだ。その自信は果たして、どこから来るのか？

(あの黒い女子……面倒くせえから黒子で良いか。黒子はオレを護ろうとしていた。つまり、敵ではない可能性の方が高い、が……あの黒子が何を考えてるかなんて、分かんねえからな……)

アリスの方も黒子と同じく短時間の付き合いでしかないが、それでもオレを仲間にしたいと告げた意志に偽りない事は確かだ。視線を交わして、言葉を交わして、意志を交わして、そうして分かる事は確かにあるのだ。

もっと汚い事を言ってしまうえば、オレとアリスの間には利害の一致があるのだし。

だからこそ、此処は。

「おい、その黒いお前……ちょっと良いか」

「おい、その黒いお前……ちょっと良いか」

黒衣を纏った少女、黒塚は唐突に自身に投げ掛けられた言葉に、表にこそ出さないが驚きを抱いた。この状況で、まさか彼が口を開くなどは予想すらしていなかったからだ。殺意と意識は土御門アリスへと向けたままに、頭の片隅で青年　御鏡悠夜の言葉を拾う。

「お前、言ったよな。貴方を護りながらだと戦えない、とか何とか。なあ、なんでオレを護ろうとするんだ？」

「……、……」

黒塚は迷う。ここで御鏡悠夜と言葉を交わすべきかどうか。それが隙に繋がる事はないかどうか。

チラリとアリスへ視線を向ければ、そこには自身と同じように突然の悠夜の奇行に驚きながらも警戒を緩めない彼女の姿。魔術が魔力を以って成される事をよく理解している黒塚は、アリスの現在魔力量が大幅に減っている事を感じ取り、先ほどのような不意打ちは出来ないだろうと判断。

逃げる為に背を向けようとするならば、その時こそ隙について切り殺せば良い。

ゆえに黒塚は、口を開く事を選択する。

「貴方を護るように依頼されたから」

「依頼、だと……？　誰に、つてのはどうせ守秘義務なんだから……」

「じゃあ、アレか。その依頼が続く限りは、オレを護るって事で良いのか？　その依頼の期間はどの程度なんだ？」

黒塚はようやく悠夜の意図を掴む。恐らくはこちらが信用出来るかどうか見極めようとしているのだろう、と。この状況下でそんな選択肢を選べる大胆不敵さに感心しつつ、ならば、と黒塚は再び口を開く。

「少なくともこの先一週間は貴方を護り続ける。それが依頼。報酬も既に受け取っているから、違える事は有り得ない。何なら契約書を見せても良い」

「やはは、騙されちゃダメっすよ、おにーさん。そのチビも魔女っすよ？ 信用させて後ろからザックリやられるに決まってるっす」

突然口を挟んで来たアリスに、黒塚は目を細める。そして、先ほどまで警戒と焦りを見せていたアリスが今は不敵な笑みを浮かべている事を認識。

黒塚は知る。アリスも悠夜の意図に気付いた事を。そしてこれ以上状況が不利にならぬよう、自分の側へと悠夜を引き入れる為に口を開いたのだ、と。

いつそ今すぐにその首を刎ねようかとも考えた黒塚は、しかしその選択を選ばない。一撃で仕留められるとは限らないし、何よりアリスは護衛対象である御鏡悠夜のすぐそばにいるのだから。

少しでも護衛対象への危険を減らす為、そして、護衛をする上で厄介な事にならぬ為に、黒塚は言葉を紡ぎ続ける事を選んだ。

「それは貴女も同じ。むしろ契約に縛られていない分、貴女の方が裏切る可能性は多いにある。私は少なくとも契約が続く間は絶対に

裏切らない。私たち魔女にとって契約は絶対」

「やはは、確かにそうっすけど、それ、おにーさんにとっては何処の誰とも知らない馬の骨とアンタが結んだ契約っすよね？ 内容がただ護衛するだけだっってどうして信じられるっすか？ 条件付きで殺して良いと契約内容に書かれてないっって、どうして言い切れるっすか？ しかも一週間！ それはつまり、一週間経てば殺せない理由はなくなる訳っすよね？」

「煩い。契約すら結んでいない貴女に言われたくはない。言葉でしか示せない貴女より私の方がどう考えても信用度は上」

「やは、やはやは。契約、契約契約……契約っすか。良いっすよ、そこまでアンタが契約に拘るなら、私はおにーさんと契約するっす。そうすれば文句はないっすよね、おにーさん」
「！！！」

アリスの勝ち誇った表情を前に、黒塚は自身がしてやられた事を悟る。確かに黒塚の持つアドバンテージが“契約”という一点である以上、アリスも契約を結んでしまえば条件はイーブン。

いや、むしろ本人と直接契約したという点において、アリスの方が契約内容の信用度は上だろう。

更に言ってしまったえば、土御門アリスは既に彼女自身が御鏡悠夜を求め理由を告げている。

「さっきも言った通り、私にはおにーさんを求める私的な理由があるっす。その上で確実に裏切られる事を防げる契約を結ぶっすから……私の方が信用度は高くなる筈っすよね？ 少なくとも、その何を考えてるか分からないチビよりはよっぽどマシな筈っすよ」

「ん、あー……いや、まあ、確かにその通りかもしれねえが……何っか」

ガシガシ、と頭を書く悠夜を見て、黒塚は完全に自分が追い込まれた事を知る。もしここで悠夜がアリスの味方をすれば、二人は協力して黒塚へ襲い掛かるだろう。何の強化もなくあれほどの身体能力を見せ付けた御鏡悠夜が魔術強化を施されて向かって来るなど、悪夢に等しいと黒塚は思う。更に黒塚には契約が存在する以上、御鏡悠夜を傷付ける事は出来ず。

結果待つの、敗北。

明確にそのビジョンが浮かんだ黒塚は、此処に来て契約の厄介さに苛立ちを覚えてしまった。

複雑に発達した社会において異端の彼女たちが生きるには、強き権力や地位を持った者と契約を結びその庇護下に入る必要がある。そうでなければ異端の彼女たちは社会の圧力により排除されてしまうからだ。

絶大な力を持つ魔女ではあるが、個人の力で出来る事は高が知れている。ましてや人間は自分たちと異なる存在を徹底的に排除しようとするのだから、社会的強者の庇護を受けられぬ魔女の行く末は推して測るべし。その恐ろしさを、これまで裏社会によって叩きつぶされてきた同類を見て来た黒塚は嫌というほど知っている。

だからこそ、現代に生きる魔女にとって契約は尊いモノなのだ。契約を履行している限りは、社会的強者の庇護を受ける事が出来るから。一度契約を裏切った魔女は以後、二度と裏社会から信用されなくなってしまうから。

信用を失い孤独になった魔女の末路は、徹底的な排他による約束された死。例え死を逃れても社会全体を敵に回した彼女たちは惨めに生きる事しか出来なくなる。

そんな魔女の社会的弱さを知っている黒塚だからこそ、契約を破る事は絶対に出来なかった。それが例えどんな小さな個人と結んだモノであろうと。

どんな小さな契約であれ、一度結んだ契約を破ってしまえばその瞬間に信用は地に落ちて砕け散るのだから。

「やはは、おにーさんならどっちが賢い選択か分かるっすよね？
確かにさっきまではちよろっつと追い詰められたっすけど、私はまだ切り札を切つてないっす。その上でおにーさんの力が加われば、あんなチビ、どうとでも出来るっすよ」
「んー、んん……まあ、そうなんだが……」

黒塚は、祈るように大鎌を握る手に力を込めた。それは御鏡悠夜が敵に回る事で訪れる明確な死のビジョンを避けたいという思いもあるが、同時に彼女にとって彼が単なる護衛対象ではないからこそその所作。

そう。黒塚ハンナという魔女にとって、御鏡悠夜という存在は……。

「んー、んん……まあ、そうなんだが……」

さてどうしようか、とオレは内心でほとほと困り果てていた。いつの間にか、気付けば状況はオレがアリスを選ぶか黒子を選ぶかという二択になっていたからだ。

オレとしては、黒子の反応が知りたかっただけなのだが。

（そりゃまあ、状況の変化は狙ってたけどよ……まあ、良い。むしろこれは好都合って奴だ。取り敢えず、何とか場の主導権は握った。ここからだな……）

「おい、アリス。イマイチ分かんねーんだが、お前たち魔女にとって契約するのはそんなに重いモンなのか？」

「そうっすよ。現代の魔女は異端として排除されない為に、社会的強者の庇護下に入る必要があるっすけど……大なり小なり一度でも契約を破れば、信用を失って社会全てを敵に回す事になって、二度と庇護が受けられなくなるっすからね。さっき言った武装した人間千人に囲まれても何とかなるって話は嘘じゃないっすけど、流石に表裏含めた社会全部を敵に回して生きられるって思うほど、私は馬鹿でも間抜けでもないっす」

「なるほどな。つまり、お前たち魔女にとって契約不履行＝死って方程式が成り立ってると思ってるって良いんだな？」

「イエス、っすね。私たち魔女にとって、契約はそれだけ重たいモノっす」

そう言ったアリスの言葉には、隠しきれぬ悲哀と儂さが垣間見えて。

同年代の少女でありながらそんな表情をせざるを得ない魔女とい

う存在の苛烈さに、オレは遣る瀬無いモノを感じた。

(いつだって、人生はままならねー事だらけだ。理不尽で、非情で……どんな場所でもそれは変わらねえ、って事か)

どこか縊るような目でこちらを見つめる黒子を見る限り、恐らく彼女も様々な理不尽をあゝの華奢な身で経験しているのだろう。

これまで自身が歩んで来た理不尽な十六年間を思い出してから首を振り、「なるほどな」と繰り返す。

「取り敢えず、把握した。そこの黒子はオレに敵対出来ないし、アリスはオレの力が欲しい。そう言う事だな」

そうつぶすね、というアリスの言葉と、こくん、と頷いた後に「黒子……？」と首を傾げる黒子。それを確認したオレは、しばし逡巡。それは、今思い付いてしまった策の是非について。

(どうする？ 上手くやれば二人のどっちを選ぶか悩まずに済むし、何より強力な味方が出来る……が、失敗すりゃ最悪どっちも敵に回す事になる……)

選択すべき時だった。アリスを選ぶか、黒子を選ぶか、それとも……。

「うしつ、んじゃあ此処でオレから提案だ。お前ら、手を組むつもりはねえか？」

「……や、は？」

「え……？」

呆気に取られたような二人の声を聞き、幸先は悪くないと乾いた唇を湿らせて思う。

悩んだ果てにオレが選んだのは、“共闘”という選択肢。

「黒子はオレに手が出せないから、アリスとオレが組むのは避けたい。アリスは単独じゃ黒子に苦戦するから、オレを手元に置きたい。まあアリスの場合はオレと黒子に組まれると更に厄介になる、って考えもあるんだろうが……どっちにしろ、オレが片方についたらもう片方が不利になる事は避けられねえ」

一息。

「だったら、オレたち三人で協力しようぜ。そうすりゃ黒子はオレと戦わずに済んで契約を履行出来るし、アリスはオレの力を有効利用する事が出来る。悪くない話だと思うぜ？」

「……」

「……」

アリスと黒子は、共に無言。何を言っているのかこの男は、という視線が容赦なく全身に突き刺さる。

「……やはは。私がこのチビと手を組む？ おにーさん、ちよつとこつちが下手に出たからって、調子に乗り過ぎじゃないっすか？

あんまり舐めた事言ってる、好い加減殺しちゃうっすよ？」

「御鏡悠夜は殺させない。けど御鏡悠夜の言葉を聞く事も出来ない。私と彼女が手を組む事など有り得ない。あと私の名前は黒子じゃない。黒塚ハンナ」

アリスからは敵意と殺意を、黒子 ハンナからは拒絶の意志を。

負の感情をそれぞれから叩きつけられる中で、流れる汗と乾いてゆく喉を自覚しながら、それでも不敵な笑みだけは崩さずに、オレはこんな馬鹿げた賭けに出た切り札きっかけとなった言葉を此処で切る。

「けどよ、少なくとも一時的には手を組んだ方が“他の参加者”を出し抜けるんじゃないのか？」

「！！！」

「……！？」

二人の驚きは、ほぼ同時。信じられないモノを見るかのような驚愕をその顔に表している事を確認しつつ、オレは自分の考えが正しかった事を知り、二人が驚いている今ならば問題あるまい、と多少残る痛みを抑えながら立ち上がる。

「ハンナが現れた時、アリス、お前言ったよな？ 『他の“参加者”に割り込みを許すなんて、私もまだまだ未熟って事っすか』とか何とか。参加者って事は、お前もハンナも何かのイベントに参加してるって事だ。でもってこれは推測になっちまうが、イベントであるなら参加者がお前ら二人だけってのは考えにくい」

頭の中で言葉を組みたてながら、慎重にそれを紡ぎだして行く。

「さて、ここで参加者であるお前たち二人の共通点は何だ？ そう、魔女っつー点だ。つまり、必然的に他の参加者も魔女って事になる。あくまで推論だから違つかもしれねーけど、取り敢えずそういう前提で話を進めるぜ？ じゃあそんな魔女たちが複数名集まって何をすって考えて……お茶会でもすんのか？ 違つよな、だってお前たち二人はそれが当たり前であるかのように“殺し合い”を始めただからよ」

推論に推論を重ねただけの、何一つ明確な証拠がない言葉。発想の飛躍。だが、ここまで来たら止まる事など出来ない。

「更に更に、アリス、お前『こんな開幕序盤で切り札晒すとか、マジ有り得ないっすよ』とか面白い事言ってたよな？ 開幕序盤って事は、このイベントはまだ始まったばかりで……これからもこんな殺し合いが何度も続くって事だ。そう、お前たち二人を含めた複数の魔女による殺し合いっつーイベントが、な」

ハンナの目は完全に見開かれ、アリスの表情には明らかな動揺が見え隠れしていて。

散々非常識の淵に叩き落としてくれた二人に仕返しが出来た気がして、それなりの満足感。

「だから、手を組もうぜって言うてんだよ。消耗した分の力は協力する事で補えるし、二人で一人ずつ倒していけば遥かに早く片付くだろ？ その後で改めて二人で雌雄を決すれば良いじゃねえか」

ケケケ、という笑いを付け加えた理由は、必死になっている自分を隠すため。

一歩間違えれば即座に死ぬこの状況は、率直に言えば恐ろしい。だが同時に、それを表に出さないだけの経験は積んでいるつもりだ。

そんな考えと共に言い放った言葉に対し、最初に反応を返したのは口をパクパクさせていたアリスだった。

「おにーさん……本当に何者っすか？ 何でそんなに覚えてて、そ

んな完璧な推理が……しかもそんな風に平然と提案出来るとか、訳
分かんないっすよ」

その瞳に宿るのは、未知に対する疑念。深い警戒。

アリスの反応を見て、少なくとも彼女は望み薄だと判断。あの表
情を見る限り、こちらに対しては利用する前に殺そうとする可能性
の方が高い。

次いで反応を返したのは、ハンナと名乗った黒衣の少女。

「……驚いた。こんなに驚いたのは初めて。その推論は何一つ間違
ってない。素晴らしい。やはり貴方は……」

彼女はアリスとは対照的に、偉大なモノに出会ったかのような尊
敬と驚きの眼差しでオレを見つめて来る。

これもまた想定外の反応ではあるが、悪くない。とは言えかなり
の唐突感も否めないから、ハンナの場合は恐らくはオレに関する事
前情報か何かを知っていたのだろう。

あるいは、最初から何某かの理由でオレを肯定的に捉えていたか。

正反対の反応の魔女二人に対し苦笑を噛み殺しながら、口元を歪
めてオレは答えてやった。

精一杯の皮肉と最大限の自嘲、そして一欠けらの悪戯心を込めて。

「御鏡悠夜

ただ日常を生きたいだけの高校生だよ、バーロー」

御鏡悠夜、黒塚ハンナ、土御門アリス、その三名が膠着状態に陥っている光景を、その人影は遠く、数キロメートル離れた霧桜高校の屋上から見つめていた。ここに魔女がいたならば、屋上に立つ人影が目には魔力を集中させている事を認識出来たかもしれない。

魔力を利用して身体能力を強化する事は、魔道に慣れ親しんだ者にとっては当然のスキル。だがしかし、これだけの距離において十全に見える精度で視力を強化出来る者などそうはいまい。

「……そっか。関わっちゃったんだね、御鏡くん」

灰色に染まった世界の中で、その人影は青みがかった黒髪のひとつ房を手に取り、手の平で弄ぶ。呟く声音には悲しみが、表情には陰鬱さが、隠しようもなく滲んでいる。

「本当は関わって欲しくなかったけど、でも、仕方ないのかな……。だって、御鏡くんの魂、凄く美味しそうだったもんね……」

ゾツとするような声音で呟いた後に静かに髪から手を離す人影。その人影がまるで何かを払うかのように腕を薙いだ、その直後。

「God said, "Let there be light, and there was light."」

紡がれた言葉と共に、人影の　美しい少女の手には真白に光り

輝く弓が生み出されていた。それは灰色の世界にあつて、その存在感を主張するかのように神々しく輝き、少女を染め上げる。

立ち姿だけを見るならばその美しさと相まって、まるで女神か何かのよう。だがしかし、その顔が作る陰りが二律背反を作り出し、何とも言えぬ恐ろしさを描き出していた。

「でも、安心して、御鏡くん」

ポツリと呟き、顔は悠夜たちの方へと向けたままに、左足を半歩踏み開き、一度目線を足元に取って外側に右足を半歩踏み開く。合わせるように光で出来た弓の下端を左膝頭に置き、弓を正面に据え、右手は右腰の辺りへ。

「私だけは、例え何があつても御鏡くんの味方だから」

そこからの一連の動作は、弓を扱う事を熟知した者のそれ。その構え方を見るだけで、少女が相当に弓の扱いに習熟している事は誰もが知る事となるだろう。

無論、この場には観客などいはしないが。

弓と同様に光り輝く矢が、悠夜たちがいる方向へと固定される。

そして。

「今はまだこの私を知られる訳にはいかないから、こうして遠くから助ける事しか出来ないけど……でも、私は絶対、絶対に御鏡くんの味方だから、だから……」

光の灯らぬドロリと濁った瞳で彼方を見据え。

「……だから、騙されちゃダメだよ？」

引き絞られていたその手を、解放した。

「まあ、何だ。取り敢えず、答えを聞かせてもら」

口を開きかけた、直後の事だった。

オレのすぐ傍を、“何か”が過ぎ去ったのは。

同時に聞こえる、破砕音。

「……は？」

ぼかん、と間抜け面を晒しているだろうオレの視界には、ロケットランチャーか何かを撃ちこまれたかのような破壊の跡が広がっていた。粉塵を撒き散らして崩れ落ちたコンクリート塀と、地面に空いた小規模のクレーター。

何処からか飛来した二筋の何かが直撃したのは、先ほどまでアリスとハンナがそれぞれいた場所で。

「お、おいつ、二人とも無事か！？」

ハツと我に返ったオレは、思わず粉塵の向こうへとそんな言葉を投げ掛けていた。それは本当に反射的な行動であり、逃げるならば今がチャンスだという考えすら頭から抜け落ちていた。

「ケホツ、ケホツ……や、やはは……おにーさんに心配されるほど、落ちぶれちゃいない、つすよ……」

「面白い冗談。貴女はあと一歩でも遅れていたら粉々になっていた」

やがて聞こえて来る、咳き込むアリスの声と少なくとも聞いている限りは平然としたハンナの声。

別方向から聞こえたそれぞれの声にホツと安堵の溜息を吐いたオレは、いつの間にかその身の安否を心配するほどに二人に感情移入していた事に気付く。

まだ出会って一時間すら経っていない相手なのに、である。付け加えれば、ハンナはともかくアリスはオレの命を狙おうとしていたにも関わらず。

理由に関しては、何となく察しがついていた。

何て事はない、オレは自分に似たモノを二人の少女に感じてしまったのだろう。

十代半ばという、普通ならば同年代の友人と馬鹿をやっているような時期に理不尽な世界に生き、いつ死んでもおかしくないような道を歩んでいる二人の少女に対し、同情や共感、その他諸々の感情を抱いてしまったのだ。

最もそこには、自分でも自覚している女子供への甘さが多分に影

響しているのは間違いないだろうが。

ある者はその甘さを女誑しと言うし、ある者はそれを偽善と言うが 正直に言えば、どうでも良い事だ。オレは常にオレがやりたように考えやりたいように生きようとしているだけなのだから。

(つと、これは思考の脱線だな……)

オレは気付けば脇道に逸れていた思考を振り払い、二人へと言葉を投げ掛ける。二人のいる位置が正反対な為、どちらを向くかは非常に悩む所ではあったけれど。

「おい、今のは他の魔女の攻撃で間違いねえのか!？」

「そーみたいつすね。どうやら私たちは狙われてるみたいっすから……此処は一旦引かせてもらっつすよ!！」

言うのが早いのか、アリスは何か宝石のようなモノを懐から取り出し、それを思い切り地面へと叩きつける。

次の瞬間。

「なっ……」

オレが見ている前で、一瞬にしてアリスはその場から姿を消してしまっていた。

「転移石……やられた。こうなったら仕方ない。御鏡悠夜、こちらも直ぐにこの場を去る。いつ第二射が来てもおかしくない」

「え、あ、お、おう って、逃げる手段はあんのかよ!？」

冷静に言葉を紡ぐハンナに対し叫び声を上げてしまったオレは、やはり未だこの魔女という不可思議生命体に対する耐性が出来ていなかったのだろう。

こくん、と一つ頷くとハンナはオレの服を掴み、いつの間にか大鎌から杖へと変化していたその謎武器の先端でトン、と地面を叩いた。

直後。

「 Whirlwind 」

二人の身体が光りに包まれたと感じた瞬間、浮遊感を覚え、そして。

オレ達は、その場から消失した。

序章・8

「そこに座って。今お茶を入れる」

「お、おう……」

あのトンデモバトルの後、黒衣の少女ハンナ曰くの“転移術式”で彼女の住処らしいアパートに連れて来られたオレは今、座布団の上に座りながら、お茶を汲む少女の姿を見つめていた。

聞きたい事は当然ながら山ほどある。あの推論が何処まで正しいのかについてもそうだし、正しいと仮定して何故そんな殺し合いが行われているのか、そもそも魔女とはどう言った存在なのか、どの程度いるのか、などなど。

それでも何も問い掛けていないのは、ただ単純に、今更ながら少女がかなりの美少女である事に気付き、その静かな佇まいに目を奪われていたからだ。

艶やかな黒髪ショートカットにしたハンナは、正直言ってかなりレベルが高い。小柄な外見から十三か十四程度かとも思うが、将来の美貌を約束された氷のように美しい顔。纏う静謐な空気と美しいアイズブルーの瞳が生み出す神秘的な雰囲気は、それだけで他者を圧倒するだろう。

「飲んで。少しは落ち着く」

「あー、悪いな。遠慮なく頂く」

とは言え彼女がお茶を持って来て対面に座った時には、既に目を奪われる事は無かったのだが。取り敢えず一口飲んで、無表情でこ

こちらを見つめる少女に対しオレから話題を切り出す事にした。

「んで、だ。取り敢えず最初に聞きてえんだが、お前は間違いなくオレの味方って事で良いんだな？」

「その認識で問題ない。これまでの生と魂と魔女としての誇りに賭けて誓う。私はあらゆる手段を以って貴方を傷付けず、護り抜いて見せる」

「……、」

力強く言い切られた言葉と、気圧されるほどに強い意志を宿した瞳。知らず喉が鳴る。確かに彼女はオレに敵対する事など有り得ないのだろう。

この幼げな少女にそこまで覚悟させる契約の重さに、オレは改めて畏怖を覚えた。

「あー、んじゃ、次だ。オレがあの時言った推論、ぶっちゃけ何処まで合ってる？」

「殆ど正解。あの状況下であれだけの情報から導き出せた事は奇跡的」

「そうか……。まあ、そういう事なら、取り敢えずお前自身の口から教えてもらって良いか？」

こくん、と頷いた後にハンナは再びその口を開いた。

「貴方の言った通り、今この街には私を含めて複数の魔女がいる。理由はこの街で、魔女たちによる殺し合いが行われているから」

「あー、つまりあれだな。バトルロイヤル、って奴だな」

「そう。バトルロイヤル」

静かに頷くハンナの言葉を聞き、本当にラノベみたいなお話になって来たな、と内心で溜息。だが、次に彼女の口から語られた言葉で、オレはアリスに襲撃された時と同じくらいに啞然とする事になる。

「そしてその目的は、神の座の末席にその名を連ねる為」
「……は？」

今、ハンナは何と言ったのか。

(神の座の末席に名を連ねる……？ 神つてのは、あの神だよな？)

「いや、いやいやいや、何言っちゃてんだよ、いきなり。いやいやいや、魔女とか魔術とかはまああるかもしれないけど、神様とかいうワケねーだろ常識的に考えて」

「落ち着いて欲しい。何故そんなに貴方が慌てているのかが私には分からない」

少なくとも。

「冗談でも何でもなく真顔で、心底正しいという顔でいきなり神の座が云々とか言われたら焦って当然だと思う。」

「あー……まあ、何だ。つまり、神様は実在すんのか？」
「それは分からない。けれど少なくとも神と名乗る存在がいる事と、その存在が神であると信じるに足るだけの全知と全能を備えている事は確か」

「……ふうん、なるほど、な」

そこまで聞いて、ようやく気が落ち着いた。神話に語られるあの神様なのかと思ったが、どうやらそんな事もないらしい。

(つまり、極論を言っちなまえば神を名乗れるだけの力を持った魔女
っつー可能性もあるワケだ)

既に魔女という存在を当然のモノとして受け止めている自分に関して
は、色々と諦めている。現実に存在するモノをいつまでも否定
していたって仕方があるまい。

「私たちが殺し合いをしている理由は話した。他に聞きたい事は？」
「そうだな……取り敢えずお前たち魔女つてのがどんな存在なのか、
どの程度の規模で存在してるのか、何でこの街が舞台なのか……っ
て所か」

オレの言葉に、こくん、と頷いてからハンナは再び説明を始めた。

「私たち魔女は裏社会の陰に生きている。大抵の魔女は権力者や資
産家の下で彼ら専属として働いている」

「その辺はアリスもちよいちよい言ってたな。つか、そもそも何で
魔女なんて因果なモンになってるんだよ、お前ら。もしかしてとは
思っただが……」

「恐らくその推論は正しい。私たち魔女の大多数は生まれながらに
魔女としての力をその身に宿している。何故そんな力を持つて生ま
れるのかも不明。科学的根拠がゼロ。その力のせいで表の社会から
拒絶されて裏社会からも嫌悪されて、行き着く先が異端としての力
を貸す代わりに権力者の庇護を受けるという契約」

「……つまり、自分で選ぶ事すら出来ねえって事か」

ギリ、と、知らず齒噛みしていた。ハンナの口から語られた魔女
という存在の境遇が、不条理という点で自身と似通っていたから。

生まれながらに異常性を有しており、胎内にいる段階からソレが判明していたがゆえに生まれてすぐ研究施設へと送られた過去。様々な実験を受け続けた日々。

異端として生まれてしまったがゆえに不条理を強制された、という点でオレと魔女を名乗る彼女たちは同類だった。

オレにとって幸運だったのは、オレを　否、“オレたち”を生んだ母親が意味不明なコネクションを持っていたお陰で、非人道的な実験は受ける事がなかった点だろう。

最も、オレたちの母親　御鏡悠はオレたちを産んだ直後に死亡したがゆえに、オレの記憶には残っていないのだが。何か様々な裏取引があつたらしく、既に御鏡悠という存在の情報、それ自体が抹消されている為に調べる事も出来ない。

思う所がない訳ではないが、顔も知らない相手の事だ。正直に言うてしまえば、興味も執着も薄い。

「……話を続けても平気？」

「っと、ああ、すまねえな。続けてくれ」

オレの態度が原因か、僅か瞳を揺らしながら問いを発するハンナ。そんな様子を見て、無機質とばかり思っていた彼女の意外な点を見た気がして少しばかりの驚き。

「とにかく私たち魔女はそうやって生まれ、育ち、今に至る。主な仕事は要人警護や暗殺、好事家の趣味を満たす為の収集作業、そう言った事。明確な契約に基づいているから、働きに見合うだけの報酬はちゃんとある。どの程度の休日があるか、どの程度危険度が高

いかは雇い主によって異なる」

「そうか。つまり、あれか。ゲームや漫画みてえなファンタジー世界に生きてるってワケじゃなく、魔女つてのは職業の一種だと思っ
て良いのか？ 特別な力を持った人間にしかねない職業的な」

「その考えで合っている。雇用の契約に基づいて働き報酬を得ると
いう観点から見れば、会社員と大差はない。出来る事とやる仕事の
内容が決定的に異なるだけ」

「二時間くらい前までのオレだったら、名前の響きの割には夢がね
ーなって言いそうだが……まあ、でも常識的に考えてそうだよな。

この世界にはご都合主義なんてねえ。どんだけ異端の力を持ってて
も……ちげーな。異端の力を持つてるからこそ、今の社会じゃそう
やって生きて行くしかねえワケだ」

「そう。それが私たち魔女の宿命であり業。異端者であるがゆえに
何よりも社会のしがらみに縛られる存在」

一区切りついたらしく、言葉を切ってから湯のみに口をつけるハ
ーナを視界にとらえながら、胸糞悪いと内心で毒づく。話を聞く限
りオレと同年代、下手をすればオレより年下のガキがそんな理不尽
に晒されているのである。

何も考えずに受け流せというのは土台無理というモノだった。

「二つ目に関しては 正直に言うとは分からない。日本で活動して
いて私が知っている限りだと、十人」

「十人……随分少なえな」

何の根拠もなく仮にその三倍がいたと仮定して、日本人口約一億
二千万から見れば少ない事は間違いない。

「まあ、日本でって事は世界中にいるんだろうが……それも分から

ねえ、んだよな」

「分からない。魔法使いならばどの程度の規模でどの程度の数がい
るのか知っている。ただ魔女になると分からない」

「……ん？ んん？ おい、ハンナ。今すげえ不思議な言霊が聞こ
えた気がしたんだが？」

「？……？」

小首を傾げる仕草が不意打ち気味に可愛い などという場違い
な感想はどうでも良く、オレは冷静になって先ほどのハンナの言葉
を吟味する。

「お前、魔法使いならばどの程度の規模でどの程度の数がいるのか
知っている、とか言ったよな？ それを聞いてるとよ、魔女とは別
に魔法使いっつー存在がいるって風に聞こえるんだが？」

「そう。それで正しい。この世界において魔道を扱う存在は魔女と
魔法使いに分類される」

「……」

オレの心境を擬音一つで表すならば、ぼかーん、と言った所だろ
う。突如降って沸いた事実、オレはしばし思考が停止してしまっ
た。

「あー、つまり、なんだ。魔女と魔法使いつてのは別物なのか？」

「そう。十代前の祖先まで遡って、間違いなく一般人の家系である
と判断された家から何の前触れもなく突然変異のように生まれるの
が魔女。それとは逆に、十代前の祖先まで遡れば必ず魔道に慣れ親
しんだ歴史があり、殆どの場合において連綿と魔道の血と業を受け
継いでこの世に生を受けたのが魔法使い。似ているようで、その実
態は大きく違う」

「……、で、その魔法使いつて奴らは、オレがイメージするような

魔法使いで良いのか？ ヘンリー・ポッターみてえな」

「少し違うけど概ね正しい。魔法使いの社会があり、教育機関があり、多くの魔法使いが世界中に点在する密かに造り上げられた街に住んで暮らしている」

オレはハンナの言葉に眩暈を覚えた。裏社会、なんて非現実的なモノがあるのは何も問題はない。社会とは元来、合法と非法を併せ持った仕組みなのだから。

魔女、という存在がいる事も認めて良い。非常識ではあるが、そもそもオレという存在が既に非常識の塊と言われており、また、魔女という固体を人間の歴史における突然変異種だと解釈すれば何とか理解する事は出来るのだから。

（だが魔法使い、テメーは駄目だ。つか何だよ魔法使いとか、んなファンタジー小説みてえなモンがあるとか、有り得ねえだろ。いや、それ言っちゃったら今も充分ラノベ的展開だけだよ、いやそれにしても……）

「いや、ぶつちやけ有り得ねえだろ、魔法使いとか。人間だって馬鹿じゃねえんだ、そんな存在がいりゃあその痕跡ぐらいは分かるっつーか、表沙汰になってもおかしくねえんじゃねーか？ そんなだけ規模がでかいならよ。……いや、それともまさかとは思うがよ」

「そう。魔法使いの社会は、この高度に発達しすぎた現代社会相手に魔道という神秘を隠し切れる程度には発達している。更に言えば世界各国の上層部は魔法使いという存在を認識していて、彼らの社会とは不可侵条約を結んでいる」

「……………」

眩暈などというレベルではない。オレは一瞬、この頭を叩きつけ

ればこの夢から覚めるのではないか、などという軽い現実逃避すらしてしまった。

「つまり、何だ。オレの住んでるこの世界は、ファンタジー小説な展開がそのまま繰り広げられてるような非常識世界だった、ってワケか？」

「そう。魔女がいれば魔法使いもいて、表社会があれば裏社会もあり、幻想生物や精霊などの存在も密やかに存在しているのがこの世界。だからこそ一般人が何も知らず毎日を過ごしているのは奇跡に近い」

確かにハンナの言葉を聞く限り、そんな非常識な世界がすぐ隣にあつてここまで常識が保たれているのは奇跡と言って良いかもしれない。

もっともオレが知らなかっただけで、もしかしたらすぐ身近でも非常識な事件は起きていたのかもしれないが。

少し前まではこんな魔女同士の殺し合いが行われているなど知らず、非現実的な事件に巻き込まれはしたが、それでも非常識などとは縁がない高校生として生きていたのだから。

「あー、まあ、良いや。オーケー、納得はしてないが理解はした」

「そう。だったら良い。あと、そろそろ話を続けたい。魔法使いの存在はこの街で起きているバトルロイヤルとは殆ど関係がない事象」
「ほー、そうか。オレはまたてつきり、魔女と魔法使いっつー単語の相似具合的關係があるのかと思つてたぜ」

「それは違う。魔女と魔法使いは完全に別個の存在。虎とライオンみたいなモノ」

「……オーケー、分かった。もう突っ込む事はやめるから、取り敢

えず続きを話してくれや」

こくん、と頷くと、ハンナは急須を手にとってオレと彼女自身の湯のみへとお茶を注ぎながら口を開く。

「三つ目の、この街で行われている理由。それは 前回のバトルロイヤルが、この街で行われたから」

「……何？」

「今から約二十年前。この街に住んでいた一人の魔女が神を名乗る存在に見初められ、同等に近い力を与えられようとした際、当時生きていた総ての魔女たちが不公平であると唱えた。そして神は確かにその主張も最もだと告げ、ならばこの街にて殺し合いを行い、最後に残った者に神の力を授けると契約を結んだ。それが今に至る起源」

「……、て事はあれか、オレが生まれる四年前くらいに、この街では魔女同士の殺し合いがあった、って事か？」

躊躇いなく、あっさりとはンナは頷いた。

「そう。そして貴方は この街に住む全ての者は知っている筈。

今から約二十年前、この街で様々な怪事件や謎の爆発事件が頻発しており、また、郊外に存在していた世界遺産に認定されていた森が焼失してしまった事を」

「ああ、まあこの街に住んでりゃ一度は耳に聞く話だな、風羽の暗黒期つつつて……ってオイ。まさか、噂に聞くアレが全部その魔女同士の殺し合いによるモンだったのか？ あの、最終的な死傷者数が千人を突破したっつーあの一連の事件群がよ」

「そう。殆ど全てが魔女同士の争いが起きた結果。……そんなに怖い顔をしなくても良い。少なくとも今回の殺し合いではそんな事にはならない。貴方の大切な人たちが巻き込まれて犠牲者になるよう

な事はない」

目を閉じ、喉元まで込み上げて来た様々な感情を無理やり呑み下す。今にも握り潰されそうだった湯飲みから手を離し、真っ直ぐにハンナの目を見て告げる。

「その、根拠は。オレの大切な奴らが巻き込まれて犠牲者になる事はねえっつー根拠は何だ？」

脳裏に浮かぶのは、華恋や健介、葵や神楽、そして、裏社会に関わってはいるが魔女なんて非常識な存在を知らないであろう暗邸。そんな、この街に住む大切だと迷い無く言い切れる奴らの顔。

あいつらに危害が及ぶ可能性があるのならば、それは……。

「今の魔女たちには、一つの能力がある。この現実世界と僅か位相を異とする擬似的な異空間を創り出す術 かくりのほう 幽法と呼ばれている力が。この力を使えば、現実世界に被害が及ばぬように戦う事が出来る」

それを聞き、アリスに襲撃された際の世界の異常な変化はその幽法によるモノだったのだらう、と何となく当たりをつけた。

ハンナの瞳を見る限り、その言葉に嘘はないのだらう。だが、しかし。

「オレは忘れてねえぜ。アリスは、オレの魂が上質だから襲ったっつってた。それはつまり、魂さえ上質ならお前ら魔女は何も知らねー一般人を襲う可能性があるっつー事だ。その牙がオレの大切な奴らに向かわないなんて、どうして言える？」

いや、と言葉を一端切り、唇を湿らせてから言葉を続ける。

「もつと言つちまえばオレは他の魔女がどんな奴から分からねーし、そもそもお前らの事も全然知らねえ。魔女の中に、その力を使って無力な人間を甚振る事が趣味の奴がいねえなんて、そいつらに大切な存在が蹂躪される事なんてないなんて、んな保障はねえだろうがよ」

「……、……貴方の判断が聞きたい。貴方の大切な人間が傷付く可能性はあるかもしれないとして、貴方は何がしたいのか」

そんな事、決まっている。

「力を貸してくれ、ハンナ。アリスの言葉を借りれば、お前ら魔女の力でオレを強化すればオレも戦えるんだろ？ だったらオレを手駒にして良い、指示には従う。対価を求めるなら払う。だから、頼む。オレに力を貸してくれ」

「ッ」

息を呑んだらしいハンナの声。だがその表情は今のオレには分からない。

何故なら、今のオレは深く頭を下げているから。

……間違えてはいけない。オレとハンナは決して対等ではないのだ。ハンナがその気になればオレの首なんぞ比喩無く容易く飛ぶし、何よりハンナはその身を挺してまでオレを助けてくれたのだ。例え契約があつたとしても。

だからこそ、ここはオレが頭を下げるべき場面。

どれだけ望もうとどれだけ願おうと、追い詰められてご都合的に真の力に目覚める事など有り得ない。謎の超存在から力を与えられるなんて事もあり得ない。そんなモノは御伽噺の中だけだ。

いや、魔法使いや魔女なんてモンがいて、神を名乗る存在がいる以上、もしかしたらそんな事もあり得るのかもしれないが オレはそんなご都合主義など信じない。

力が欲しければ、相応しい状況とそれに見合う対価が必要だ。技術的なモノならばそれを磨ける場所と努力が、権力者から力を借りるなら実際に会えるだけの環境と金が。祈るだけで力が入るなど、有り得ない。

対価に何が必要かは分からないが、相応しい状況は目の前にある。魔女という力を持つ存在が、オレの前にいるという現実が。

ならば、自分に出来る最善を尽くすだけだった。

「……まず、頭を上げて欲しい」

ハンナの言葉を聞き頭を上げると、そこには何故か僅か頬を上気させた彼女の姿。

(うおっ、無表情とのギャップがやべえ……じゃなくて、何でそこで頬染める必要があんだよ)

訳が分からないながらも、とにかく一言一句言葉を聞き漏らすまいとオレは神経を張る。

「貴方の言い分は分かった。ただ、私の立場は貴方の護衛。貴方を危険な目に遭わせる訳にはいかない」というのは理解して欲しい」
「ああ、だろうな。お前からすりゃあ、縛り付けてでも自分の傍に置いてきてえだろうしな」

「縛り、付けてでも？ 縛り……付ける」

（おい、何でそこで更に頬を赤くするんだよ？ つか、明らかに“縛る”っつー単語に反応し過ぎだろ。オレを好きっつーようなアレは見えねえし……もしかして）

オレは一瞬頭に過ぎった嫌な想像を振り払う為に、頭を振ってから口を開く。

「そつちの事情は理解してるつもりだ。それを押して頼む。オレには力が必要だ。情けねえけどそうするしか戦う術がねえし、オレには護りたい奴らがいる。そしてオレは誰かにそれを任せてのうのと護られている事なんて出来ねえ。だから頼む……力を貸してくれもう、嫌なんだよ。大切な奴を損なうのは……」

思い出すのは、力があつたのに護る事すら出来なかった過去。何時如何なる時でも護ると、傍にいと誓ったにも関わらず離れてしまい、そして。

『アハ……アハハハハハハハ！』

壊れて 否、損なわれてしまった最愛の彼女。血に染まる部屋の中で、ただ一人血に塗れた包丁を持って狂ったように笑い声を上げていた、オレの初恋の彼女。

オレが間に合っていれば 否、オレに駆けつけるだけの力があ

れば防げた筈の悲劇。最悪の過去。華恋のお陰で普段は表に出る事などないし、心の整理もつつあるが　だからと言って、忘れる事など有り得ない。

もう二度とあんな過ちを犯す事がないよう、自分自身を鍛え続けてきた。裏社会に関わらなければいけない不条理を利用して、経験も積み続けている。

そうして築き上げて来た今のオレですら届かない絶望が現れたならば、その絶望を切り裂けるだけの力を手に入れるだけの事。そして護るのだ、今度こそ。あの時よりも増えた、大切な奴らを。

オレの日常を象徴する、不条理を生きて来たオレに人並み以上の幸せをくれる彼らを護る為ならば、オレは……。

「……分かった。どうやら貴方の決意は固いらしい。恐らく、止めても自分から首を突っ込む。だったら私が最大限力を貸す方がより貴方を護りやすい」

「すまねえな、我俣だったのは分かってる。ただその代わり、オレに出来る事なら何でも言ってくれ。言い付けは護る。それでアイツらを護れるなら、な」

そう。帰るべき場所を護り、再び笑い合える日を迎える為ならば　一時この身を闇に寄せる事すら厭わない。仲間になれと言われればなつてやるし、仕えろと言われたならば仕えてやる。

全てにケリをつけて、あの場所に帰る為に。

「そう、分かった。……まずお願いしたい事があるのだけど、良い？」

「おう、何だ」

「先ほどから何故かとてもやりたいと思っていた事がある。貴方が私に頭を下げる姿を見た時からふつつつと沸いて来た気持ちがある。これを何と言うのか分からないけど、解消する手伝いをして欲しい」
「……いや、まあ、構わねえけど……」

何故か流れる、冷や汗。

眼前にいる小柄な美少女、ハンナはその無表情を僅か赤く染め、何処からともなく取り出した縄を見せながら……。

「貴方を、縛らせて欲しい」

「そんな事だと思ったよこんちくしょおおおおおおお！！ つーか最後までシリアスにやりやがれえええええええええ！！」

絶叫が、部屋に響き渡った。

「そう。此れは殺し合い。神の座を其の手に掴む為に行われる、魔女たちによる血の宴」

広い、ただ果て無く広い空間。無限の闇が広がる虚無を連想させるその場所に、一人の男が佇んでいた。

ゆらり、ゆらりと揺らめくその人影は、今にも消えてしまいそうな儚さを持ちながら、同時に絶対に消える事がないと思わせる不気

味な存在感を放っている。

余りにも矛盾したその“何か”は、闇の中で告げる。

「人が造りし魔器アーティファクトと己が磨き上げた業、そして神から参加者に授けられた至高の術理たる神器エンシェント・ワウン……この三つを以って他者を喰らい、糧とし、最後の一人になるまで殺し合う究極の儀式。それがこの物語。だがしかし、どうやらイレギュラーが混ざり込んだようだ。…貴女なのだろう？ “神代”」

不意に、その人影は後ろを振り向き告げる。

その声の方向にいたのは

「うん、まあね。余りにも綺麗に作られた“物語”だったから、ちょっと壊してみたくなったの」

幼き少女のカタチをした、“何か”。

その服装は、黒を基調としてフリルを大量にあしらったゴスロリファッション。肌は恐ろしいほど透明感のある白さで、艶やかな髪は闇よりも尚濃く深い夜色。

両目に嵌められた色は、妖しくも美しい金銀妖瞳。

美の極致、或いは至高の芸術品とも言つべき少女がそこにいた。ふよふよと浮きながら、彼女は満面の笑顔を浮かべる。

「その点に関しては素直に謝るけど、でもコツチの方が面白そうでしょう?」

「ふむ。なるほど、確かに造り手たる私にすら読めぬ物語は面白いでしょうが……正直に言えば困るのですよ、貴女ほどの存在に出張られては」

矛盾する人影は、それまでとは異なり僅かながら不快感を込めて言う。

対する少女の反応は、変わらない笑顔。

「あはは、だからちゃんと“駒”を用意したよ? 御鏡悠夜って言う駒を」

「ふむ。では貴女自身がこの物語に関わるつもりは無い、と?」

「こくん、と少女は頷く。」

「まあね。だって、他人の作った物語に神代が出ちゃうと、その瞬間にその物語が破綻するもの。それは流石に詰まらないの。だって、神代はキミたちが作った物語を読むのが大好きだから」

「これはこれは、何とも勿体なきお言葉。ふむ。ならば楽しませてみせましょう。既に我が手より離れたとは言え、この私が手ずから創り上げた物語。必ずや貴女のご期待に添えるものと確信していますよ、神代」

「ええ、期待してるの。頑張って神代を楽しませてね?」

これは、限りなく遠き何処かで交わされた会話。全ての元凶であり黒幕でもある二人の超越者による、二人以外誰も知る事の無い会話。

今はまだ、登場人物の誰も知らない。自分たちの行動が、全て彼ら黒幕の掌の上にある事を。

故に登場人物たちはもがき、足掻き、殺し合い、その果てにある、仕組まれた栄光を求め合う。

その予定調和を打ち破る事が出来る存在は……。

序章・8（後書き）

これにて序章終了。次から一章になります。美少女ゲームならここでオープニングが入りますねw
そして御鏡悠夜は乙。選択肢次第ではアリスにつくルートもあつた気はしますが、どちらにしても変態の元に身を寄せるのは変わらないという罫。

文章や内容、誤字脱字に関する批評や指摘、あるいは純粹に感想などなどありました是非お願い致します。少しでも技量を伸ばしたいと考えていますので……。

では、次は9日にて。

第一章・1（前書き）

うわあ、やっちゃまった（汗

序章9 第一章・1、です。次から第一章って書いてたのに、何て

恥ずかしいミス……。

あと、修正ついでに結界 かくりのほう 幽法に変更しました。

第一章・1

「取り敢えず、出来る範囲で何でも言う事を聞くとは言ったが縄で縛るは有り得ねえ。流石にそれは全力で拒否らせてもらっぜ」
「……そう。とても残念」

絶叫の後に紆余曲折あり、オレは何とかハンナに緊縛を思いとどまらせることに成功していた。と言うより、成功させなければ色々終わっていただろう。

ついでにボロボロだった服も脱ぎ、クローゼットに何故か入っていた男物の服を着て、改めてオレはハンナと向かい合って座っていた。

「まあ、アレだな。さっきの話でまだ気になる点はあるが、その辺りは追々聞いてくとして、だ……これからどうする？」
「どうする、と言うのは？」

首を傾げてこちらの瞳を見つめて来るハンナに対し、「あー、だからよ、」と頭を掻きながら言葉を続ける。

「学校とかそれ以外での外出とか、その辺りだよ。後はどこに住むか、つてのも問題だよな」

「学校に関しては申し訳ないけど休んでもらう。学校にまで付いて行く事は難しい。何より無防備になる時間が多すぎる。外出に関しても可能な限り控えて貰いたい。出来るならば四六時中一緒にいる事が理想」

「そりゃそうだよな。お前の傍を離れねーのが一番安全だしな。けど、そっか……薄々そうだろうとは思ってたけどよ、やっぱアイ

ツ等とはしばらく会えねえよな」

健介、葵、神楽、華恋、暗邸　彼らには会う事は出来ないだろう。迂闊にあつて巻き込む訳にも行くまい。幸いなのは、暗邸に関してはしばらく会わないで欲しいと言われており、華恋に関しても読者モデルなんていう仕事の影響上会う頻度は少なく、健介に関しては今更でしかないという点だろう。

だからこそ、問題は一之瀬姉妹に関して。特に葵はどうにもオレに依存しつつある傾向が見られる為、放っておく事に僅かばかりの恐怖があつた。“あの一週間”の際は親戚が外国で結婚式を挙げるから祝いに行く、という名目で誤魔化したが。

(どうやって誤魔化すか、だよな……しかも今の葵はあの時とは違えからな。正直、どうなるか全く読めねえ)

「何か問題が発生しそうならば言うて欲しい。可能な限りその問題を排する事が出来るようにする」

考え込むオレの態度を観察していたハンナの言葉。その言葉は素直にありがたいのだが、こればかりは幾ら魔女でもどうにもなるまい。

「あー、いや、まあオレの知り合い連中に対する言い訳なんだがな。納得させるのが面倒な奴がいるんだよ」

「許可を貰えるならば私の魔術で意識を操作する事も出来る」

「ただだけ便利なんだ魔術、と内心で思いつつ、当然の如くオレは拒否する。」

「それは正直やめてくれ。知り合いが得体の知れねーモンに影響さ

れるのは気持ち良いもんじゃねえしな。ま、上手く言い訳をこつちで考えとくよ」

「そう。分かった。……住居に関してはこの部屋を使ってもらう事になる。それなりに広いから二人で過ごす分にも問題は無い筈」
「……あー、やっぱそうなっちまうか」

言葉を切ってから部屋を見回す。確かにこの部屋ならば住む分には何ら問題はないだろう。ベッドに机、テレビに五つほどの本棚とそれなりに物はあるが充分にスペースは確保されているのだし。

と言うより。

「むしろ高級過ぎねえか？　ここ。どんだけ広いんだよ。バルコニーまであるし……」

「間取りは1LDK、専有面積は93.6平米、家賃は月に三十五万」

「三十五万、だと……？　いや、確かにこんだけ整ってりゃそのくらいは行きそうだけだよ、いや、それにしても高級過ぎじゃね？」
「大した問題じゃない。そこは気にする所ではないと思う」

そう言われてしまえば、現状を考えると間違いではないが　違和感は想像を絶するモノがあった。

「まあ、そう言うなら気にしねー事にするぜ。確かに部屋がどうだろうと、十分な広さがあれば関係ねーしな。ただ、愚問っばいけど一応聞いておくぜ？……オレは男で、お前は女だ。それが一つ屋根の下に住むって事になるが、お前はそれで良いのかよ？」

「特に問題はない。貴方が私を襲っても私は貴方を傷つけずに拘束する事が出来る」

「……そりゃ、そうか」

これ以上ないほどに説得力のある言葉だった。

悔しさはあるが、そこまで強いモノではなかった。既にオレと魔女たちの間に越えられぬ壁が存在している事は理解しているのだから。

それに、元カノである“アイツ”と付き合う以前のオレならばその壁にむしろ興奮して挑戦していたかもしれないが　今でも思いが胸にある現状、元から襲う気などないのだし。

「まあ、アレだな。流石に部屋から色々持ち出す程度ならオツケーだよな？　引き籠もるしかねえなら、引き籠もっている間に出来る事をやっておきてーしな」

「それは問題ない。余り多様は出来ないけど、転移術式を使えば運ぶのも容易」

「その辺りは魔術様々って所だな。……ん？」

ふと、オレはマナーモードにしていた左ポケットの携帯が振動している事に気付いた。この長さはメールの着信ではなく通話だろう。

「誰だ？……って、げっ」

ロックを解除した後には携帯の画面に表示された名前を見て、オレは顔から血の気を引くのを感じていた。そう、何故今の今まで忘れていたのか。何故わざわざ葵との下校を断ったのか。

「悪いっ、ハンナ。しばらく黙っててくれ！！」

言い捨てながら即座に通話ボタンを押し、耳に当てる。そして聞

こえたのは、聞き飽きた女性の声。

『あ、やっと出たわねえ。何かトラブルでもあった？』

間延びした、余りにもやる気が感じられない声。恐らく今も電話の向こうでは気だるい態度を隠しもせずスタツフに囲まれているのだろう。

「いや、悪い。本当にすまねえ。割とガチで命落としかけてよ。行けなかった」

『まあ私は別に良いんだけどねえ。それより大丈夫？ もし何だつたら上にそれなりの用意させるわよー』

「あー、いや、心配ねえ。今は心強い護衛がいるからよ。……つか、やっぱり行かないや拙いよな」

『緊急措置って言えば何とかかなりそうだけどねえ。ただー、そうねえ。問題があるとすれば私がお上にどやされるくらいかしらねえ』

何ら問題などなさそうに聞こえる口調だが、オレは知っている。彼女は何時如何なる時でもマイペースを崩さぬ事を信条にしているだけで、状況自体は非常に宜しくないという事を。

「あー、すまん。そっちに行けるかどうか確認してみる。折り返し連絡入れるから、待っててくれ」

『はいはい。了解』

通話を切ってから携帯を机の上に置き、溜息を吐いた所でハンナの問い掛けるような眼差しに気付いた。

「今の話、聞いても？」

「あー、まあ、アレだ。まずお前、何処までオレの事を知ってる？」

「恐らく一通り。表から裏に至るまで把握している」

「んじゃ説明の手間を省くぜ。ぶっちゃけ今のはオレが定期的に検査を受けてる特殊生物学研究所風羽支部の所長、御鏡工エっつー女からの電話だよ」

オレがそう告げると、ハンナは首を傾げて「御鏡……?」と呟く。

「ああ、まあ姓で分かる通り、伯母だな」

「叔母……それも御鏡家の影響力?」

「多分な。まあ、御鏡家って言うよりは死んだお袋　御鏡悠の影響なんだろうが、でなけりゃ二十六なんて若さで支部とは言え所長になんてなれねえだろ」

「なるほど。随分と若い叔母さん」

……ちなみに、オレとハンナの間にあるであろう齟齬についてはこの際無視する。イチイチ彼女に説明するのは面倒くさいし、何より敢えてオレが目を背けている一つのふざけた事実を直視する事に耐えられないからだ。

「とにかく、今日はその研究所支部での定期検査の日だったんだよ。きつちり時間厳守で行ってたオレが来ないから連絡が入ったって事だな」

「会話を聞く限りかなり緊急を要するようだった。其処へは今日行く必要が?」

「出来ればその方が助かる。一応は国家プロジェクトって奴だからな。ただでさえ最低限の義務で許されてんだ、それすら守れねーってなると今以上にガチガチに制限されかねえから……多少命の危機があっても行っておきたい所だな」

「……それは私の同伴は可能?」

静かにこちらを見据えての問いかけ。美しいアイスブルーの瞳に意識を奪われそうになるのを何とか抑え、オレは曖昧に頷く。

「あー、まあ、研究所の外までなら恐らく。ただ流石の中には入れねえと思うぜ」

「それは何とかなる問題？」

「……」

随分しつこいな、とも思うが、即座に当たり前かと思ひ直す。護衛という立場上、オレに危機が及べば契約不履行になってしまう。そうなれば契約が非常に重い意味を持つ彼女たち魔女にとってどれほど社会的不利になるのかは分からないが 悲惨な目に遭う事は想像に難くないのだから。

「どうだろうな…… ちょっと判断がつかねえ、けど……」

「だったら私が直接その所長と話す。依頼主の名前を出せば了承が貰えるかもしれない」

「……、……」

ハンナの瞳には、我を通すと言うよりは確かな勝算があるように見受けられた。そうでもなければこれほどに力強い確信の光を灯す事は出来まい。

同時、ハンナの依頼主が国レベルの研究に口出し出来るほどの立場にある事を知る。あくまでも想像に過ぎない為、その考えに固執するのは危険だろうが。

少なくとも、敵に回してはいけないレベルなのは間違いない。

「オーケー、分かった。んじゃあ、ほれ」

左ポケットに入れていた黒塗りの携帯電話をハンナに放り投げて席を立つ。

「オレはこの場にいねえ方が良いよな？ 適当にトイレ辺りにでもいるから、思う存分交渉してくれや。あー、携帯のロックナンバーは0229、着信履歴の最新にある御鏡ユエ、って番号に掛けりや良い」

「……」

「何だよ、その驚いたような目は」

「私の言葉を受け入れた事、あっさり携帯電話を渡した事、こちらの事情を慮り席を立った事、ロックナンバーを教えた事、その全てに驚いている」

その瞳が僅かとは言え困惑に揺れているのを見て、黒塚ハンナという女は意外と分かりやすいのかもしれない、と何となく思った。

そんな気持ちを抱きつつ、口元を斜めにしながら口を開く。

「ま、そんだけお前を信用してるって事だ。裏切らねえでくれよ？」

茶目つ気を混ぜたその言葉に、果たしてハンナは大きくと頷く事で答えた。

「信用を得る難しさはよく理解している。任せて。その期待は裏切らない」

「んじゃ、任せませ」

苦笑を噛み殺しながらそう言い残し、背を向けてから「ご丁寧に“お手洗い”とプレートの張られた扉へと向かい、その中に入った。

距離は十分に離れている為、向こうの声はこちらに聞こえる事はない。

そして、こちらのする事も向こうに気付かれる事はない。

「……さて、と」

オレはそれなりの広さを持つトイレを見回し、不要な音を立てぬよう視線のみを以って隅々を調べる。

(ふうん、なるほど、な。トイレットペーパーの消耗具合的に昨日今日借りたって訳じゃないらしいな。でもって随分綺麗に磨き上げられてる点とさっきの部屋の様子を鑑みる限り、かなりの綺麗好きっつーか几帳面なのは間違いねえ)

目で確認出来る範囲はこの機会にきつちりと確認しておく。信用している、という言葉は嘘ではないが、だからと言って完全に無防備を晒す訳にはいかない。

次いで“右ポケット”からメタリッククロゼに塗り上げられた携帯を取り出し、苦笑。

(まあ、信用はしてるっつっても信頼するには時間が足りねーわな)

ああ言っておけばハンナからこちらに対する好感度は間違いなく上がるだろう。期待は裏切らない、と言った時の様子を見てもそれは明らかだ。

(契約がある以上心配し過ぎなのかもしれねーけど、情を積み重ね

ておいて損はねえだろしな)

それに、もし仮にこちらの考えが見抜かれたとしても何も問題はない。契約の期間である一週間　その間に彼女がこちらを切り捨てる事は、こちらがどのような行動を取ろうともほぼ有り得ないのだから。情云々はあくまで保険である。

(あー、それも問題なんだよな。つか一週間って何だよ一週間ってさっきは突っ込まなかったけどよ、流石に短くねえか?)

一週間という期間で終わるほどにこのバトルロイヤルは短期決着形式なのか、それともやはりオレが知らされていない何かがあるのか。

(ま、十中八九、後者の方だろうけどな)

「何かしらの準備は必要、か……」

小さく呟くと同時、オレはこちらへ近付いて来る足音が耳に届いた事で思考を切り替える。

コンコン、というノックの後に「終わった。出て来て大丈夫」という声が聞こえた事で、オレはガチャリと扉を開けてトイレの外へと出た。

そして目に飛び込んで来たハンナの姿に、軽い驚き。

彼女は先ほどまでの魔女っ子ルック(?)から一転、セーラー服姿へと装いを変えていたのである。

「意外と早かったなっつーか、着替えたのか」

「衆人觀衆の目がある中での服装は目立ち過ぎる」

「いや、確かにそうだけだよ……」

この少女はそんな事を気にしないだろうと勝手に思っていた為、少し戸惑ってしまった。

それはさておき。

「んで、どうだった？」

「同伴が認められた。これで問題はない」

「へえ………すげえな」

素直に口からでた言葉だった。一体、どのような交渉をしたのか。あるいは後ろ盾の名を出して押し通したのか。

後でユエに聞いてみるか、と頭の片隅で考えながら手を差し出す。

「そんじゃ、携帯返してくれや」

「ん、貴方の誠意に感謝を」

ハンナから携帯を受け取ったオレは開く事をせず、そのまま左ポケットへと仕舞う。そんな動作を見て彼女の口から零れるのは「あ………」という呟き。

「信用してもらえるのは嬉しいが、無用心。弄られていないか確認すべき」

「んー？ いや、必要ねえだろ。さっきも言ったけどよ、オレは前からそんな事しないって信じてるからな。ついでに言うなら、アレだ。仮にお前が何かしてもそれはオレに人を見る目がなかっただ

けの事だから、別に恨んだりはしねーぜ」

「……そう言う言い方は卑怯」

平時でも聞き取り辛い声を更に小さくしてそんな風に呟くハンナに、苦笑。どうやら仕込みには気付かれておらず、保険も上手く利いているようだった。

最も、この場で調べて分かるほどおざなりに弄くる事は彼女ならばしないだろう、という予測もそこには含まれていたのだが。

(いや、でもどうなんだろうな。実は頭良くないんじゃないか説もあるしな……)

土御門アリスというあの魔女娘の賢しさを見ているから余計にそう思うのかもしれないが、何となくそう思ってしまうオレだった。

いずれにせよ一週間は行動を共にするのだから、その間に黒塚ハンナがどのような人間かというのはある程度把握出来るだろう。

「んじゃ、早速行くか。あー、つかそれ以前にこのアパートって何処に建ってたんだ？ こんだけ良いアパートなら割と街の中心部っぽいやな？ 研究所は郊外だぜ？」

「大丈夫。問題ない。地図で場所は把握している。先ほど土御門アリスと交戦した場所まで転移して、そこから歩けば三十分はかからない」

「……ま、そんだけ把握してるなら充分か。てか今の言葉によ、此処に来る時に使ったあの転移術式ってのは知らない場所には行けねえのか？」

「そう。一度行った場所もしくは視認出来る範囲にしか転移する事は出来ない」

「どうやら魔術も万能成功要素ではないようだった。それが分かったのは重畳だろう、少なくとも付け入る隙はあるという事なのだから。」

「ま、でもそうだよな。そんな事が出来たら一気に他の魔女の拠点に潜入してざっくり、とか出来ちまうもんな」

「そういう事。……それではそろそろ行こうと思う。何か問題があれば今の内に言っただけいい」

「ん？ いや、特にはねえよ。いつでもその転移術式とやらを使ってくれ」

「分かった。その前に靴を履いて欲しい。このままでは素足で道端に出る事になる」

なるほど確かにその通りだ、と言われた通りに玄関まで行ってから靴を履く。そんなオレに合わせるように付いて来たハンナも頑丈そうな編み上げブーツを履き終えて。

「それじゃあ、始める」

言いながら彼女が手を翳すと、次の瞬間にはその手に二メートルほどの櫛で出来た杖が握られていた。

もう驚かねえぞ、と内心で突っ込んでいたオレは、ぎゅっと服の裾をハンナに掴まれるのを感じ、そして次の瞬間。

「 Whirlwind 」

浮遊感と共に、オレはその場から消失した。

*

「で、到着ってワケだ」

浮遊感を覚えた後は正に一瞬の出来事だった。気付いたらオレは先ほどアリスとハンナが対峙していた道端に来ていて、そして、破壊の跡なんて一切ないその光景を目撃していた。

「あー、なるほど。つまり、これが幽法とやらの力ってワケか。あんなだけ酷かった状況が元に戻っていやがるな」

「そう。色を失ったあの灰色の空間　あれが位相を僅かに異とする世界。あの空間内で起きた事象は原則として現実世界には影響を及ぼさない」

「なるほどな、そりゃ確かに魔女の存在がバレねーワケだ。あんなだけ暴れても痕跡隠せるなんざ、規格外過ぎる。……ん？」

(あれは……まさか、いや、そんな事がある、のか……?)

ふと、視界に入った“とあるモノ”を見た事で幽法とやらについて疑問が沸いた。

「なあ、その幽法ってよ、展開する時にその場に一般人とかがいたらどうなるんだ？」

「自動的に幽法内から弾かれる。あの空間は魔女と魔女が指定した生物しか存在出来ない。ただし人の目が多くなればなるほど“幽法内から選り弾く人間”の数が増える分、労力が増す。結果として幽法の展開が難しくなる。だからなるべく人の数が少ない夜に人が近付きにくい場所で戦うのが理想とされている」

ハンナの言葉を聞きながらさらに“ソレ”を観察しつつ、再びの問いを発する。

「なるほどな。 んじゃあ次の質問だけだよ……もし仮にその幽法の中に財布なり何なりを落とした場合、その財布ってどうなるんだ？」

「現実世界から持ち込んだ物は、幽法が解除されると同時に幽法内において最後に置いてあった場所に放置される。例えばこの場を用いて例を出すと、向こうに停めてある車を幽法の世界に持ち込んで“幽法内の駅前”に放置した場合、“現実世界の駅前”に放置された状態で出現する事になる」

なるほど、と頷きながらオレはとある一点を指差す。

「まあ、だったらアレが放置してるのも不自然じゃあねえワケだ」
「……？ 何を ！？」

隣にいるハンナの戸惑った雰囲気。それはオレの視界と指の先に存在する“とあるモノ”を見てしまったせい。

「革靴……？」

そう、革靴である。非常にお洒落なデザインの革靴が片足分、コンクリートの地面に打ち捨てられた状態ではつんと置かれていたのである。

その革靴は、記憶にある土御門アリスが履いていた革靴と全く同じモノで。

「ケケケ、そりゃそーだ。あの時アリスは靴を脱いでた。で以ってその後は怒涛の展開で靴をわざわざ履き直す時間なんてなかった。そりゃ放置してくしかねーよな」

「……………」

オレが発した嘲笑混じりの言葉で、ハンナは形容しがたい表情をその顔に浮かべる。

(これである靴に対するハンナの思考は固定された筈。後は…………)

「ここで見張つてればあの靴を取りに戻って来るんじゃない？」

「流石にそれは有り得ないと思う……………多分」

「まあ、流石にねえか。取り敢えず回収しとこうぜ。きつと嫌がらせになるに違いねえ」

笑いを堪えながら革靴の所まで来たオレは、その革靴をハンナには見えぬよう身体の位置をずらし、手に取る。

そして、その靴の中に手を突っ込み　クシヤリ、という手の平大の紙が潰れる音を聞いて予測が間違つていなかった事を知る。

ハンナに気付かれぬよう胸ポケットへその紙を仕舞ったオレは、靴を手にとって彼女の元へと戻った。

「もし取りに戻って来たらよ、必死になって探すんじゃない？　これ、確かどこぞのブランドのかなり高い靴だぜ」

「……………悪趣味。けれど彼女の身に付けていた物を回収出来たのは良好。魔力の残滓があればそれを辿って何か分かるかもしれない」

「その辺に関しては任せるぜ。……………っと、すまん。ちよいと手洗いに行きたくなつたんだが、この辺に公園があるからよ、そこに入っ

「て良いか？」

「私は構わない。時間を気にすべき貴方が問題ないと判断するなら何も問題はない」

ありがとうよ、と言ってからオレたちは数分歩いた場所にある公園に向かい、ハンナがベンチに座っている間に男子トイレへと入り、個室に籠って鍵をかける。

そこまでしてから深く息を吐き、胸ポケットに仕舞った紙を開いた。

それは可愛らしいメモ帳の切れ端。そして、そこに記されていたのは携帯のアドレスと電話番号。

「全く、随分と勝算の低い賭けに出たじゃねえか。気付いたのがハンナだったらどうするつもりだったんだ？ いや、まあ、その場合は挑発になる、とでも考えたのか？ つか、そもそもオレが違和感に気付かない可能性の方が高いだろう常識的に考えて」

そう、違和感。初めてあの靴を見た時に僅か疑問に思い、ハンナの解説を聞いて確信を持った明らかかな可笑しさ。

あの時、アリスは靴を脱ぎ捨てていた。いやもつと言っならば、あの時に爆風によって吹き飛んでいた筈である。だと言うのに、オレが先ほどみた革靴は“最初にアリスが立っていた場所”に放置してあった。

まるで、一度回収したモノを再度その場に置いたかのよう。

「にしても、つー事はまだ手を組む余地は残ってる、って事か？」

あんだだけ警戒されてたんだ、もういつペン命を狙いに来てもおかし
くはないんだがな……」

あるいは、これも手を組む余地があると見せ掛けて殺す為の布石
なのか。

考えても答えが出ない、と思ったオレは取り敢えずアドレスと電
話番号を口ゼ色の携帯に登録してから紙を便器に放り棄て、水を流
してきつちり処理された事を確認してからトイレを出た。

「いよお、悪い悪い。待たせちまったな」

「気にしてないから平気」

「んじゃあサクサク行くか。……って、靴はどうしたよ？」

「先ほどアパートへと転移させた。持ち歩くには面倒」

そりゃそうだ、と頷きを返しながらオレとハンナは公園を出て研
究所へと向かった。

第一章・1（後書き）

り。 2011/9/14 微妙に地の文を修正。 具体的には革靴云々の辺

第一章・2（前書き）

2011/9/14に第一章・1を微妙に修正。革靴を発見した辺りですね。

第一章・2

「ふうん、電話口の声で分かってたけど、随分と可愛らしい護衛さんね。」

深々とソファに身を委ね、足を組み、気怠い雰囲気を感じさせず、頬杖をついて、白衣を着た女、御鏡ユエは酷くやる気がなさそうな様子で対面に座るオレとハンナを見つめていた。

どれほどの間切っていないのか、その髪は踝に届くほどに長く、座っている現状、完全にその夜色は床に広がっている。日に当たる事のない白肌はそうであるがゆえに人外めいた透明感と美しさを保ち、桜色の唇やスツと通った鼻筋、柳眉に形の良い耳それらのパーツと併せ、ただそこにいるだけで絵になる美人ぶりだが。

残念なほどに、その無気力さが全てを台無しにしている。

それが、御鏡ユエ。オレに関する研究の責任者であり、実の伯母であり、そして。

「時間が惜しいんだろ？ 余計な言葉はいらねえ、さっさと検査してくれ。」

オレが最も苦手とする女だった。

「んー、相変わらず怖いわね。そんな目で見なくても、別に取って食べたりしないのに。」

「うるせえ。時間に大幅に遅刻したのは悪いと思うし、それでアンタに迷惑が掛かる事もすまねえと思う。だからそれに関しての謝罪

はした。まだ謝罪を求めるなら幾らでもしてやる。だからさつさと検査して終わらせてくれ」

「あはは、矛盾してるよ〜。ここに来てから一番喋った言葉数が多いの、そっちでしょ〜。ゆうクンは可愛いなあ」

「……ッ」

それまでの気怠い様子を一転、まるで手間の掛かるガキをあしらうかのような笑い。その奥に垣間見える慈愛色に染め上げられた甘ったるさが、オレが彼女を苦手とする理由だった。

その甘ったるさは華恋にも通じるモノがあるが 華恋のソレがオレを許容し、肯定し、寄り添おうとする流水ならば、ユエのそれは許容し、肯定し、呑み込もうとするかのような底なしの沼。

無制限に無軌道に無鉄砲に、全てを受け入れ全てを赦そうとするその姿勢。一度甘えてしまえば際限なく深みに嵌り堕ちてゆくだろう残酷なまでの優しさ。否応無しにオレがガキである事を突き付けるその在り方。

何よりも、そう。オレが最も苦手としている要因は、それだけ慈しみに溢れていながら自らオレに干渉する事がない点だった。

華恋のようにオレを求めて来るならば、可愛い奴だとあしらう事も出来るのだが。

オレの全てを見下ろす 見下す、ではないのがポイントだ
釈迦のようなその存在感が、大人になりたい年頃としては色々複雑なのである。

「まあ、でも、そうね〜。あんまり時間を引き延ばすのもアレだし、

それじゃあゆうクンにはいつもの部屋に向かってもらおうかしらね
」

再び気怠い空気を纏いながら白衣のポケットから通信機を取り出し、二、三の言葉を通信機越しに送るユエ。そんな彼女の様子を見ながら、オレは改めて自分たちが今いる部屋を見回す。

絨毯に磨き上げられたテーブル、ソファ、観葉植物、調度品、本棚　およそ研究所というイメージに不釣り合いな、豪華な館の応接室と言った風情の室内。当然の如くこんな変則的な部屋は此処だけであり、ユエ曰く、偉い人を迎えるにはそれなりの環境が必要なのだとか。

こんな所に金を使うなら別の所に使えと言いたくなるが、その辺りはオレが気にしても仕方のない部分だろう。

やがて短い会話を終えたユエが、通信機をポケットに仕舞ってからこちらを向く。

「準備は出来てるから、ゆうクンは向かってくれる？」

「おう、了解っと」

「私も一緒に」

ユエの言葉と同時にオレが立ち上がり、それまで黙りこんでいたハンナが口を開いたのだが。

「あ、ハンナちゃんは此処に残ってもらって良いかしらー？　ちょっとお話ししたい事があるのよね」

「私には護衛が」

「いや、まあ流石にこの研究所内で襲われるとかねえだろ。ゆっくり

りしてて良いんじゃない？」

「ん…それは……」

まだ頷ぎがたい様子のハンナを気怠げな様子で見つめていたユエは、やがて面倒くさそうに口を開く。

「あんまりこういう事は言いたくないけど、此処ってお上の直轄地なのよねえ。あんまりワガママ言われると、そっちにの雇い主にも不都合が出るかもよー？」

「……ッ。分かった。気を付けて」

こちらを見上げての言葉に、流石に警戒し過ぎだろうと思いつつも「任せとけて」と返してオレは部屋を出た。

黒塚ハンナは、初めて見た瞬間から御鏡ユエという女性の事が気に入らなかつた。理由は分からない。だがしかし、何故か潜在的な部分で彼女に対し嫌悪感を抱かざるを得なかつた。

「さて、それじゃあお話ししましょうかー」

だからこそ、如何にもやる気なさそうに彼女がそう言っても、警戒を解く事など僅かたりとも出来なかつた。

別段、彼女に自分がどうこう出来るとは思っていない。むしろ目の前にいる彼女は明らかに一般人であり、そうであるがゆえに今ハンナが抱く忌避感の身の危険に類するモノでは有り得ない。

ならば、この感覚は一体　そんな風に思考しながら、ハンナはユエの言葉に耳を傾ける。

「それにしても、改めて吃驚したしたわ。魔女って存在がいる事は風の噂に聞いてたけど、それがこんな可愛い女の子が護衛だなんてさ。ゆうクンも隅に置けないわねえ」

「容姿は実力に影響しない。御鏡悠夜を護る為ならば一軍でも殲滅してみせる」

「ふうん、凄い決意ね。それが魔女にとっての契約の重みって奴」

「貴女には関係のない事。それよりも本題を早く」

ハンナの鋭い言葉に、「ありやりや……」と驚いた風に呟きながらも表情は変えないユエ。そんな彼女の言葉を聞く度に、彼女の顔を見つめる度に、ハンナは自身の中で嫌悪感が膨れ上がる事を自覚する。

「まあ良いケドね。それじゃあ聞くけど……ハンナちゃん、ゆうクンの事はどう思ってる？」

「……？　質問の意図が分からない」

「だーかーらー、好きーとか、嫌いーとか、そう言うのよ」

ユエの言葉にハンナは戸惑いを覚えずにはいらなかった。この女性は、一体何を言っているのだろうか？　そんな思いが浮かび、不愉快な曇り雲となって胸の裡で揺らぐ。

「それを問う意図が分からない。御鏡悠夜は護衛でありそれ以上でもそれ以下でも」

「はいダウト。バッター三振でワンアウト」

緩い言葉尻ながら、けれども絶妙なタイミングでユエはハンナの言葉を切り棄てる。

「そんな嘘を吐く必要はないわよ。あと、自分を誤魔化す必要もないわねえ。もっと本音で語って良いのよー？」

「何を、貴女は」

「だって、ハンナちゃん、自分の命よりゆうクンを優先するでしょ？」

その言葉は、端的に言っただけでハンナにとって致命的だった。彼女が胸の最奥に隠し、誰にも明かした事のない秘密に限りなく近く触れる言葉だった。

だからこそ表情を隠す事すら出来ず、結果として動揺を無様に晒すという醜態を犯してしまった。

「そ、それは、だって……」

「確かに魔女にとって契約は重要だって話だけど、それだけじゃ説明がつかないのよね。ハンナちゃんのその意志の強さってヤツー？ まるで忠義を尽くす騎士みたいなの」

やめる、それ以上踏み込むな、それは“あの御方”と自分にとつての、そんな言葉が脳裏を掠め、思わず叫び出そうとした次の瞬間。

「ま、別に理由なんてどうでも良いんだけどね」

余りにも無気力なその声に、動揺も戸惑いも焦りも怒りも恐怖も全て全て、悉く水を打たれたように静まり返ってしまった。

「……………え？」

残ったのは、虚。その間隙を突くようにユエは言葉を続ける。

「私にとって重要なのは、ハンナちゃんの意志を確認する事だけだから。理由にまで踏み込まないわ」

「……………」

ストーン、と、浮きかけていた腰を落とすハンナ。やがて冷静な思考が戻って来た彼女は、自身の未熟を恥じ入りながら鋭くユエを睨む。

「それにしても、やっぱり可愛い護衛さんね。まだまだ修行が足りないって感じかしら」

「っ」

そのユエの言葉を聞きながら、目を弓のようにしたその表情を見て、ようやくハンナは理解する。何故自分が御鏡ユエという人間に此処まで嫌悪感を抱くのか。

何て事はない、余りにも印象が違い過ぎて気付かなかったが、御鏡ユエの容姿は“あの御方”に余りにも似過ぎていて、けれど決定的に違うからこそ、ハンナは嫌悪したのだ。

自分の中の“あの御方”が、穢されたような気がしたから。

「まあ、ハンナちゃんがゆうクンを大切にしてくるって言うのは分かったから、これで一安心ね〜。これなら安心してゆうクンを任せられるわ〜」

「私には貴女の言う事が理解出来ない。脈絡がなさすぎる」

努めて冷静にそう返しながら、気を落ち着ける為にお茶に口をつけたハンナは、

「あはは、そう見えるー？ これでもけっこー本気なのよー？ ハンナちゃんみたいなのがゆうクンのお嫁に来てくれたら良いな〜ってね〜」

「……………」

思わずお茶を嘔き出しそうになってしまった。突然何を言い出すのか、と思わずユエを睨みつけてしまう。

だが。

「これでも色々考えてるのよー。私にとってゆうクンは大切な甥っ子だから、その周りに悪い蟲はついて欲しくないからさー。ゆうクンとハンナちゃんが此処に来てからずっと観察してたのもー、ゆうクンの事をどう思っているのか確認したのもー、全部それを見極める為なのよね〜」

「……………」

口調は相変わらずやる気がなさそうで、気怠い様子を隠しもせず、何処まで本気が分からないような態度で座っている彼女だが、何故だろうか。ハンナにはその瞬間、彼女が紛う事なく本気でそれを告

げているのだと悟ってしまった。

そして、その言葉の奥に秘められた愛情の深さも。

「……先ほどからの態度を総合して、貴女はそこまで情が深いようには思えなかった。少し意外」

「あはは、そう見えるように人格作ってるからね。むしろそうやって感情隠して距離を置くから、ゆうクンに避けられてる節はあるんだけどね」

「何故わざわざ隠す？ 分からない。貴女は御鏡悠夜の叔母。それだけ深く愛しているならそれを隠す必要は」

「そりゃあ私は伯母だけどさー、でも、一人の異性としてゆうクンの事を愛してるからね」

一瞬、ハンナは何を言われたのか理解出来なかった。

「え？」

「だーかーらー、私はゆうクンに 御鏡悠夜に恋愛しちゃってるのよ。これ以上ないくらい、完膚無きまでにね」

変わらぬ怠惰、変わらぬ間延びした口調、果たして何処まで本気が嘘か分からぬそんな態度で けれどその瞳には確かな意志を宿して。

余りにも衝撃的な告白を、黒塚ハンナは御鏡ユエからされてしまった

「……、何故」

確かに御鏡悠夜は思わず手を伸ばしたくなるほど容姿が優れてい

る。加えて誠実であり優しい。芯の強さも持ち合わせている。頭の回転も早い。今は僅かたりとも異性としては意識していないし、これから先も永劫有り得ないだろうが、或いは別な出会い方をすれば恋に落ちる事もあったのかもしれない。

そうして見れば確かに御鏡悠夜は魅力的な存在だが　だからと言つて家族の域を超えるほどに愛せるモノなのだろうか？

「あはは、まあハンナちゃんには分からないかもしれないわね。て言うかー、私自身、どうしてこんなに惹かれるのか分かってないしー。ただ、それでもこの気持ちは偽りなく本当なんだよね」

だから、と一度言葉を切つてユエはハンナの目を見つめる。其処には直前までの気怠い様子や無気力な態度は微塵もなく。

「私が世界中で誰よりも好きで恋して愛してるゆうクンを、ハンナちゃんには護つて欲しい。そして出来るなら、契約云々なんて関係なくこの先もずっとゆうクンの傍にいて彼を護つてあげて欲しい」

余りにも真摯な、偽りなき真っ直ぐな言葉。人格を作っていると、いう彼女の言葉が真実ならば、今こうしてハンナに見せている姿が彼女本来の姿なのだろう。

その姿は、確かに記憶の中にある“あの御方”にとてもよく似ていて。

「一つ、聞きたい」

だからこそ、先ほどまでの嫌悪感が薄れていくのを感じながら、ハンナは問う。こうして素の彼女と相對したから気付いた、気付い

てしまった一つの疑問を。

「何故、私に？ 異性として御鏡悠夜を好きならば、手に入れる為に動けば良い筈。私には貴女が血縁などというモノに遠慮しているようには見えない。もっと別の何かがあるように思えてならない」
「んー、あはは、まあ、確かに血縁関係なんてどうでも良いんだけどさー。て言うか、そういう所は見抜けるんだね〜。……ま、 “A mami poco, ma continua.” そんな生き方もあるって事ね〜」

そう告げた時の御鏡ユエは、既に先ほどまでの脱力した様子で其処に在り。ただその瞳にのみ、何某かの色の揺らめきがあるようにハンナには感じられた。

それが何なのかまでは、ハンナには分からなかったが。

「さて、ゆうクンが戻って来るまでもう少し時間がかかるし、取り敢えず追加のクッキーとお茶をお願いしておきましょうか〜」

そう言って通信機を取り出すユエを見ながら、ハンナはまた一つ御鏡悠夜を護る理由が増えたな、と思った。

先ほど嫌悪していたにしては随分と都合が良いが、同時、彼女にとってそれは当然の事だった。何故なら先ほどの御鏡ユエは、ハンナが敬愛し忠誠を尽くす“あの御方”に余りにも似ており、それはイコールで、御鏡ユエも間違いなく“あの御方”に連なる存在だという証明だったから。

その意志を尊重しないなど、有り得ない。

「そうそう。クッキーとお茶のお代わりよろしくね。あ、お茶は一番高いヤツで良いわよー」

それはそれとして、果たして研究所でこんなに和んで良いのだろうか？

「お疲れ様です、ただいまデータの転送を終えましたので、検査は終了です」

「ういっい、了解っと」

ハンナやユエと別れた後、MRIを用いた検査や身体の様々な場所に電極を張つてのよく分からない検査、血液採取、それらを終え、最後に身体能力を図る為の検査 各種メートル走やバーベル上げなど を経て、ようやくオレは解放された。

ちなみに、今はそう言った検査室から離れた区画にある休憩スペースの椅子に座っている。データを取り終えた後、待機するように言われていたからだ。

「あー、取り敢えずトイレ借りて良いか？」

「ええ、構いません。場所は分かりますね？」

「おう、問題ねえ」

こうして気軽に単独行動を許されるのは、それだけ信用されているという証 ではないだろう。彼らも分かっているのだ、オレが何かやらかせば結果的に伯母であり所長である御鏡ユエに責が向か

い、イコールで自分たちに所長の座が近付くという事を。

「気に入らねえけど、まーそのお陰で無駄な拘束をされずに済むんだ。ラッキーくらいに思っておくか」

呟きながら先ほど自販機で購入しておいたスポーツ飲料を飲み、オレはしばし歩いた区画にある男子トイレへと入る。誰が掃除しているのかは分からないが隅々まで磨きあげられており、その真新しさや広さと合いまってトイレにありがちな陰気さは欠片も感じなかった。

「さて、と……此処を出たらハンナの目があるからな。連絡出来るチャンスは今しかねえだろ」

適当に個室の一つに入り鍵を閉め、オレは携帯を取り出してつい二時間ほど前に登録した連絡先へと電話を掛ける。

表示されている連絡先は 土御門アリス。

『はいはい、こちらは土御門アリスですよー。どちら様ですか？』

電話越しに聞く声は数時間前にオレの命を狙い、そしてオレを味方にしたいと告げた少女のモノに間違いなく。

やっぱり誰に対してもあの口調なんだな、と苦笑しながら声を発する。

「おう、さっき振りだな、アリス。あー、声で分かるか？ 御鏡悠夜だ」

『……、……驚いたっすね。おにーさんがあのメモを手に入れた事もそうっすけど、その日の内に連絡を入れて来るとか想定外だったっすよ。で、隣にはあのクソガキがいるって寸法っすか？』
「いや、いねえぜ。つっても電話越しじゃ信用出来ねえかもしれねーけど、」

そう前置きしてから、アリスが去った後の流れを軽く説明する。それを聞きながら、ふんふん、と相槌を打っていた彼女はやがて。

『ま、そう言う事なら確かに納得しても良さそうっすね。全面的に信用は出来ないっすけど』

「ああ、それで構わねえよ。つか、むしろ仮にオレの隣にハンナがいてこの電話が策の内だったとしても、お前ならその程度の策は問題なく対処出来るだろ？」

『やはは、随分高く評価して貰ってるみたいで、嬉しいっすね』

「正当な評価って奴だよ。ま、それはさておき 単刀直入に聞かぜ。アリス、お前、まだオレを仲間にしたかって思ってるか？」

こちらにも余り時間はない為、ざっくりと本題を告げる。いきなり切り込んだ事が予想外だったのかは分からないが、押し黙る気配が電話越しに伝わって来る。

『……また随分いきなりっすね。おにーさんも、口調ほどに余裕がある訳じゃないって所っすか』

「まあな。オレは何が何でも生きて、またアイツらがいる日常に戻らなきゃいけねえんだ。いや、今のままでもやるうと思えばアイツらの傍にはいれるんだろうが お前ら魔女の争いを何とかしなきゃ、いつアイツらに危険が迫るか分からないんだからよ」

『……なるほど、なるほど。で、その為なら私も利用しようって魂

「胆つすか？」

「ああ。だが悪くない話だと思うぜ、お前にとっても。今のオレは確かにハンナに護られてるが、それも一週間の事だ。此処でオレを水面下で味方にすりゃ一週間後には立場が逆転するし、一週間以内に遣り合う事になっても、味方に死なれるのは困るからな、ハンナの足を気付かれずに引つ張るくらいなら出来る。勿論、ハンナが手に入れた情報を渡す事も出来るし」

それに、と一旦言葉を切ってから再度口を開く。

「今挙げた以外にも、お前なら幾らでもオレの利用方法くらい思い付くだろ？ そうやって利用し合う、それで良いじゃねえか、分かりやすい」

それは土御門アリスに対する正当な評価だった。賢しい彼女だからこそ、この好機を利用せずにはいられない筈だ。

「……おにーさん、ムチャクチャ性格悪いっすね。契約だからかは分かんないっすけど、あのクソガキのおにーさんを護るって心意気は本物っすよ？ それに、認めるのは癪っすけど美少女だし……良心は痛まないっすか？」

「いや、まあ、別に身内じゃねえしな。つか、あからさまに色々隠してる奴を全面的に信頼しろってのが無理だろ」

偽りのない事実である。オレにとって黒塚ハンナは護衛であり、オレが生き残る為に利用出来る存在でしかない。仲が良好であるに越した事はないが、身内と呼べるほどに情を深める事など有り得ない。

少なくとも、現状においては。

(まあ、もしかしたら女子供への甘さが無意識に出ちまつかもしれねーけどな)

オレが本気である事は、電話越しにもアリスに伝わった事らしかった。彼女はそれまでの呆れを一転させ、愉快そうに「やはは」なんて笑いを上げる。

『流石っすね。まあ想定通りっすけど。おにーさんはそう言う人だから、むしろ信用出来るっす』

「褒めるなよ、照れるじゃねえか」

『はいはい、褒めてないっすからね。それにしても、本当、態度がでかいっすね。私もあのクソガキも魔女で、おにーさんとの間にある実力差、理解してるっすか？ あんまり調子に乗ってると、あっさり殺されちゃうっすよ？』

「そうならねえように、必死こいて材料集めて手持ちの札で最善目指してんだよ。ま、今回お前に連絡を入れたみたいに、リスクを覚悟で動く事はあるが……今のオレが無力なのは理解してるからな。矛盾してるかもしれないが、多少のリスクは覚悟しなきゃ、身の安全なんて得られねえだろ」

聞こえるのは再度の溜息。何となくだが、アリスがどんな表情をしているのか分かる気がする。

『無力とか、どの口っすか。謙遜も過ぎると鬱陶しいっすよ？』

まあ、そうっすね。味方にしたいかどうか答える前に、おにーさん、一つ答えてもらって良いっすか？』

「ん？ 良いぜ、何でも質問して来いよ」

恐らくはこちらを見極める為の質問なのだろう。その答え次第で

返答が変わると言った所か。果たして、どのような問いを投げ掛けて来るのか。

アリスは一度大きく息を吸って吐いた後、電話越しでも分かるほどに張り詰めた空気と真剣さを伴い、言葉を発した。

『おにーさん　割とガチでアリスの足を舐める事が出来るっすか？』

「良いぜ、ただし対価は貰うがな」

即答した事が予想外だったのか、動揺しているらしい空気が伝わって来る。そんな空気にやっぱリコイツ面白いな、などと考えながら言葉を待つ事、十秒弱。躊躇いがちにアリスは問い掛けて来た。

『あー、えつと、即答したのは置いておくとして、対価ってなんすか？』

「お前の貞操とか？」

『てっ　！？　お、おにーさん何言ってるんすか！？』

「ケケケ、オレを隷属させようってなら、最低限その程度の対価は貰わなきゃ割に遭わねえな」

電話越しにも口をばくばくさせているアリスの様子が思い浮かび、苦笑。

（その程度でイニシアチブを握れると思ったら大間違いだぜ、アリスちゃんよ）

……別に、アリスがふざけた事を抜かしたからこちらもふざけ返した、という訳ではない。むしろ逆で、アリスが一切の冗談なく先ほどの問いを発したからこそその切り返しである。

足を舐めさせる事は、相手の尊厳を破壊し隷属を強いる事。先ほどの言葉は冗談っぽく聞こえるが、暗にアリスはこう問い掛けていたのだ。“自分の奴隷になる覚悟はあるか？”と。

これはかなり嫌らしい言葉だ。もしこちらが冗談だと受け取り電話を切るなり呆れるなりすれば、この局面でそんな言葉を吐く理由にすら思い至る事が出来ない人間だと見切りをつけられてしまう。悩んだとすれば、その時点で御しやすい人間だと思われ侮られてしまう。

悩む時点で、“御鏡悠夜は、土御門アリスが自分より上位の人間だと考えている”と見抜く事が出来るのだから。

更に続けるならば、悩んだ末にイエスと答えたなら容赦なくオレを奴隷としてこき使えば良いし、ノーと答えたならそれを踏まえた上で自身にとって有利な方向へ交渉の流れ以っていけば良い。

自分よりも年若い彼女がここまで悪辣な質問を出来る事実には戦慄せざるを得ないが、だからこそ手を組む価値がある。

「で、オレはどうだ、アリス。手を組む価値はあるか？」

『う、うう……ほんつとおにーさんって食えない人っすね！ 良いっすよ、手を組んであげるっす！ 別に足だって舐めなくても良いっすよ！』

「おう、それを聞いて安心したぜ。ま、今は時間もねーし、詳しい

事はメールでやり取りするって形で良いよな？」

『ええ、ええ、それで良いっすよ』

深い溜息を吐くアリスに、少し可哀想な事をしただろうか　な
どと思っていた時。

『でも、いちおー警告っすけど、やっぱりおにーさんは魔女を侮り過ぎだと思っすよ？　多分、あのクソガキは私の靴が何らかの作戦だっで見抜いてるっす。そこからおにーさんと私の関係に思い至る事はないと思っすけど……あの時私が熱心におにーさんを勧誘してた事は、当然クソガキも知ってるっすからね。おにーさんの裏切りも、もしかしたら加味して行動するかもしれないっす』

更に、とアリスは言葉を続ける。

『私にしたって、どうしてもおにーさんの力が欲しい、って訳じゃないっすからね？　リスクとリターン、発生する手間とか諸々を考慮して利があるから動いただけで……おにーさんが余りにも気に入らない行動を取れば、いつだって切る事は出来るっすよ？　勿体ぶってるだけで、それこそおにーさんとクソガキが手を組んで向かって来ても殲滅出来るだけの切り札　エンシェント・ワン 神器が私にはあるっすから』

だから決して調子に乗るな　そう告げた後に流れる、無機質な音。どうやら向こうから通話を切ったらしい。

「……………調子に乗るな、か」

分かってるさ、と呟いてからオレはトイレを出た。

第一章・3（前書き）

まさかの一週間遅れ……難産だった以上に、卒業研究に予想外に時間を持つて行かれた結果ですね。次は十月七日に更新出来るよう頑張ります。

第一章・3

深い夜闇に塗り潰された、人気の絶えた路地裏。其処に、先ほど黒塚ハンナと死闘を繰り広げた魔女、土御門アリスが制服姿で佇んでいた。美しい脚線美を誇るその足元には、酷く痛めつけられたらしく気絶している、路地裏にたむろしていたらしき不良たちの姿。

「はあ……まさか、ソッコで電話掛けてくるとは思わなかったですよ。本当、規格外っすねー」

手元の携帯電話を胸ポケットに仕舞いながら、新しく買った新作のブーツでグリグリと不良の背中を踏みつつ、アリスは苦笑と共に空を見上げる。彼女の視界の先にあるのは、何処までも広がる夜色。月と星を伴い其処に在り続けるその天蓋領域を見上げながら、アリスは御鏡悠夜という存在へと思いを馳せる。

「取り敢えず警告はしておいたし、ま、これでおにーさんも調子に乗る事はないと思いたいっすねー。やはは、調子に乗ったら乗ったで、それを叩き潰すのも面白そうっすけど」

アリスにとって、御鏡悠夜は確かに警戒すべき存在である。黒塚ハンナと組まれた際の厄介さ然り、彼本人の異端性然り、取り巻く裏社会の事情然り。

だが、それでもまだアリスにとっては如何様にも出来る存在だった。恐ろしく思う部分はあるが、それでも今の御鏡悠夜は彼女の命を脅かすレベルにはなり得ない。いざとなれば、彼女の切り札を以って殲滅すればそれで済むのだから。

だから、そう。アリスが御鏡悠夜と関わるに当たって最も注意しなければいけないと考えるのは、その頭脳と性根。より正確に言うならば、手を結ぶより殺してしまおうかと思ってしまうほどの不気味な、その把握能力と凶太さ。

「正直、あそこまで完璧に会話内容覚えてるとかチートレベルですよ。しかも普通にド外道な手段選ぶし……いや、まあ、嫌いじゃないっすけどね、そういうの」

だから手を結ぶ事を選んだんだし、と呟きながらアリスは胸元に仕舞っておいたロケットペンダントを取り出し手の平で弄ぶ。

「んー……にしても、どうしてっすかねー。確かにおにーさんはストライクゾーンと真ん中っすけど、だからって私はこんな簡単に摩くような尻軽キャラじゃない筈っすが……」

アリスは思い出す。御鏡悠夜から連絡が来て、手を結ばないかと言われた時、自身の鼓動が大きく鳴った事を。危険すぎると判断して殺す隙を窺おうと思っていたにも関わらず、気付けばなし崩しに手を差し出していた事を。

警戒度以上に好感度が上回ったからこそ協力を約束したが訳だが、アリス自身、どうしてそこまで御鏡悠夜に対する自身の好感度が高いのか全く理解出来なかった。

「いや、違っつすね。好感度が高いって言うよりは、親しみ易い……馴染み易い？ そう、まるで気心の知れた相手と話してるような……おにーさんを、私は知っていた？ いや、それは絶対に有り得ないっす。この感覚は……おにーさんに似た人と、過去に私は会っている……？」

しばし考え込むように目を閉じていたアリスは、何とはなしに片目を開け、パチン、とロケットペンダントを開き、その中に入っていた写真を見た瞬間、ガツンと脳内を殴られたかのような衝撃を受けた。

「……………あ」

写真に写っているのは、不機嫌そうな顔でそっぽを向く幼いアリスと、そんなアリスを抱き寄せて不敵な笑みを浮かべている巨漢の姿。

その不敵な笑みは、数刻前に相對していた“彼”が浮かべいたモノに酷く似ていて。

『うははは、オメーもまだまだ甘えなーオイ。そんなんじゃ、これから先の競争社会っつーか魔女社会？ を行き抜いていけねーぜ、アリス』

「嘘……………まさか、おにーさんが“あの男”の……………？ いや、そんな……………でも、確かに年齢は一致するっす。そう考えてみると確かに面影はあるし、さっきの電話越しの声なんて諸に“あの男”の声そのままじゃ……………」

アリスは著しく己が混乱している事を理解していながら、それを止める術を持っていなかった。何故なら、今彼女が想像している事が真実だとすれば、それは自分にとって非常に大きな意味となるからだ。

それこそ、これから先の人生を変えうるほどに。

「と、とにかく落ち着くつす、土御門アリス。そう、冷静になるつす……」

大きく深呼吸をしつつ、とにかく詳しく調べなければ、と自身に言い聞かせながらアリスは動揺を抑えつける。全てはまだ想像の域を出ておらず、大きな勘違いをしている可能性もあるのだから、と。

「……、けど、もしもおにーさんが本当に“あの男”の　だったら……」

唇を強く噛みながら、足元の不良を邪魔だと言わんばかりに蹴り退かしてからアリスは歩き出す。

そうして彼女は、夜の繁華街へと姿を消した。

.....

「それじゃ、またいつも通り一週間後によろしくね」

「ああ、分かってるよ。んじゃ、行こうぜ、ハンナ」
「分かった」

アリスとの会話を終えたオレはその足で応接室に向かい、ハンナ

と合流した。そして、どこのお茶会だと言いたくなるような光景が広がっていた事に頭を痛めつつ、とにかくハンナを立たせて帰る旨を告げ、研究所の入り口まで今に至る。

当然の如くハンナは抵抗する素振りも見せず従ってくれたのだが、それでもほんの僅か名残惜しげな雰囲気を見せていた事には驚いたものだ。

既に黒塚ハンナという少女がただの無機質な少女でない事は把握していたが、彼女が名残を惜しむ理由が欠片もユエに見出せなかつたからである。一体、何が彼女の琴線に触れたのだろうか？

(ユエも随分と楽しそうだしなー。本当、何があつたんだか)

その当の本人であるユエは、気怠い雰囲気ながらもどこか見守るような瞳で今もハンナの方を見ており、ハンナはハンナで明らかに何某かの感情の籠った様子で一礼し、歩き出したオレの後について来ていて。

「随分と仲良くなったみてえだな」

だからだろう、研究所の正門を越え敷地を出て、ユエからある程度離れた辺りで思わずそんな言葉を零していた。

「正直、意外だったぜ。お前とユエがあんなに仲良さそうにしてるなんてよ」

「仲が良いという表現は語弊がある。彼女の方から積極的に話を振って来てそれに答えていたから、そう見えていただけ」

「なるほど、な。ま、そういう事しておくか」

「……？ 随分と含みを持った言い方」

苦笑しながら吐き出されたオレの科白を聞き、ピタリと足を止めたハンナは物問いたげな表情でこちらを見上げる。

それに合わせて足を止めたオレは、「いや、まあ……」と口を開きながら、さて何と言ったものか、と言葉を頭の中でこねくり回す。

「お前って興味のない相手には石ころみたいに接する、っていうイメージがあったからよ。不愉快そうな素振り一つ見せず、むしろ積極的に受け応えしてるっぽかったから、それが意外だったなって」

更に付け加えるならば、二時間ほど前に初めて顔を合わせた時は決して良い印象はもっていなかったようなのに、である。

「だからユエが気になったんじゃないかねーかと思ったんだが、違ったか？」

そうやって今度はこちらが問い掛けてみれば、その先には驚いた様子でこちらを見上げるハンナの表情。

(あー、やべ、やっぱコイツ意外と感情分かりやすいな)

「どうしてそう思った？ 私と貴方はまだ合つて数時間。……正確には昨日の喫茶店での会計時に一度顔を合わせているが、会話を交わしたのは今日が初めてのはず」

あのゆとり店員はお前だったのかよ、と、思わぬ衝撃の事実に内心で突っ込みを入れながら、それは表に出さずに口の中で言葉を転がす。

「何っーか、イメージだよイメージ。つか、割とお前を見たらず誰でもそう思うんじゃない？ お前って普段、すっげー無表情キャラじゃない。興味のない事はバツサリ切り捨ててそれっきり、みたいな」

答えになっっているのかどうか自分でも分からない言葉だが、その言葉を聞いたアリスは「キャラ……？」と呟いた後に何かを思案するよつな仕草を見せた。

「……、確かに感情の起伏が乏しいのは認める。それに貴方の考察も正しい。けれど……私はそんなにも分かりやすい？」

「ん、いや、どうだろうな。よくよく観察すれば分かる、って程度だから、鈍いやつは全く気付かねーのかもしれないねえな。ただまあ、考察なんて大層なモンじゃねえから、あんまり気にしなくて良いと思っぜ、言った張本人が言うのもアレだけだよ」

「そう。なら良い」

そう言って口を閉ざしたハンナを見て、言わない方が良かったか？ などと内心で思いながらも、どうでも良い事だな、と考え直して歩き出す。この少女はその程度の事を気にするとは、思えなかったから。

それから十分ほど歩いた所で、ふとオレは違和感を抱いた。

（何だ？ 何か忘れてるよつな、この感じ……嫌なモンじゃねえけど、何かすげー間抜けな事をしてるみてえな……）

歩きながら考えを巡らせて、数秒ほどしてから答えが出た。

「おい、ハンナ。お前、あの転移術式とか言うのは使わねーのか？ ここから歩き続けても良いけどよ、結構な手間じゃね？」

そう。どうして今の今まで思い至らず、何も考えずに歩いていたのだろうか？ こうして歩く必要など、全くないだろうに。

そんな意図を含ませた疑問に、まるで予測していたとでも言うようにハンナは頷く。

「こちらから言おうかどうしようか迷っていたが、貴方がすぐに歩き出した事で機を逸していた。申し訳ない」

「あ、いや、別に良いけどよ。だったらさっさと使っちゃおうぜ、その方が早いだろ」

初めての遭遇が遭遇だけに、魔術というモノには未だに良い印象を抱いてないのだが、だからと言ってそこにある便利な技術を使わないのは、勿体ないというものだろう。

などと考えていると。

「ただ、出来ればあまり積極的には使いたくなかったから言わなかった側面はある。だからそれについてもここで謝罪しておく。本当に申し訳ない」

やけに気になる発言が、ハンナの口から飛び出した。

「んん？ それはアレか、意図的に黙ってたって事か？」

「そう。あの転移術式は著しく魔力を消耗する。そう簡単に魔力が回復しない事を考えれば多用はしたくない。来る時は急いでいた様子だから使ったけど、出来れば今日これ以上使う事は避けたかった」

だから黙っていたと申し訳なさそうに告げるハンナを見て、オレ

は気付けば「いや、構わねえよ」と手をヒラヒラ振っていた。

（まあ、何つーか、アレだな。ロリコンのつもりはねーけど、こんなガキにこんな態度取られて断れる奴は鬼だろ）

そんな風に考えてしまうほどに美しいハンナという少女は、或いはその美貌こそ最大の武器なのかもしれない。未だ発達の余地は多いにあるにしても、男を落とすには充分過ぎるだろう。

それが魔女相手に役立つのかと言われたら、無理だろうとは思っ
が。

「んじゃ、さっさと歩こうぜ、ハンナ。歩きながらも話は出来る
しよ」

「確かにその通り。今日は早く部屋に戻って休息を取りたい」

そんな風に言葉を交わしながら、再びオレたちは歩き出した。

*

非常にどうでも良い話ではあるのだが、研究所を出て三十分ほど歩いた場所に存在する住宅街には金持ちが多い。高級住宅街、という奴だ。数時間前にアリスとハンナが死闘を繰り広げたのも其処であり、詳しくは描写しないが、金がある場所にはあるのだと理解させられる光景が広がっている。

高級住宅街　金持ちが住む家。必然的にこの辺りを歩いているのは社会的ステイタスが高い人間ばかりであり、高校の近くや学生

の利用が多い繁華街ならともかく、本来ならばオレがこんな場所で知り合いに会う事はまず有り得ない。

だが何事にも例外は存在するモノであり、そして今日、不幸な事にオレとハンナはその例外と遭遇してしまった。

「おお？ そこにいるのは御鏡ではないか。そうか、そう言えば今日は検査の……ぬっ！？ おい御鏡、お前の隣にいる美少女は一体誰だ！？ 俺のデータベースにはそのような特A級の美少女は存在せんぞ！？」

分かりやす過ぎるほどに分かりやすい変態 二ノ宮健介。非常に残念な事実であり、そして普段の態度から忘れがちな事だが、この男は名家の令嬢と婚約を結ぶほどに地位の高い家柄の生まれなのである。

だからこそこの場所で遭遇する可能性はゼロではないのだが、何もこんな時に出会わなくとも良いだろうに、とオレは内心で天を仰がざるを得なかった。

「あー、何っーか、取り敢えずその変態っぽい口を閉じる。まあ何だ、コイツは……」

ハンナについてどう説明しようか悩んでいると、不意に感じる袖を掴まれた感覚。視線を右斜め下へと向ければ、其処には説明を求めめるかのようにこちらを見上げるハンナの姿。

「ああ、この変態は二ノ宮健介つつって、中学時代から腐れ縁が続いている奴だ。変態だけど害のない一般人だから、まあ気にする必要はないと思うぞ。変態だけどな」

「おい御鏡、変態変態と言つのはやめないか。誤解されるだろう？ お初にお目に掛かります、美しきフロイライン。二ノ宮健介と申します。これはお近づきの印にどうぞ」

オレへの抗議を放った直後に態度を変え、片膝をつきながらスツと何処からともなく取りだした薔薇をハンナへと捧げる健介。キリツ、という擬音が付きそうなその顔は、見えて非常に殴りたくなる鬱陶しさがにじみ出ている。

果たしてどのような反応をこのクール娘は返すのだろうかと好奇心を抱く半面、恐らくは冷静に切り捨てていつも通り健介が滑稽な態度を見せる事になるのだろう、むしろその前に殴ってやるか、と溜息を吐いていたオレは、

「それが真実、貴方の心からの言葉ならば私は受け取る。けれど違う筈。他者を誤魔化す為の欺瞞など貰っても嬉しくはない」

随分と奇妙なハンナの言葉に、思わず振り上げていた拳を止めてしまっていた。だが、どうやら呆気にとられたのはオレだけらしい見れば、健介は薔薇を差し出した姿そのままに、その表情に神妙な色を浮かべている。

まるで、神聖なモノに対峙したかの如き表情を。

訳が分からず混乱しているオレを尻目に、ハンナは言葉を続ける。

「私には貴方の在り方をとやかく言う事は出来ない。何故貴方がそうやって自身を偽るのかも分からない。そしてそれらがなかったと

しても私は受け取る事が出来ない。貴方と同じように、私にも既に捧げるべき相手はいるから」

「……なるほど。どうやら、見誤っていたようですな。そこまで見抜かれてしまつては、道化を演じる事も出来ぬと言つもの」

手元を持っていた薔薇を再び何処かへ消した健介は、今まで見た事がないほど落ち着き払つた態度でその頭を下げる。

「真に失礼を致しました、小さき賢者よ。そして叶うならば、その名を語り継ぐ誉れを頂きたく」

「私の名前は黒塚ハンナ。こちらこそ偽りの名を語る非礼を許して欲しい、道化を演じる真なる騎士よ」

厳かな神聖さすら感じられるその情景を見たオレは。

「……、……」

お前ら何やつてるんだよ、という突っ込みを入れる事すら出来ないほど呆氣に取られてしまった。一体何が起きているのか。オレはいつの間にスタンド攻撃を受けたのか。余りにも意味不明過ぎて理解が追い付かない。

（え、マジで？ 二人とも電波でしたってオチなのか？ いやいやいや、え？）

突然の事態に冷静な思考が出来ない。混乱の波が押し寄せる。オレは一体、何を見ているのか。どうして唐突にこんな芝居がかった遣り取りが始まつたのか。

「あー、何かすげえ良い雰囲気の所悪いんだが、お前らもしかして

知り合いだったりすんのか？」

そうして混乱した果てに、遂に空気に耐えきれず言葉を発してしまった。空気を讀んでいない事は知っているが、放置しておく事が出来なかったからだ。

「いや、彼女とは初対面だ。まあ、アレだな。御鏡には分からんレベルで通じるモノがあったという事だ」

一つ咳払いをした後に立ち上がりそう言い放つ健介。ハンナはハンナで、こちらへ視線を向けてから「ごめんなさい。けれど必要な事だった」などと訳の分からない事を告げて来て。

「あー、まあ、別に良いけどよ……」

オレは戸惑いと共に、先ほどまでの奇異な出来事を受け流すしか事しか出来なかった。

（何なんだ、一体？ まさか健介が魔女に通じてるって事はないだろうが……変人同士、惹かれ合った、のか……？）

もちろん、内心ではそんな疑問が渦を巻いていたが。

「黒塚殿、この男と少々二人きりで話したい事があるのですが、席を外して頂いても？」

「構わない。見える範囲でお願いします。こちらにも連絡を取らなければいけない」

とは言え、こちらが思考を始めた傍から再び息の合った遣り取りをされた事で、もう好い加減この二人に関して考察する事はやめよ

うと決意する事になったのだが。

とにかく、携帯を取り出したハンナがオレたちから声が聞こえぬ位置まで移動した事で、オレは健介と一対一で向かい合う事になったのだった。

正面切ってこちらを見据える健介の表情に浮かぶのは、呆れと感嘆の入り混じった色。

「それにしても、驚いたぞ御鏡。まさか、お前があれほどの賢人と知り合いだったとはな」

「いや、むしろこっちが訳分かんねえ状態なんだけだよ。つか賢人ってのはハンナの事で良い、んだよな？」

「ああ、そうだな。まさか俺の道化芝居を一目で見抜かれるとは想像だにしていなかった。いやはや、世界は広いな」

「んん……分かんねーな。お前が美少女前にしたら変態的な動きをするのはいつもの事だろ？それが演技だって事くらい誰にでも分かるんじゃない？」

違っのかよ、と問えば、否定の意が込められた呆れ混じりの溜息。

「分かってないな、御鏡。彼女は俺の本質を一目で見抜いたのだよ。誰にも。そう、お前にすら見せていなかった俺の本質を、な。これに感嘆せずは何を感嘆しろというのだ」

「……」
いや、さっぱり分からないのだが。そんな言葉を呑み込みつつ、まあ良いや、と告げる事で話題の転換を図る。

「んで、二人きりで話したい事って何だよ？」

「ああ、その事なのだが……御鏡よ、お前、何か厄介事に巻き込まれているのではないか？」

「……、何でそう思うんだよ」

「俺にもあの賢人が普通の人間ではない事くらいは分かる。所作に無駄がないし、何より俺がお前に語りかけた際、いつでもお前を護れるよう警戒を露わにしていた。少なくとも見た目は十代前半の少女が、だ。何かあると疑うのが筋だろう」

相変わらずの、本当に一般人なのかと疑いたくなるような鋭さを発揮する二ノ宮健介クオリティ。どうするべきか。

(いや、一つしかねえだろ)

「お前も知ってたんだろ、オレが国家レベルの研究に協力してるって事くらい。ハンナもオレと同じなんだよ、協力者って奴だ。で、流石に帰り道を女一人で返すのはダメだろ、って話になって送ってる最中ってワケだ」

「ほう。では何故あの賢人がお前を護るように警戒行動を取ったのだ？ むしろ逆ではないか？」

「さあな、よく分からん。境遇的に他人を警戒しちまうんじゃないかね？ オレはある程度以上仲が良いから、例外って事じゃね？」

「……ふう。それで納得しろ、という訳か」

やれやれ、とでも言いたそうに溜息を吐く健介。そんな態度を見て、オレは本当に良い友人に恵まれているな、と感じた。

そんな事、口が裂けても言うつもりはないが。

「すまん、健介。納得してくれると助かる」

「ああ、良いだろう。ああ、お前の秘密主義はよく理解している。」

オレに対する気遣いだという事も、な。だが、頼むから命だけは粗末にしてくれるなよ、御鏡。いつぞやのような、ヤクザの抗争に首を突っ込んで死にかけました、なんて事はもう懲り懲りだからな」
「安心しろって。ありゃ若かりし頃の過ちって奴だ」

抜かせこの馬鹿ものが、と言って笑う健介にオレも苦笑を返しなから、この会話はこれで終わり　だと思っていたのだが。

「ふむ。取り敢えず紫亜子が待っているから俺は此処で帰らせてもらうが　最後に一つだけ良いか、御鏡」

真剣な表情になりこちらを見据え、そんな言葉を健介は発したのである。

「あん？　何だよ、改まりやがって」

返すオレの声に宿るのは訝り。一体、この場面で他に何を言うつもりなのだろうか？

そんなオレの疑問は、予想外の形で答えを返される事になる。

「いや、何。大した事ではない。ただ……あの賢人は絶対にお前を裏切るような真似はしない。だから、お前も絶対に彼女を裏切らないで欲しい。何が理由で共にいるのかは分からんが、何があっても彼女の事は信じてやってくれ」

「……………」

(……………やっぱり何かあるんじゃないのか、この二人。いや、それ以前に……………)

「珍しいじゃねえか、お前がそこまで紫亜子ちゃん以外に入れ込むなんてよ。まさかとは思うけどよ、ガチで惚れたのか？」

「……はあ。何故お前はそんな思考しか出来んのだ、そんな訳がなかるう。彼女がお前に対しどんな感情を抱いているかは分かんが、そこに偽りは無い。紛う事なき本物だ。理屈ではなく直感でそれが分かったからこそ、お前の方から彼女の信を裏切るような真似はして欲しくないと思ったのだよ」

「……そう、か」

健介のこうした説教　暗邸に言わせれば *sekkyou* だそうだが　が間違っていた事は、少なくともオレが知る限り一度もない。であるからこそ、今回もそれに従うべきなのだろうが。

(やべえな……もろに裏切ってたんだが)

今のオレはハンナの保護を受けながら水面下でアリスと連絡を取り合っている状態だ。これは立派な裏切り行為であると言えるだろう。

「　まあ、オレが言いたい事はそれだけだ。では、な。自愛を持ってよ、御鏡」

「あ、おう。またな」

もう既に裏切っています、などと言える訳もなく。オレは健介が去ってくれた事に安堵を感じつつ、ハンナの方へと視線を向けた。

「ん、向こうも終わったみたいだな」

十メートルほど先にいるハンナがちょうど携帯を閉じた事を確認し、彼女の方へと歩を進める。

内心で、健介の言葉を反芻しながら。

（裏切るな、って言われてもなあ……今更アリスを切るなんてのは流石に出来ねえし、それに）

健介がどれだけハンナを信頼してしようと、オレはハンナを信頼出来ていないのだから命を預ける事など出来る筈がなかった。

「おう、そつちも終わったみてえだな。こつちもあの馬鹿は帰ったん？ どうした、オイ」

ハンナの表情が妙に固い事に、近付いて初めて気付いた。その手に持つ携帯を握りしめている様子が、只事ではないと予感させる。

「……………、方針が変わった」

いつそ冷淡とすら言える態度でそんな風に切り出すハンナ。その瞳に、一瞬何某かの色が揺らめいた気がしたが 即座にその色は消え失せて。

次の瞬間、オレは臍腑を抉られるような衝撃を受けた。

「貴方の通う高校に魔女が潜伏しているという情報が入った。貴方にはその魔女を探してもらいたい」

第一章・4（前書き）

何とかギリギリ間に合いましたね。次は十四日に更新します。

第一章・4

御鏡悠夜と二ノ宮健介、両者から十メートルほど離れた電柱の下。何かあれば即座に駆け出せるよう、二人の姿を視界に収めつつ、ハンナは携帯電話を取り出して操作する。雇い主に連絡を入れる為に。

携帯に耳を当てたハンナに届くのは、無機質なコール音ではなく、可愛いアニメ声による歌。それが待ちつたと呼ばれる機能である事をハンナは知らなかったが、それでも自身の主の趣味が特殊である事には何となく気付いていた。

「相変わらず訳が分からない。神曲とか言っていたけど、正直不愉快……」

愚痴るように一人呟いていたハンナだったが、十秒ほど経ち繋がった瞬間、即座に纏う空気を一変させる。

『ふふ、毎日毎日、律儀な事だね。だからこそ信頼出来るけれど、ボクとしてはもう少し反骨心を見せてくれた方が遣り甲斐があるね』

電話越しに対峙する相手の言葉は、毒が強すぎるがゆえに。

言葉や内容自体もそうだが、何よりもその口調と声音がおぞましいのである。

自分以外の全ては取るに足らない愚者であると、心底から信じているようなその喋り方が。

「報告します。御鏡悠夜を確保する事に成功しました。魔女に襲われていましたが、既に治療を終え御鏡悠夜の安全は保障出来ます」
『ふむ、よくやった、と言いたい所だが……やれやれ。治療という事は負傷させたという事か。キミにしては不手際だね?』

「……っ、申し訳ありません」

『いやいや、ボクは別段構わないさ。その命さえ無事なら多少の傷はね。ほら、傷は男の勲章だと言うだろう? 最も、キミがどう思うかは分からないけどね?』

雇い主の声に対し、気付かれぬよう唇を噛む。だからこのヒトは嫌なのだ、自分の突かれたくない嫌な部分を嬉々として突いて来るから、と。

そう。電話越しに言われた通り、ハンナは深く悔いていた。表情に出す事もなく、慙愧たんけいの念など足を引くだけだと理解していたから可能な限り思う事も避けていたが、それでも悠夜の命を危険に晒した事を彼女は誰よりも強く後悔していた。

護衛対象だから、ではない。彼が、御鏡悠夜こそが黒塚ハンナにとつての。

『あっはっは、やはりキミは良いね。魔女などというカタチでさえなければ、ボクの愛玩動物にしてあげても良かったと思えるよ。悔しいかい? 護ると誓った相手をきっちり護り通す事が出来なくて悔しいに決まっているよね、何せ御鏡悠夜はキミがかつて永久の忠誠を誓った***の』

「報告を続けても、良いでしょうか」

気付けば、ハンナは遮るように言葉を発していた。それは本来なら不敬であるとして何某かの罰を与えられてもおかしくない行動だ

つたが、しかしそれ以上にこの人物に語られなくなかったのだ。

自身の中の大切な想いを、穢される気がしたから。

『ふふっ、良いよ。良いともさ。報告の続きを聞こうか、黒塚ハナ。ふふふ……』

含み笑い。その不愉快さに携帯を叩きつけたい衝動に駆られるも、必死に自制しつつ彼女は言葉を紡ぐ。

「その後、今日は御鏡悠夜の定期検査の日だった為に特殊生物学研究所風羽支部に御鏡悠夜と共に来訪。支部長である御鏡ユ工と会話を交わした後、検査を終えた御鏡悠夜と共に研究所を出てアパートへ戻る所です」

『ああ、そうだったね。全く面倒だったよ、あそこはある種の治外法権だからね。一つ聞きたいんだけど、キミから見て御鏡ユ工はどうだった？ 彼女は御鏡悠夜の伯母な訳だけど、キミが感じたままを教えてくれないかな』

一瞬の躊躇い。それはどこまで話せば良いかを逡巡したから。だが無言の間が続いては電話越しの相手を不審がらせると思い、即座に口を開く。

「彼女は叔母として御鏡悠夜を深く愛していました。恐らく彼女が御鏡悠夜の敵に回る事はないかと」

『ああ、駄目だね。全く以って駄目だ。ボクが聞きたいのはそんな事じゃないよ。キミがどう感じたかを聞きたいんだよ。御鏡ユ工も、キミにとっては護るべき対象となるんじゃないのかい、因果関係的に考えれば、さ』

「……、彼女には私の護りなど必要ありません。彼女は一人で完成

しています。そして私が“あの御方”から頼まれたのは御鏡悠夜を護る事。恐らく私と御鏡工の道が再び交わる事はないと思います」
『ふむ、なるほどね。なるほど、なるほど。やはりキミのセンスは鋭いね。一人で完成している、とは面白い事を言う。まあ、そういう事なら彼女は捨て置いても良いかな』

何が琴線に触れたのかは分からない。だがどうやら随分と機嫌が良くなっただけで、愉快そうな笑いが耳に届く。

やはりそれは不快であるが為に、ハンナは早々に電話を切ろうと心の中で頷く。もう既に語る事は語ったのだから、と。

「以上で連絡を終了しま

『ああ、いや。ちょっと待ってくれないかな』

「……………」

そう思っていたからこそ、その言葉は不意打ちだった。一体、電話の向こうの人物は何を語るつもりなのか。

そんな風に思考した彼女は、次いで愉快そうな調子で放たれた言葉に愕然とする事になる。

『追加の命令だよ、黒塚ハンナ。魔女が御鏡悠夜の通う霧桜高校に通っているという情報が入った。御鏡悠夜にもこれまで同様に通わせて、魔女を探す縁にしてくれないかな』

何を言っているのだろうか　一瞬、本気でハンナは訳が分からなくなった。

「な、何を……！」

魔女が霧桜高校に通っているのは、驚きはあるが別に良い。何せ現代に生きる魔女はその大半が十代、場合によってはそうなり得る事もあるだろう。実際、ハンナの知る魔女にも一人、大企業の令嬢として生まれたが故に学園へと通わされている少女がいるのだから。

だから、そう。真実彼女を混乱させたのは、御鏡悠夜に調査をさせるというその一点だった。護らねばならぬ筈の彼を、むざむざ死地に飛び込ませなければいけないのか、と。

「有り得ない……！　御鏡悠夜は護らなければいけない対象の筈、その彼をむざむざ死地に送り込むなんて……」

「あっはっは、これは珍しいね、これは奇妙だ。まさかキミがそこまで感情を露わにするとはねえ。ふふっ、随分と人間らしくなったじゃないか、人形がさ。敬語、忘れてるよ？」

「っ」

一瞬で鎮静化される意識。この嫌悪感極まりない相手に対して大きな隙を見せてしまった事に、深い後悔。

「ふふっ、ああ、謝罪はいらないよ。珍しいモノを見て非常に気分が良いからね。うん。やはりキミにとって御鏡悠夜はトクベツみたいだね。いや、当然と言えば当然な訳だけど……もしかして、惚れたかい？」

「意味が分かりません。私にとって御鏡悠夜は護るべき存在。それ以上でもそれ以下でもありません」

その言葉は、自分でも驚くほどすんなりと口から出た。混乱、怒り、嫌悪、それらの感情が緋い交ぜになっていた心境にあって、何一つ気負う事なく当たり前であるかのように。

理由は明白だった。何故ならそれが、純然たる事実だから。突かれて痛い部分など、何一つとして存在しないから。

恋や愛と言った感情の機微に疎い事を差し引いても、黒塚ハンナには悠夜に捧げるべき恋愛の情は持ち合わせていないのだから。ただ一つ、彼を護るといふその誓いさえあれば良い。

……数時間前に縛りたい云々と言って騒いだ瞬間もあつた気がするが、あれはあくまで場を和ませようという彼女なりの冗句である。多分。

『……、ふうん、そっか。どうやら本当に御鏡悠夜に色恋めいた感情は抱いてないみたいだね。これはつまらない展開だ』

失望した、とでも言わんばかりに一気にテンションを下降させた相手の声を聞き、僅か反撃が出来たとハンナは心の片隅が誇らしげな気持ちになった。

更に言うならば、余りにも場違いな科白を聞かされたお陰で意識もすっかり冷めた。もうこの存在を前に醜態を晒す事はない、と彼女は頷く。

「説明を下さい。どうして護衛対象である御鏡悠夜を囿として使わねばならないのか」

『説明も何も、仕方がないだろうに。御鏡悠夜でなければ、霧桜高

校に通う事なんて出来ないのだからね。それに、囷と言うのは彼に失礼だ。彼だってそれなりの修羅場は潜り抜けているんだ。早々下手な事にはならないだろうさ』

「……、ならば私を転校生として霧桜高校に通わせて下さい。貴方ならその程度の改竄は問題無く出来る筈です」

『却下、霧桜は特殊なんだよ。十把一絡げの学校なら幾らだって誤魔化しは利くけど、あそこは駄目だ。そういう誤魔化しは一切通じない。キミをあそこに通わせる事は不可能なんだよ』

それは、非常に珍しい事だった。常に他者を見下し、自分こそこの世で最も優れていると信じて疑わないような存在こそ、ハンナにとっての雇い主であった筈だから。

そんな存在が不可能、と、自身の敗北を認めるような言葉を吐く事が意外だったから、ハンナは思わず言葉を発していた。

「……意外ですね」

『ん？ ボクが不可能なんて言葉を使う事が、かい？ 仕方ないさ、アレはそういうモノなんだから。既にそういう概念として成り立ってしまっているのさ。 ああ、だから、うん。キミの懸念を一つ払ってあげよう。あそこで争いは、絶対に起こらない』

「……？」

酷く不可解な言い方であり、ハンナは著しく戸惑わざるを得なかった。概念云々もそうだが、何故そうやって断言してしまえるのだろうか、と。

『ああ、これに関しては気にしなくても良いよ。この物語には関係ないからね。ただ一つ、魔女を含めた異能者全てはあそこで争う事は出来ない、と覚えておけば良い』

「……、その根拠は？」

いつもに輪を掛けて意味不明な科白。それらに対する疑問を呑み込み、端的にハンナは問いを投げ掛けた。

そして。

『何、当たり前的事だよ。だって、あそこは神聖な学び舎なんだから、ね』

返って来た答えは、やはり煙に巻くようなモノ言いでしかなく。

あらゆる問答が無駄だと悟ったハンナは、空いている手を爪が食い込むほどに握り締め、「分かりました」と言う事しか出来なかった。

最初から、ハンナには拒否権などなかったのである。どれだけ噛み付いた所で、雇い主の意向は絶対なのだから。

それに、このヒトがここまで断言するのなら、実際彼の身はそこまで危険ではないのだろう。そう思える程度には付き合っても長く、信用していた。

だからと言って、信頼する事など出来る筈もなかったが。

「それではこれにて定時連絡を終わります」

『ああ、精々頑張つて御鏡悠夜を護つて欲しい。ボクにとってこのバトルロイヤルで他の魔女を駆逐する事と御鏡悠夜の身の安全は等価だけど、キミにとってはそうじゃないだろうから、ね』
「……失礼します」

そうして通話を停止したハンナは、思わずそのまま地面に叩きつけたい衝動に駆られた。

「何て、説明すれば良い……っ！」

護ると誓った。あらゆる手段を以って貴方を傷付けず、護り抜いて見せる。そう誓ったにも関わらず、積極的に彼を魔女攻略の札として使わざるを得ない矛盾。争いになる可能性がないとは言え、魔女と接触する可能性が大きく増える事は間違いなく、何かが起こらないとも限らない。

そんな場所へ彼を送らねばいけない苦痛。下手をすれば彼が護りたいと願っている日常すら壊しかねない、唾棄すべき所業。

何よりも。

「私を信用してるって、言ってくれたのに……っ」

こんな怪しい女を、彼を襲った土御門アリスと同類の自分を信じると言った彼の言葉。真っ直ぐに自分を信じてくれている瞳。

『んー？ いや、必要ねえだろ。さっきも言ったけどよ、オレはお前がそんな事しないって信じてるからな。ついでに言うなら、アレ

だ。仮にお前が何かしててもそれはオレに人を見る目がなかっただけの事だから、別に恨んだりはいしねーぜ』

「そんな彼に、私は報いる所か理不尽を命令する事しか出来ない……！」

悔しかった。哀しかった。心が痛かった。いつそのまま消えてしまいたいとすら思った。だが現実は無情で、今もほら、会話を終えた彼がこちらに向かっている。

「ごめんなさい……御鏡悠夜」

自己満足と分かっているながら、そう呟かざるを得なくて。

「おう、そっちも終わったみてえだな。こっちもあの馬鹿は帰ったん？ どうした、オイ」

だからハンナは仮面を被る。そう、心を殺す事には慣れているから。

「……、方針が変わった」

嗚呼、彼は何と反応を返すのだろうか？ 怒り？ 悲しみ？ 失望？ それともそれら全て？ いずれにせよ、自分にはそれを全て受ける責務がある。

「貴方の通う高校に魔女が潜伏しているという情報が入った。貴方にはその魔女を探してもらいたい」

でも、だから、お願いします。それでも貴方を護り抜くから、許して下さい。

「……、何だよ、それ。はは、おいなあ、冗談だろ？」

ハンナから告げられた、霧桜高校に魔女がいるという言葉。その言葉が、深くオレを打ちのめす。

（何だよそれ。じゃあアレか、健介や葵、神楽、あいつらにいつ魔女の手が迫ってもおかしくないってか？）

「残念ながら真実。今しがた連絡があった。霧桜高校に魔女が通っている」

「……、……なあ、ハンナ。魔女が普通に学校に通うなんて事、あるのかよ」

叫び出したい感情を抑え、オレは言葉を紡ぐ。そう、ここでハンナに八つ当たりしても仕方がない。そんな行為に意味はない。

「例外的なケースだけけど、ない訳ではない。例えば大企業の令嬢に魔女が生まれた場合、その力を生かして企業に利益を出す為にその娘は大切に育てられる。その過程で学園に通う事もある。私の知り合いの魔女がそう」

「……つまり、だ。その学園に通ってる魔女つてのは、以前から通ってたって事で良いのか？ このバトルロイヤルに参加する為に通

「つてるんじゃないって、そう考える事は出来るのか？」

「それは、確かにそういう考え方も出来るかもしれない。ただ、このバトルロイヤル自体は以前から存在が知られていた。だから貴方も分かっているかもしれないけど、」

「バトルロイヤルへの布石として学園に通ってる可能性もある、って事か」

「こくん、と頷くハンナによって、オレは現実逃避する事も出来ない」と理解させられた。

（通ってる魔女ってのが偶然霧桜に通ってたって事なら、まだ救いはあったんだが……んなワケねえよな、クソがっ）

「つまり、何らかの方法で学園を利用する気満々だった事じゃねえか」

「いや、それに関しては安心して良い。あの学園で異能を持った者による争いが起こる事はない」

「んん？ 随分と断定するけどよ、その根拠は何だよ」

余りにも当然の如く言われた為、何か理由でもあるのだろうかと思っただが。

「あ、いや、それは……」

何故かハンナは言葉に詰まり、誰から見ても明らかかなほど動揺を露わにした。今まで一度も見た事がないそんな態度に驚きつつ、湧き上がって来るのは怒り。

「下手な慰めはいらねえよ。何の根拠もねえ事を当たり前みてえに言わないでくれ、縋りつきたくなっちまう。んな中途半端な気遣い

なんざ、やめてくれ」

「……っ。ごめんなさい。軽率だった」

「……あー、いや、気にすんな」

素直に頭を下げるハンナを見て、怒りに次いで込み上げるのは罪悪感だった。

（まったく、オレは馬鹿か！？ これじゃ単なる八つ当たりじゃねえか、格好悪い……！）

怒りと申し訳なさ、一抹の混乱がミックスされた心境の中で、それでも落ち着けと自分に言い聞かせて頭を働かせる。

（まだ目に見える範囲で被害は出てねえ。て事はまだ動いてないって事なのか？ 学園は隠れ蓑？ それとももう既に見えない部分で手は伸びてる？）

「とにかく、学園に魔女がいる。オーケー分かった。んじゃあ聞きたいんだが、ハンナ。魔女であるお前の視点から考えて、学園に通うメリットは何だ？」

「……、まず自身を一般人だと偽れる点。魔力を隠して通えば、隠れ蓑としては非常に優秀。二つ目は学生という身分の獲得。殆どの魔女が表社会に拒絶され裏社会の陰へと追いやられる事は話した通りだけど、学生という身分を手に入れば表社会でも大手を振って生活出来る。表社会でなければ手に入らない情報も入手する事が出来る」

そこでいったん言葉を切った後、躊躇うような素振りを見せた後にハンナは再び口を開いた。

「そして三つ目は 学園に通う人間からの魂の搾取。殺せば騒ぎになるから殺さない程度に、それこそ貧血や眩暈を起こさせる程度に魂を集めて自身の力へと還す事が出来る。他にも学園に通う人間を手駒として操った、り……」

オレを見上げていたハンナは、途中で言葉を止める。それは恐らく、オレの顔に浮かぶ表情を直視した所為。

鏡がなくとも、自分がどのような顔をしているか分かる気がした。

「悪い、ハンナ。お前は何も悪くねえ。悪くねえし、オレから聞いた事だが……すまん、もうそれ以上言わないでくれ」

「ごめんなさい……。貴方の気持ちを慮る事が出来なかった」

気にするんじゃないよ、と言いながら顔に手を当てて天を仰ぐ。

想像してしまったのだ、健介が、葵が、神楽が、魔女の餌にされ操られている情景を。それが現実だった場合、オレが如何に間抜けで無知だったかを理解してしまったが故の、それは魔女という存在への嫌悪感と自身への怒りが発露した結果だった。

「まあ、分かった。んで、オレの日常を護りたきゃオレが自分で動けて、そういう事なんだな？」

「そう。私はあの学園に通う事が出来ない。だから貴方を護る事は出来ない。貴方の経験と実力で魔女を探し出して欲しい」

「……護ると言ったその日の内に凶になれ、か。お前ら魔女は……いや、詮のねえ事だな。すまん、今の言葉は忘れてくれ」

それが最善だという事は頭が理解しているし、望む所だ。自分の手でアイツらを護る事に繋がられるならば、奮わない方がおかしい。

だから縛り付けられるようなこの気持ちは、そう。黒塚ハンナという少女に対して、過剰なまでの期待をしていた自身の愚かさへの戒めだ。

忘れてはいけない、彼女はオレを護るという契約を受けているが、本命の目的は魔女同士のバトルロイヤルの勝者となる事なのだから。

『その認識で問題ない。これまでの生と魂と魔女としての誇りに賭けて誓う。私はあらゆる手段を以って貴方を傷付けず、護り抜いて見せる』

いきなり襲撃されて、意味不明な展開に巻き込まれて、理不尽に日常から叩き出されて　そんな中で言ってくれた、ハンナの言葉。どうやらオレは、無意識の内にあの言葉に寄りかかってしまっていたらしい。

（分かってた筈だろうが、いつだって最後に頼れるのは自分だけだつて事くらい。つか情けなさ過ぎるだろ、こんなガキに甘えるとかマジ有り得ねえ）

「分かった、把握した。んじゃ、取り敢えず帰ろうぜ。今日はもう色々あり過ぎて疲れた、正直眠い」
「分かった」

そんな会話を交わし、オレはハンナと共に彼女のアパートへと向

かった。

そして恐らく、この時こそオレのスタンスが決定された瞬間だった。信用しても信頼するな、裏切る事を躊躇うな、最後に頼れるのは自分の力のみだ、と。

第一章・4（後書き）

フラグブレイク（笑）いえ、ヒロインはいないんでブレイクも何もないんですが。信じられるか、これまだ二日目なんだぜ……wアリスに襲われてハンナに説明を受けて研究所に行つて健介と出会つて学園に魔女がいるつて教えられて……イベント自体は進んでるのに遅々としている印象を受けるのは執筆速度が遅いからですね、精進しなければ。

ちなみに、今の悠夜くんの状況

「私が貴方を護る。不自由かもしれないけどこのアパートで隠れていて欲しい、絶対に護るから」 四時間後「すまない、魔女のいる学園に行つて魔女を追つて欲しい（魔女に狙われてくれ）」

何を言っているのか（ry

第一章・5（前書き）

うぐ……今度は一日遅れ……。今回は単純に寝落ちしてしまいました
た、何とも情けない限りですね……。うう。

第一章・5

ゆらりゆらりと揺蕩たゆつて、ふたりふわりと漂う。前後左右、上も下も何もかもが曖昧あいまい模糊もことした感覚の中で、オレはこれが夢の中なのだ。“何となく”理解した。

理由はなく、故ににそれは”ただそうである”という事に他ならず　オレは至極当然のようにその事実を受け容れた。

次の瞬間、

「うおっ……!？」

突如としてオレを取り囲んでいた曖昧な世界が渦を巻き形を成し、それと同時にオレも意識が覚めた。

そう、”意識が”覚めた。それは決して目が覚めたという訳ではなく。。

「何だ……これ」

故にオレは、夢でありながら明確な自意識と共に”其処”にいた。見渡す限りの闇、闇、闇。ひたすらに闇が何処までも広がっている、不可思議な空間に。地に足をつけている感覚もなく、あるいは宙に浮きながら歩けばこのような感覚になるのかもしれない、と直感的に思った。

(明晰夢って奴か……? ”いや、違う”)

これはそのようなモノではない。そう、これは
配する にして の 。 が支

「ぐっ……ンだよ、これ。頭がいてえ……」

突然の頭痛とそれに伴い脳内を駆け回る謎の言葉。遂に頭が可笑しくなっちまったのか、と痛みの中で考えていたオレは。

「今はまだ思い出さない方が良いの、それを貴方が知るのは
まだ早い」

天上の調べと聞き紛うほどに美しく、それでいて可憐な金鈴を振ったような声を聞き届けた。

同時、あれほどオレを苦しめていた痛苦が嘘のように消え去って。
「……、……」

必然的に声の方へと顔を向けたオレは、視線の先にいる存在を目にした瞬間に意識が空白になった。

闇の中にあつて尚も美しさを主張する深い夜色のロングヘアー。
無垢な白雪の如き肌と芸術的なコントラストを描く豪華にして格調
高きゴシックドレス。

そして、神々が造り出したかのような完成された顔立ちの中でよ

り一層目を引く、どんな金よりも美しい金色とどんな銀よりも気品ある銀色から成るオツドアイ。

眩暈を起こすほどに美麗で、一目見てこの世のモノではないと確信させる程に可憐な”何か”がいた。

そう、”何か”。カタチだけを見るならば十代前半の童女と形容すべきなのだろうが、その強烈なまでの存在感と身に纏う神秘さは間違っても単なる童女のモノでは有り得ない。

否、これはそもそも人と形容して良いのかどうかすら。

「てめえ……何だ？」

更にオレを困惑させるのは、目の前の存在に対する奇妙な懐かしさ。間違いなく記憶にないにも関わらず、オレはこの何かを懐かしいと感じ、あまつさえ会えて嬉しいなどと感じてしまっているこの矛盾。

分からない。分からないが、どうしてだろう、眼前で優美に微笑むその存在は、絶対に自分に敵対するモノではないと確信出来てしまつのは。

「何、か。それは中々哲学的な問い掛けなの。うん、やっぱり貴方は鋭いの、御鏡悠夜。その直感力はお母さん譲り、かな？」

「……は？」

今、目の前の存在は何と言った？ お母さん譲り、だと？

「いや、ちょっと待てよ。何でアンタがオレの母親を知ってんだよ」

「ああ、それは簡単なの。だって、神代は貴方のお母さん　御鏡
悠の親友だし」

目の前にいる存在　一人称を信じるならばミヨ　は、余りに
も衝撃的な言葉を吐きやがった。

「親、友……？」

（いや、いやいやいや！　こんな訳の分からないモンと親友とか、
アンタ何者だよ母親……！！）

明らかにミヨは人ではない。いや、そもそも人間如きが形容出来る存在とは思えない。こうして対峙するだけでその絶対的な存在感を感じ取れる。そんな出鱈目と親友など、何かの間違っているかと思えなかった。一体、オレの母親はどんな人間だったのか。

「あ、ちなみに貴方の悠夜って名前を考えたのも神代なの」

「しかも名付け親かよ！？」

意味が分からない。何なのだ、この唐突なイベントは。この衝撃的事実のオンパレードは。オレは何かフラグを立ててしまっていたのだろうか？

先ほどとは別の意味で頭が痛くなる中で、このままでは埒が明かないと考えオレは言葉を続ける。

「あー、オーケー、分かった。納得はしてねえし、理解も出来ねえけど、一先ず置いておくぜ？　この謎空間を作ったのはアンタで良いんだよね？」

「うん、そうなの。御鏡悠夜が黒塚ハンナと一緒に二ノ宮健介に出

会って、別れた後に黒塚ハンナから学園に行つて魔女について調べろつて言われて、黒塚ハンナのアパートに帰つてすぐに不貞寝した後、その夢に介入して今に至るつて事なの」

「説明乙、とでも言えば良いのかよ。あー、まあ取り敢えずサンクス、状況整理する手間が省けたぜ」

今ミヨが言つた通り、あの後オレはハンナのアパートへ戻り、特に会話もする事なく眠りについた。ちなみに、ハンナは和室にある自分の布団で、オレはリヴィングのソファの上でそれぞれ眠つた為、特に問題は起きなかつた。

ちなみに、ソファで寝かすような無礼な真似は出来ないなどと言い出したハンナに対し、有無を言わずソファで眠つた形になる。

(流石に大人げなかつたか……後で謝つとくかな)

「んで、夢に介入とか訳の分からん理屈を持ちだすつて事は、だ。アンタもあれか、ハンナが言つてた一般人には秘匿されてる神秘つて奴なのかよ？」

「おお、何という柔軟性。まさかこの状況でそこまで冷静に判断出来るとは思わなかつたの。流石に世界のバグは色々とぶつ飛んでるの」

おどけた調子で目を丸くするミヨに対し、どういつ反応を返せば良いのか悩みつつも頭を掻きながら言葉を返す。

「いや、まあ、魔女なんてモンがいるし、散々に出鱈目な現実を見せ付けられたしな。納得はし辛いし、理解も出来てねえけど、そういうモンだつて受け容れる事自体は、まあ出来るだろ」

それにしても、今ミヨが言った”世界のバグ”という単語。どうにもオレにとって重要な単語だと思われるのだが、突っ込むべきなのだろうか？

(言葉だけを見るなら、バグってのは欠陥・異常だろ。世界のつて言葉が面倒だな、世界つての単語の定義がまず分かんねえ。文字通りに捉えるなら、この世界における欠陥・異常、って事、か……？)

確かに、オレは明らかに一般的な人間の水準を大きく逸脱している。例外的な存在、という意味ではあながちバグという言葉も間違っていないかもしれない。

いや、むしろピタリと当てはまるのではなからうか。何よりも雄弁にその考えを裏付けるのは、本能的な部分。

ようやく自分を正しく形容する言葉を見つけたかのような、そんな感覚。

「んー、考える事自体は悪くないけど、あんまり考えすぎるのは良くないよ？ パーンって頭が破裂しちゃうの、その内」

「ちよっ、比喻が怖えよ！ つかさういうのやめるよ、アンタみてーな意味不明な存在にんな事言われると不安になるだろっか！」

「むう、意味不明とは酷いの。神代が世界で、世界が神代。神代はこの世界の何処にでもいて何処にもいない、世界を夢見る神様なの…… ああ、まあ、理解した。よく分かった、取り敢えずてめえがオレの理解の範疇に収まらないってのは理解した」

バグ云々は一先ず置いておくとして。どうやら彼女(？)自身について問答するのは無意味らしいと分かった所で、さて何を聞くべきだろうか？

「あー、んじゃ、そろそろこれ聞いとくか。何でオレの夢に出てきたんだ？ こんな大仰なモン用意したからには何かあんだろ、目的」
「あはっ、話が早くて助かるの。取り敢えず、貴方、このままだと死ぬの」

それは、余りにも唐突な宣告だった。これまでの親しげな態度を一転させた、色の落ちた表情。その身に纏う神秘的なまでの威圧感と合わさり、知らず気圧される。

初めて眼前の存在が心底から恐ろしい、と感じた。

「……、ワケ、分かんねえよ。いきなり何だよ、死ぬとか」

「言葉通りなの。貴方はこのままだと、死ぬ。だって、貴方は所詮人の限界を越えただけのニンゲンなもの。そもそも根底の作りからして人間と異なる魔女の争いには、絶対についていけない。勝てない合い打てない戦えない、そもそも勝負なんていう言葉すら成立しない。土俵が違う、格が違う、次元が違う。どれだけ賢しちに立ち回っても魔女がほんの少し力を発揮しただけで消し炭になる。それが 貴方。御鏡悠夜っていう、弱者なの」
「ッ」

弱者、と言われ意識が白熱しかけるも、すぐにその熱は収まる。

なぜなら、言われた言葉に何一つ偽りがなかったから。

「そう、だな……」

忘れられる訳がない。明らかに手加減されているにも関わらず、何一つ抵抗出来ぬ間に撃ち伏せられたあの時の事を。アリスとハン

ナ、人知の及ばぬ戦闘風景を。

「ねえ、どうして勝てるなんて思うの？ 戦えるなんて思うの？ 思い切り手加減された上であんな無様を晒して地面に這い蹲らされて、自分より年下の女の子に見下されて足を舐めさせられそうになつて助けてもらつて縋つて甘えて護つてもらつて、情けない限りなの。ねえ、それでどうして勝てるなんて思うの？」

「……、」

その言葉にもまた、偽りはなく。

いきなり現れてボロクソに言われてそれでも尚彼女に怒りが沸かないのは、彼女の持つ雰囲気以上に、全てが真実だったからだ。

だから、そう。今感じているこの怒りの矛先が向いているのは、自分に対して。何一つとして偽りが無い無様な状況を招いてしまっている、自身の弱さ。

だが。

「確かに、アンタの言う通りだ。オレは弱い。護ってもらふ事しか出来ねえし、加えてその護つてくれる奴すら裏切つて狡い手を使うしか出来ねえ屑野郎だ。ああ、自分でも反吐が出る。……でもよ」

例えそうだとしても。

「オレには、護りたい奴らがいる。オレ以外にソイツらを護ろうつて動ける奴がいねえ。魔女とかいう既知外が殺し合いしてて、それに巻き込まれるかもしれないっつー今の状況で、アイツらを曲がりなりに護れるのはオレくらいしかいねえんだよ」

オレよりも強く、オレよりも巧く立ち回れる奴がいるなら、或いはソイツに任せても良いのかもしれない。その手助けをする程度で良いのかもしれない。

「けど、オレはご都合主義なんて信じちゃいねえからな。正義のヒーローが現れて助けてくれるなんて有り得ないし、ただ祈ってれば何も知らなければ巻き込まれないとか、んな保障は何処にもねえ」

思い出す。余りにも唐突に起き、余りにも呆気なく終わりを迎えた最悪の過去の情景を。それによって損なわれてしまった大切な女の事を。

ミヨの目を見据え、告げる。

「だからオレは足掻くんだ。土俵が違おうが格が違おうが次元が違おうが、それを引つ繰り返してアイツらを護るって、もう決めてんだよ。その為ならどんな狡い手でも使うし、何でも利用してやるってな」

オレの下らない見栄やプライドを捨てる事で少しでもアイツらを護る事に繋がるなら、幾らだって捨ててやる。

その程度の決意、ハンナに頭を下げた時点でとっくに出来ているのだ。

「どう思われようが構わねえ、屑と言われても下衆と言われても知るか、んなモン。それがオレの決意だ」

ミヨの意図は分からない。分からないからこそ、オレは自分にや

れる事、自分に言える事を成すだけだ。

ガラス細工の如くおよそ感情というモノが感じられず、それでありながら怖気がするほど惹きつけられる荘厳な金銀妖瞳。それを、逸らさず引き摺りこまれず、しっかりと己を以って睨みつける。

生まれた沈黙は一分のようにも、一時間のようにも思えた。あるいは久遠に匹敵するのかもしれない。

なぜなら此処は夢で、そして眼前にナニカが造り出した摩訶不思議な空間なのだから。

「……ん、そっか。どうやら嘘はないみたいなの」

やがて、何処か安心した風な声と共にミヨは吐息を漏らした。それと同時に彼女の表情には色が戻り、先ほどまでの無邪気な様子を見せる。

「あはは、うん、ちょっと試させてもらったの。ごめんね、無駄に挑発するような事を言って」

「いや、構わねえよ。実際、何一つとして間違っただけだから」
「……うん。本当に良い子に育ったんだねえ」

苦笑と共に吐いたオレの言葉に感じ入るモノがあったのか、ミヨは感慨に耽るかのような表情になる。

(母親の親友、だったか。ンで以って名付け親なんだから……)

色々と思う所が、あるのだろう。

オレとしては、そもそも顔すら知らない母親の事など欠片も興味が持てないのだが。

生まれ落ちたその日から、オレを育てて来たのは国の研究施設で傍にあつた温もりは、双子の妹であるアイツだけだったのだから。

「で、だ。言いたい事はそんだけか？ 無けりやさつさと解放して欲しいんだがな」

「あはは、それはむしろこっちの科白だと思っけどな。貴方こそ、質問したい事はないの？ 神代が何なのかとか、貴方の母親の事とか」

「いらねえよ、別に。何か知らんが、まあ超存在だつてー事は分かる。それ以上は何聞かされても理解出来ねえだろうし、な。いや、アンタみたいな規格外と親友の母親に関する疑問は幾つもあるけどよ……正直、故人で 他人だからな」

今更知りたいとは、思わない。

「そつか。良い子に育ったけど、同じくらい捻くれちゃってる気がするの。そっちは父親譲り、かな？」

「って、何だよアンタ、オレの親父に関しても何か知ってんのかよ」

母親を孕ますだけ孕ませてトンスラかました、オレが知る中でも男として最低の部類に入る男。

当然の如く会った事がなければ顔すら知らず、オレにとっては母親以上に赤の他人である。

「うん、まあ、知ってるって言うか、二人を引き合わせたのは神代

だし。あ、それと誤解してるかもだけど、貴方の父親は責任逃れした訳じゃないの。二人は誰よりもお互いを愛していたし、好き合っていたの。ただ、貴方の父親　かたつきくろくちや型月空夜には離れなきゃいけない理由があつて、むしろ貴方の母親である御鏡悠と生まれて来る貴方たちを護る為に、離れたの」

「ほー、何つーか、また波乱万丈なドラマがありそうな話だなあオイ。いや、やっぱり興味はねえけどよ」

最低男というレッテルは、剥がそうと思うが。

(あと、オレも人の事は言えねえけどよ……流石に名前が厨二過ぎじゃね?)

「んー、んん、そつかあ。じゃあ切り口を変えて、この魔女同士の殺し合いについて　とかでも良いよ?」

「は?　何、教えてくれんのかよ。オレはまたてつきり、お約束的にそれは自分で調べるとか言われると思って聞かなかつただけだよ」

「神代も最初はそのつもりだったの。だけど余りにも貴方が無欲過ぎるから、サービスしてあげても良いかなって」

「……、……なあ、もしかして、とは思うが」

さつきから観察し続けて気付いたのだが。

「アンタさ、もしかして構って欲しいのか?」

途端、変化は劇的だった。

「べ、べべ別にそんな事ないの!　久しぶりにまともにと話せて嬉しいなとか、あの子の息子なんだからもう少し可愛がってあ

げたいなとか、出番増やしたいなとか、そんな事はこれっぽっちも思っていないの！ ほ、本当なの！！」

ギャグなのではないかと思うほどに慌てふためくミヨを見て、先ほどの超然としたイメージが崩れていく音を聞いた気がした。

「そっか、ぼっちは辛いよな……良いぜ、付き合ってやるよ」

「ぼっち扱いなの！？ しかも神代、もしかして親友の息子に同情されてる！？」

えうー、と泣き出してしまった童女をよしよし、と慰めながら、どうしてこうなったんだろうなあ、オレのせいか、と思わず遠い目をしてしまった。

閑話休題。

「ぐすん……それじゃあ、改めて聞くの。この魔女同士の殺し合いに関して、何か聞きたい事、ない？ 一つまでなら答えてあげるの」

結局教えてくれるんだな、とは言わずに、素直に問いを投げる事にした。

「んじゃ、質問だ。答えるのが無理なら答えなくて良い。オレの護りたい奴らを護るには、どう行動すれば良い？」

その瞬間、ピタリと神代の動きが止まった。

「ふうん、そつか。凄いね、悠夜は。ここでその質問が出来るなんて、大したモノなの」

剣呑な、それでいて何処か面白いような表情で微笑む神代。既に先ほどまでの残念さは、存在し得ない。

「上手い聞き方って言うのもそうだけど、恥もプライドもなくそんな質問が出来る所なんて、特に」

「ハッ、言っただろ。アイツらを護る為なら何でもやるってな」

この状況が千載一遇のチャンスである事は間違いない。

「だったら、それを利用しねえ手はないだろ、常識的に考えて」

「……。良いね、うん。貴方は凄く良いの、御鏡悠夜。悠久の夜に御鏡となるモノ。その在り方に敬意を表して、“ナイトクェーン魔王”の神代が攻略法を教えてあげるの」

嫣然と微笑み、その白魚のような手をオレの頬へと伸ばし、慈しむように撫でた後で。彼女はゆっくりとその口を開いた。

「まず、最初に」

*

覚醒は、耳に届く規則的な包丁の音と鼻を擽る香りによってもたらされた。ゆっくりと瞼を開けた先に映るのは、記憶にない天井。

「知らない天井だ……とでも言えば良いのかね」

呟きながら、オレは伸びに合わせて上体を起こす。当然の事ながら此処が黒塚ハンナの部屋であり、自分がソファで寝ていた事も覚えていない。

そして、夢で告げられた言葉も。

「……やれやれ。何て言うか、アレだな。酷いチートをした気分っつーか、攻略サイト見ちゃったぜ的な気分だな」

教えられた知識の豊富さと利便性に頭を掻きながら、オレはキッチンに立っているハンナに対し声を掛ける。

「おいーっす、今起きたぜ……って、もしかして朝飯作ってんのか？」

「あ……おはよう、御鏡悠夜。そう、今朝食を作っている。もう少しで出来るから待っていて欲しい」

「あいよ、了解」

手をヒラヒラさせながら答えたオレに対し、ハンナが戸惑いを見せているのは 恐らく勘違いではない、のだろう。

(まあ、昨日の雰囲気は最悪だったしなあ……)

ギクシャクした上にハンナが妙な義理堅さ 曰く、護衛対象であり客人であるオレをソファで寝かす事は出来ない、自分がソファで寝る云々 を発揮し、それに対してこちらが大人げない反応をしてしまった事もあり、気まずいと彼女が感じていてもおかしくない。

オレとしては、一晚経って反省した上に神代から聞かされた情報もあり、既に隔意は消えているのだが。

『まず、最初に、黒塚ハンナとは仲良くなっておいた方が良いの。好感度が高かろうと低かろうと、彼女が命に変えても悠夜を護るのは確定事項だけど 仲良くなればなるほど、彼女が悠夜の為に振るう刃は疾く、鋭くなっていくから。結果的に悠夜の生存率を高める事にも繋がるの。裏切るかどうかに関しては……正直どっちでも良い、かな？ 保険を用意したいなら、って感じ』

神代の言葉が嘘の可能性も考えたが、その可能性はない、と思う。直感だが。それに、何も彼女の言葉を盲目的に信じる訳でもないのだし。

とにかく、共闘する上でも仲が良いに越した事はあるまい、という判断だ。気になるのは、どうにもハンナからは契約以上の何かを感じる事なのだが 彼女がそれを見せない以上、こちらが察する事は不可能だ。

(だからこそ、信頼は出来ねえんだけどな)

「おつ、新聞取ってんのか。読んでても良いか？」
「構わない。こちらはあと五分ほどで出来る」

そんな会話を交わしてから、きっちり五分後。

オレとハンナは、リビングの机の上に並べられた朝食を、向かい合う形で食べていた。

「うおっ、普通に美味しいな、これ。つーか、たかが味噌汁如きがこんなに美味くなるモンなのか」

「そうでもない。恐らく味付けが舌にあっただけ。まだまだ未熟。それにたかが味噌汁」

「いや、充分だと思うけどな……」

ちなみに、メニューは白米に味噌汁、焼き魚という定番と言えば定番のメニューなのだが、朝食などというモノを久しく食べていなかった身としては、感動してしまう美味さだった。もちろん、ハンナの腕と味付けがオレ好みというのも感動した大きな理由だろうが。

それにしても、何と言えば良いのだろうか。頬を朱に染めながら視線を逸らし、早口に贅辞を否定するその様子は。

（やべえ……何だ、この破壊力。いや、つーか可愛過ぎるだろ）

昨夜以上に、普段の無表情とのギャップでオレを追い詰めるのだった。ただでさえ、元々の素材が美貌と言って差し支えないレベルなのである。周りに今までいなかったタイプという事もあり、かなり新鮮だった。

「そっぴやさっきの新聞にこんな記事があつてよ」

そんな自分を誤魔化す為新たな話題を振りながら、オレは食事の後に来るであろう作戦会議の事から締め出すのだった。

.....

第一章・5（後書き）

謎の童女（笑）登場。ちなみに作者はゲームは攻略サイトを見ながらやる派です。

それにしても、ようやく次から学園に話を移せるんだぜ。やっとスパーハンナちゃんタイムがこれで終わりですね。長かった……（あ

第一章・6（前書き）

本当にギリギリでしたね。つか、短い……。うぐう。一応、毎回9000字ちょいは目標にしてるんですが、今回は約7000字。頑張らないとなあ、

第一章・6

「さて、そんじゃあ行く前に作戦の確認しとくか」

朝食を食べ終え一息ついた後、耳かきで耳掃除をしながらオレはハンナに向けてそう告げた。

ちなみにこのハンナのアパートから高校までは三十分程度の距離であり、朝の目覚めが早かった事と相まって時間には余裕がある。

そうでなければ此処まで余裕綽綽でいる筈がないのだが。

「ん、確かにそれは必要。その事に異論はない。……ただ、その」

「お？ どうかしたか、ハンナ」

彼女にしては本当に珍しく、歯切れ悪く躊躇いがちな調子で言葉が発せられる。

ある種、予想通りの言葉が。

「その、昨日とは随分様子が違う。正直に言えば驚いている。どうしてか分からなくて、戸惑っている」

「……、そりゃ、そうだよな」

確かに昨日まで不機嫌丸出しで不貞腐れていた人間が、翌日にけるとした顔で自分から積極的に動くような態度をとれば、不審に思われても仕方がない。

仕方ない、のだが。

(さて、どう説明したもんかなー。一応、口止めされてるんだよな)

『あ、ちなみに神代の事は魔女たちには絶対に内緒ね？ まあ、もう大方の予想はついてると思うけど、魔女たち　って言うより、ある程度裏社会に関わってる人間全てにとって神代は影響力を持つ存在だから』

『おーおー、随分大きく出たなあオイ。いや、アンタの意味不明な存在感からして正しいんだろうけどよ、流石に自賛し過ぎじゃね？』

『そうでもないの。神代の存在は裏社会の住人にとっては禁忌に等しいの。ヘンリー・ポッターに出てくる、名前を呼ぶと殺されちゃうあの人みたいな感じなの、リアルで』

『マジか……名前呼んだだけで心臓麻痺になって死ぬアレ並みとか、えっ、流石にヤバくね？』

脳内で再生されるのは、夢の中で交わされた会話の一部。余りにも出鱈目な存在である神代に関する疑問や考察はさておき、絶対とまで付けるのだ、言わない方が賢明というものだろう。

今この時も、どこかで監視されていてもおかしくないのだから。

「ま、アレだ。一晚寝て頭が冷えたって所だ。何っーか、ほら、オレの立場的には保護するから軟禁させてもらっ、って言われて覚悟決めてたのに、あっさり前言を翻された形だろ？　それでまあ、色々とムシャクシャしちまった。悪いな、オレが未熟なせいで空気悪くしてよ」

この話題に関してはこれで終わりにしようや、と、そんな意志を言外に込めた言葉は、しかし。

「貴方が悪いという理屈はおかしい。むしろこちらが殴られても文句は言えない立場。護ると言っておきながら利用しようとしている。許してもらえない道理はない。ましてや貴方が未熟なんて事は、有り得ない」
「むう……」

ハンナには、届かなかったようだった。どうやら黒塚ハンナという魔女はオレが思っていた以上に頑固らしい。何が気に障ったのか知らないが、必要以上に謙りこちらを持ち上げようとしている風を感じる。

正直、その真つすぐな信用　否、信頼が何処から来るのかが全く分からない。

（悪い奴じゃないっつーか、むしろ良い子ちゃん過ぎるといっつか真面目が過ぎるといっつか……つか、言葉的に本意じゃないっぽい、んだよな。依頼内容っつーか雇い主？　が影響してんのかね）

正直に言えば、どう接すれば良いのか未だに決めかねているのが現状だった。意図は明白、想いも真実、にも関わらず理由が分からない。見えない。知り得ない。だからこそ　端的に言って、厭わしかった。

悪い存在ではない事は間違いないのだが、にも関わらず信頼出来ない理由は何に起因しているのか。

「これは全てこちらの責任。自分の価値を自分で下げるような真似はやめて欲しい。私は貴方にそんな真似をさせる為にいるのではない」

紡がれ続ける言葉と、真摯な色。それらを推し量るようにハンナを見据え続けたオレは、ふと一人の少女を思い出した。

一之瀬神楽。オレに一目惚れしたと、振り向いてもらえなくても好きでいたいと、そう告げた彼女。

別にハンナがオレに惚れているなんていう頭の悪い考えが浮かんだ訳ではない。ただ、真摯で真つ向ストレートな在り方という点において近いモノを感じたのである。

そういう意味で言えば、最初に浮かんだのが神楽だというだけで、比較対象として挙げるなら二ノ宮健介の友情や一之瀬葵の慕情などでも良い。

兎にも角にも、そんな彼らとハンナの真つすぐさを比較した時に、突如電流めいた気付きが自身の中で生まれた。

否、気づいてしまったと言うべきか。

ハンナの瞳に、オレが映っていないという事に。より正確に言うなら、オレを通して別の何かを見ているという事に。

御鏡悠夜という個人をストレートに見ているアイツらに対し、黒塚ハンナはオレに誰かを重ね、その誰かをストレートに見ているの

だ、と。観察し続けてようやく気が付いた。

「ああ……なるほど、な」

厭わしいとは、つまりそれ。黒塚ハンナにとって御鏡悠夜という個人はどうでも良い存在であり、御鏡悠夜に連なる何か彼女が真実信仰するモノであるという、その事実。

極論、その何か傍にありさえすれば、次の瞬間にでもオレは彼女にとって路傍の石と化すという大前提。

（そりゃ、信頼なんざ出来るワケねーわな。不安を感じるワケだ）

今こうしてオレを護ると誓っている黒塚ハンナは、その実オレを殺す存在へと唐突に変わる可能性を秘めているのだから。

例えば、その”何か”がオレを殺せと命じたりしたら。

例えば、ハンナが重ねている何かを裏切るような行為をしたら。

（おいおい、神代ちゃんよ、冗談キツイぜ。自分を見てない相手に好感度稼げってか？ izzどどう転ぶか分かんねー相手に媚びろってか？）

精一杯引きつった感情を表に出さぬようにし、オレは笑みを張り付ける。

「ま、取り敢えずお前がそう言うならそれで良いさ。今は問答よりもこれから具体的に何をするか、だろ？」

「……っ。確かにその通り。ごめんなさい」

「良いつて良いつて、気にすんな」

(オレも、今気付いた事は取り敢えず流しといてやるからよ)

とは、勿論口に出す事はなかったが。

「まず、だ。オレはいつも通り高校に通う。んで、校内で何か起きてないかを調べる。不審に思われないようにな。欠席が目立つだとか、行動が奇妙とか、まあとにかく普通と違う部分を探りや良いんだよな？」

「ん、そこは貴方の裁量に任せる。ただ、無理だけはしなくて良い。負担が貴方の許容量を超えるなら放棄してもらっても構わない」

それを言うのと台無しじゃね、などと思いながらも口には出さず、苦笑しながらハンナの言葉に頷く。

「あいよ、了解。つかお前はどうすんだよ、ハンナ。やっぱ街に出て魔女を探すのか？」

ふるふる、と首を振ったハンナは、既に答えが出ているらしく滑らかに言葉を紡いでいく。

「昼間に魔女を見つける事は極めて難しい。魔力を消して一般人に擬態されれば探す術がない。学生という社会的ステイタスを持つ身であるなら尚更。だから昼間は探索ではなく場を整える事に集中する」

「場を整える？」

「そう。予め戦場となる場所を想定し、また、夜の間に他の魔女たちが施したであろう術式を破壊する。他にも情報屋を伝手に少しで

も情報を集めたり……地味だけど効果的」
「なるほど。……ん？」

ハンナの言葉に相槌を打っていたオレは、奇妙な違和を感じた。
何かを見落としているような、そんな感覚。

「そうして別行動を取って、下校時間になり次第合流して結果報告
そして貴方にはこのアパートで待機してもらって私が夜の探索に出
かける」

「それが良いだろうな。オレみたいな足手まといは拠点に置いてお
く方が」

「それは違う。単純に魔女と闘いながら貴方を護るだけの力が私に
はなくて、それならば万全の護りが施されたこのアパートにいても
らった方が安全だから。決して貴方が足手まといな訳ではない」
「……、」

強い否定。その語調の強さに、抱いた違和を含め思考が飛びかけ
る。流そうと思っていた感情が、再燃する。

（あー、何っーか、本当に勿体ねえな。残念っーか）

とは言え、それが真実自分に向けられていたなら、どれほど嬉し
かった事だろうか　などと考えるのは、恐らく無為でしかないの
だろう。

だからこそ、そんな虚しさを振り払う為に問いを発する。

「一つ聞きたいんだが、そんなにこのアパートの護りって奴は万全
なのか？　魔女にバレる可能性、その結果襲撃される可能性、そう
いうの諸々想定した上で問題ねえのかよ？」

「大丈夫、問題ない。この部屋には最高レベルの隠蔽術式と迎撃術式が仕掛けてある。バレる事は有り得ないし、仮にバレても許可なきモノが立ち入った瞬間に粉微塵に砕け散るようになってる」
「フラグ乙、って奴な気がしねえでもねーけど、ま、そこは信じておくか」

フラグ？ と小首を傾げて呟くハンナに小動物めいた印象を抱きつつ、何でもねえよと返しながら一息つく為に手洗いへと立ち上がったオレは。

「……あ」

改めて椅子に座るハンナを見て、違和感の正体に気付いた。強く触れるだけで折れそうなほどに華奢で、中学一年程度にしか見えないうその容姿を見て。

「ハンナ、一つ聞きたいんだが、良いか？」

「？　どうかした？」

「いや、何つーかだな、お前って今まで調査したりする時はどうしてたんだ？　学校には行ってねえんだろ。昼間とかの時間が最大限に浮く訳だが……」

「……？　この殺し合いが例外なだけで、本来魔女が雇い主から命じられて活動を行うのは夜。殺し合いが始まる前までは、昼はやる事がないからアパートで読書などをしていた」

その言葉を聞いて頭を掻くオレ。どうしてそんな反応をするかと言えは、自身の直感が正解である可能性が強くなってしまったから。

「もしかして、今まで昼間に外に出る事ってなかった、とか？」

「その通り。魔女同士の殺し合いなど本来は起こり得ない。そして要人警護や暗殺に必要な工作はエキスパートが整える。だから昼間に活動する事はなかった。ん、確かにそう言った意味では経験が不足しているかもしれないけど、少なくとも他の魔女に後れを取らないだけの自信はある。安心して欲しい」

「いや、安心して欲しいって言うか、何て言うか……」

どうやら直感が正しかったらしいと、彼女が重大な事実気付いていないと、悟ってしまったが故に、オレは悩まざるを得なかった。

彼女が気付いていないらしい事実を、教えるか否かについて。

オレは……。

「少し様子が変わ。歯切れが悪い。何か問題でも？」

「……いや、何でもねえ。ちよいと考え事してただけだよ」

ハンナの不思議そうな問い掛けに、気付けばそんな反応を返していた。

(いや、まあ、流石にプライドを大きく傷付けるだろうし、言えねえよな)

どう見ても中学生にしか見えないお前が昼間に街のあちこちをうろついていたら、あからさまに怪しいだろう、などという言葉は。

その怪しさを辿られ他の魔女にお前の存在が露見するのではないか、などという言葉は、きっと彼女には必要ないだろう。ない筈だ。

(ないと良い、なあ……。つか、流石に勘弁だぜ、んな事も分から

ねえような一般常識に欠けた奴に命を預けるなんてのは)

或いは教えた方が良いのかもしれないが、時計を見れば時間に余裕がなく、また魔女の争いに素人が口を出すのは野暮だろうという考えもあり、オレは言わない事を選択した。

もつと言えば、その程度の常識は理解した上での行動なのだと、信じたいという気持ちもあったから。

「ま、校外での調査は任せた。取り敢えず学校行く前にトイレ行くから、その間に必要なモンがあったら用意しといてくれや」
「分かった」

頷く仕草を確認したオレは、胃の痛みを感じながら手洗いへと向かった。

「いや、しかし、何つーか……やっぱりぼっちだったんだな、ハンナ」

そんな、非常に失礼な思考を重ねながら。

*

「そして高校に到着、と」

「? どうしたの、御鏡くん。物凄く感慨深そうな独り言だけど」
「気にすんな、状況整理って奴だ」

「そ、そっか……。……。？」

ハンナのアパートを出て、待ち合わせ場所の変更メールを葵へと送り登校途中で合流し、他愛ない会話を交わしながら歩いて来て、そして到着した校門前。

昨夜の非日常から一転、余りにもいつも通りで日常的な今に強い嬉しさを感じ、勢い余って万感の独り言がこぼれ出てしまったただけの話である。

「いや、本当何っつーか、ヤバいな。うん、オレ今すげー幸せだわ」「え、ええ！？ し、しし幸せってその、わっ、私と一緒にいてって事！？ あわわわ……そ、そんな、照れるよぉ」

……勢い余って余計なフラグを立ててしまった気もするが、無視。それが気にならないほどに、オレは今、幸福感を噛み締めていた。

大切な友がいて、その友と他愛ない会話で盛り上がれるいつもの通学路。何一つ変わっていない日常の情景が、自分でも驚くほどに心に深く響いていた。

同時に痛感するのは、昨夜の自分が想像以上に追い詰められていたという事実。こんな何気ない時間で泣きそうになるほどに、昨夜の出来事　魔女たちの殺し合いは苛烈にオレを侵食していたらしい。

そして改めて思う。今傍にいるのは葵だが、彼女や健介、デート以来会ってない神楽、そんな彼らがいるこの学園は何があっても侵させはしない、と。

（まあ、まだ何も起きてねえように見える現状、感情が先走ってる

感はあるが……関係ねえ。オレは誓うぜ)

自分自身の、魂に。この日常の象徴である場所を、大切な奴らを、必ず護るとオレは心の中で誓った。

「うしつ、行くぜ葵！ ボサツとしてると遅刻だぞーっ」

「え、わわっ、一緒に行くから置いてかないでっ言うつか、御鏡くん何か凄くテンション高いよ!？」

「ははっ、気にすんじゃねーよっ。今日はそういう気分なんだよ！」

「、そっか！ うんっ、そんな気分の日もあるよね！」

オレが浮かべた笑顔に対し、向日葵のように可憐で明るい笑顔を返してくれた葵と共にオレは校門を潜った。キャラが若干壊れているのは、この際多めに見て欲しい。

何よりも尊いこの瞬間を、大切にしていたいから。

「おお！ 御鏡に一之瀬嬢ではないか、今日も随分と仲が　　っと、何だどうした、随分と機嫌が良さそうだな御鏡」

「おっ、健介じゃねえか！　　ちようど良い、一緒に教室まで行こうぜ！　　葵も良いよな？　　あ、勿論コイツがおかしな事やり出したら速効でぶん殴るから、その点については安心してくれや」

「あ、えつと、うんっ。御鏡くんがそう言うなら、多分大丈夫！」

全然問題ないよっ」

「いや、あの……俺の扱いが悪いような気がするのだが。むっ……だが此処まで調子の良さそうな御鏡は久しぶりだな。まあ、良い。不穏な発言は聞き流してやる事にしよう」

校門を潜り生徒玄関へと向かう途中で遭遇した健介も捕まえ、都合三人のパーティとなったオレたちは会話を交わしながら教室へと

向かう事になった。

「いや、それにしても一体何があったのだ、御鏡。正味な話、そこまで調子の良さそうと言うか良い感じにエンジンの入ったお前は随分見ていなかった気がするのだが……」

「ははっ、気にすんじゃねーよ。嫌な出来事の後に嬉しい事があった、そんだけだよ」

「嫌な出来事……。って言うか、えっと、二ノ宮君？ 二ノ宮君って、御鏡くんと同じ中学なんだよね？ 随分見てなかったって事は、前の御鏡くんはいつもこんな風だったの？」

「ふむ。まあ、そうだな。高校に入ってからデビューを意識したのかどうなのか、随分と空気が変わってな。ああ、昔の御鏡は確かにこんな奴だったぞ」

気後れを感じさせるも、自分から積極的に話し掛けに行く葵。それは彼女が知らないオレの過去を知りたい、という気持ちから出た行動なのだろう。あれだけ苦手意識を持っていた健介にこうまで積極的になれるのだから、本当に葵は良い子だと思う。

（まあ、後は、アレだな。そろそろこの二人にも多少は絆を作っついて欲しかったからな。結果オーライって奴か）

仮に何かがあったとしても、一人よりは複数名で行動した方が心持は良いに決まっている。特に健介の閃きや能力は目を見張るモノがある為、二人の仲が良好になるほど二人の安全度も上がるだろうという、

そんな気持ちから出た行動だった。

（まだ絆なんてモノが出来るには遠い上に、オレのいない所で二人

に何かが起こるっつー最悪の想定に基づいた結果だが……これが最善手の、筈だ」

「特にそうだな、愉快的エピソードを一つ披露するなら」
「そ、そんな事があったんだ。うー、それは見たかった、かも……」

絶妙にオレの暗黒期を外しながら、それでも葵の気を惹くようなオレの過去を話す健介。思考の途中ではあるが、話題選びや気遣いの気持ちも含め、本当によく出来た奴だなと感心する。

「おいおい、そりゃ違っつて。その時はだな」

そして。それからややあって思考に一段落ついたところで、二人の会話に加わりつつオレは二人と一緒に校内へと入っていった。

第一章・7（前書き）

またしても一日遅れ……んー、執筆スタイル変えてみましょうかね。

第一章・7

「ああ、そっぴや二人に聞きてえ事があるんだけどよ」

玄関で靴を履き替え、教室に向けて歩いていっている中。ちょうど会話にひと段落ついた隙間に、そんな言葉を滑り込ませる。

「? どうしたの、御鏡くん」

「ふむ。何だ、御鏡よ」

きよとん、とした表情で首を傾げる葵と、訝るような色を見せる健介。そんな二人に、「いや、大した事じゃねえんだけどよ、」と前置きしながら問いを投げかける。

「お前らさ、この学校について面白い話とかって知らね? 変わった話とか奇妙な話とか、まあ何でも良いから、とにかく他の学校にはない話とか」

「またいきなりだな。さてはその話を切り出すタイミングを狙っていたな?」

「えっと、どうしてそんな話を知りたがるの?」

「ああ、いや、健介は知ってるだろ、中学時代の後輩の華恋。アイツが霧桜狙ってるらしいんだけどよ、”霧桜って何か面白い噂話とかがありませんかあ”、とか言い出したんだよな」

(悪い、華恋、名前借りる)

「……ああ、なるほどな。ゴシップ好きのあやつめが言いそつな事だな」

はあ、と深くため息を吐く健介の反応が示す通り、華恋はこんな質問をしてもおかしくないパーソナリティを持っている。だからこそ名前を借りた訳なのだが。

ちなみに、目的は当然の事ながらこの学校に通っているらしい魔女へと繋がる情報を得る為である。

「ん、と……どんな小さな事でも良いの？」
「ああ、構わないぜ」

しばし考え込むように唇に指を当てていた葵は、やがて「面白いかは分からないんだけど、」という前置きから言葉を繋げる。

「この霧桜高校の卒業生、有名人が凄く多いんだって。名家の令嬢に大グループの跡取り、世界的に有名な芸術家やスポーツ選手、そんな人たちが異様に多いんだって。どこにでもある、普通の私立高校の筈なのに」

「ほー、そりゃ、初耳だな。何処からんな情報入るんだ？」

「えっと、友達から、かな。そういう関係から入って来る子も多いみたいだよ。有名人効果なのかな？」

「はあん、ミーハーな友達からってワケだ。つか、これっぽっちも興味なかったけどよ……そんなに多いのかよ、有名人」

「あ、うん。結構凄いよ。えっと、例えばサッカー日本代表の沈宮ターとか、世界的に有名なヴァイオリニストの舞坂そらら、花京院グループと双壁を成すって言われてる深海グループの現当主、他にもベストセラー作家の月上優奈とか、後は……」

その後も次々と挙がる名前は確かにどれもよく耳にする名前ばかりであり、両手の指では数えきれぬほどの量には思わず啞然としてしまった。

「いや、いやいやいや、え？ それヤバくね、つかもつと色んなトコで取り上げられてもおかしくねえだろ、霧桜」

「うん、そうなんだけど、不思議と何処の雑誌社や新聞社も記事を出してないんだよね。何でかは分からないけど」

あ、だからこれも不思議に入るのかな？ などと可愛らしく小首を傾げて呟く葵。

そのタイミングで、溜息を吐いてから今まで黙り込んでいた健介が口を開いた。

「ふむ。それは俗に言う霧桜七不思議の一つだな。アングラサイトにおいてかなり活発に議論されている事柄でもあるな」

「アングラサイトだあ？ ンだよそれ、そんなにやべえのかよ、霧桜って」

「ああ、その筋では有名な話だぞ？ 色々と不可解な事実が多い霧桜を称して、魔窟などと呼ぶ者たちがいる程度にはな」

「魔窟、って……」

二度目の驚愕。何なのだろうか、その余りにもクリティカル過ぎる単語は。

（魔の窟とか、どんな符号の一致だよ。これは魔女が関わってる証拠、なのか……？ いや、にしちゃあ随分規模がでか過ぎやしねえか？）

ハンナに聞く限り、魔女は己の存在を秘匿するモノらしい。そうであるならば、例えばアングラ限定とは言え自分の通う場所が大きく騒がれるような事などするだろうか？

(或いは、アングラの住人が魔女の想定以上に凶抜けてる、とかか……?)

「何つーか、やべえな。どーもオレが無知すぎたっばいか」

「いや、御鏡が恥じる必要はなからう。一之瀬嬢が学友から聞いたレベルならともかく、霧桜の七不思議なんぞ物好きか耳の聡い奴、相応のコネクションを持つ者、そう言った輩しか知るまいよ」

「んじゃあその物好き健介クンに質問なんだが、七不思議ってのは具体的にどんなモンがあるんだ？」

「うーん、アングラって聞くと怖い気もするけど、私も聞いてみたい、かな」

オレと葵、二人の言葉を聞いて片眉を上げた健介は、「此処にも物好きがいたか」などと呟き、口元を斜めにしながら言葉を続ける。

「まあ、とは言ってもオレも全てを知る訳ではないが、そうだな……例えば一之瀬嬢の話した有名人輩出率が異様に多い事。例えばマスコミ業界において最大のタブーとされて決して取り上げられぬ事。例えば設立経緯が余りにも不明過ぎる事など、だな。ああ、ちなみに霧桜が魔窟と呼ばれる最大の理由は」

一息。

「霧桜について調べていた人間が次々と失踪し行方不明となるからだ」

「……」
「……」

オレと葵は、共に絶句。自分たちが当たり前のように通っていた

高校がそれほど曰くつきであるなど、俄かには信じられなかった。

そんなオレの心を見透かしたかのように、愉快そうに健介は告げる。

「信じられないか？　だが真実だぞ、これは。だからこそオレはこの学園に来たのだからな」

「ハッ、何だそりゃ。物好きってレベルじゃねえだろ」

冷め止まぬ驚きの中、辛うじて発する事が出来たのはそんな言葉だけだった。とは言っても脳内では目まぐるしく思考が回転しているのだが。

（待て待て待て、行方不明になる、だと？　怪し過ぎるっつーか、何でそんな状況で欠片も騒がねえんだ？　霧桜がマスコミ業界でタブーにされているから？　いや、それにしても……。ああいや、今重要なのはんな事じゃなくてだな、）

その行方不明とは、魔女の仕業か否か。今この時において必要なのは、その情報。

「おい、健介。その行方不明っての、具体的にはどんな風に失踪するんだ？」

「ふむ。まあ、最初に行方不明になったのはアングラサイトに毎日必ず書き込みをしていた男でな。その男の書き込みが一週間途絶えた結果、同じくアングラサイトに出没していたその男のリア友が、連絡が取れないという事で彼のアパートを訪れた際に失踪が判明してな」

「前置きは良い、結果だけ言ってくれ」

「？　何をそんなに急いでいる。まあ、状況を言えば、だ　もぬ

けの空だったそう。その男がそのアパートに住んでいた痕跡など僅かたりとも残っていなかったそう。住民票なども含めあらゆる点から、な。無論、その後の足取りも完全に知られていない」

それは、果たして何を意味しているのか。

（情報の真偽は、まあ取り敢えず真だと仮定して……んな事が、幾ら人外の魔女パワーがあるとは言え出来るのか？ 公的機関へそんな簡単に手出し出来るのか……！？）

「ああ、ちなみに失踪した人間の数だが、まあネットという限りなく不誠実な世界におけるデータで良ければ 推定で五十を越えているそう」

「はあ！？ ちょ、ちよつと待てよ、そりゃネットだから不正確つつか嘘だらけの可能性は否定しねえけどよ、それでも五十！？」

もし仮にそれに近い数字で本当に失踪者が出ているのならば、それはもはや日本史上に残る一大事件と行っても差し支えない。余りにも出鱈目過ぎる。

（まあ、間違いなく五十は言い過ぎだろうが……ますます魔女単体で出来るレベルとは思えねえな。あ、いや、魔女を雇ってるつー雇い主の社会的ステータスによつては可能なの、か……？ クソッ、情報が足りねえ）

「ま、俺の知る事はこの程度だな。……余り首は突っ込まん方が良いぞ、この件に関しては。特にお前はネット関連など触り程度しか分からんだろう？ まあこの俺レベルともなればその程度の危険は

健介の一人語りが始まると同時、それまで黙りこくっていた葵がオレの制服の裾を引く。それは唐突な動きだったが、そうであるからこそ思考を中断させる良い刺激となった。

「ん？ どうしたんだ、葵」

「えっと、その……」

裾から手を離れた葵は、躊躇いがちにチラと健介へと視線を向ける。その仕草を見て、健介には聞かれたくない話であると把握。

「あー、健介」

「ん？ どうした、御鏡」

「先言つてくれねえか、ちとトイレ」

「……ふむ。ああ、構わんぞ。と言うより、ウチのクラスはすぐそこだからな。ならば此処で分かれる形で良いのではないか？」

確かに健介の言う通り既にオレ達のクラスがある階に到着しており、健介とオレはクラスが別。此処で分かれても何の不都合もあるまい。

「ん、そうだな。じゃ、また昼休みか放課後にでも会おうぜ。んで、お前こそあんまし首突っ込むなよ、猛獣の尾を踏む可能性だつてあるんだからよ」

「その忠告は余計だが、うむ、了解した。ではな、御鏡。一之瀬嬢」
手をひらひらさせながら去って行く健介を見送った所で、「うっし、これでオツケーだろ」と言いながら葵へと向き直る。

「さて、どうしたんだ、葵。廊下は人通りが多いからな、誰にも聞かれたくねえなら図書室とかに行っても良いぜ？」

「あ、ううん。ここで平気。ただ、もう少し端の方に寄らない？」
「まあ、良いけどよ」

オレは葵に言われるまま廊下の端へとより、窓際に立つ。教室へ向かう人の流れから離れたオレたちは恐らく傍からみれば目立つだろうが、会話にまで意識を向ける者などいるまい。

「あ、あのね、その……」

僅か身を寄せそつとこちらを見上げる葵。その表情にあるのは不安と好奇、後ろめたさ、それに。

（喜色……？）

そして。

「み、御鏡くん、その行方不明者の事が気になるんだよねっ？ お父様から、もしかしたら何か聞き出せるかも……！」

想定外の言葉が、その愛らしい口から飛び出した。

「、」

驚きは、二重に。葵の父から情報を得られるかもしれない点と、葵の方から積極的にそんな話題を振って来た点に対して。

「あ、あのね、私、お父様が電話で話してるのを偶然聞いて……その時に霧桜とか行方不明者とか、そういう単語も聞いてたって、今思い出したんだっ」

話す内に興奮して来たのか、頬を上気させて告げる葵。先ほどまでの後ろめたさや不安などは色を無くし、喜びの色合いが強く出ている。

耳と尻尾をパタパタさせている葵を幻視しつつ、事ここに至り葵の現状に得心がいく。

（なるほど、な。つまり、アレか。図らずもオレの役に立てる事が見付かって、それが嬉しいって事か……。しかも、あんだけ執着した話題だ。良い情報を持つてくれればその分の見返りがある、と葵が判断してもおかしくねえな）

打算と慕情が入り混じった葵の思考が手に取るように分かる。即座に把握する事が出来なかったのは、やはりオレの中で葵が真面目ちゃんの優等生、と言うイメージが未だにあつたからだろう。

「オーケー、少し落ち着こうか。確かにソイツはオレにとってすげえ嬉しい情報だが……良いのかよ、んな真似して。それ、自分の父親を利用するって事に繋がるんだぜ？」

「あ、うん。えへへ、大丈夫だよ、それに関しては。お父様、私と姉さんに関しては凄く甘いから、晩酌のペースを上げて酔わせちゃえば、きつと話してくれるよ。そうじゃなくてもこっそり書類とかを探れば……」

「違う、そう言う事を言いたいんじゃないで、だ」

余りにもあっけらかんと酷い事をつらつら語る葵に眩暈を覚えつつ、オレは再度言葉を変えて告げる。

「お前、確か父親がK県警察本部長って事にプレッシャーとコンプレックス持ってたろ、周りと自分の余りの境遇の違いによ。それプラス今までのお前を見てりゃ、普通に何の変哲もないイチ高校生として過ごしたいって思ってた事くらい分かる。そのお前が、だ。自分の父親の立場を利用するって言ってるんだぜ、今。本当に良いのかよ、お前はそれが、」

「良いに決まってるよ」

即答だった。いつそ清々しいほどに、何の装飾もなくあっさりとかい放った。

「だって、それは御鏡くんにとって凄く必要な事なんだよね？ 最初は確かに迷ってたけど、御鏡くんの顔を見てたらそんな気持ち消えてなくなっちゃった。だって、御鏡くん、凄くその事が知りたいって顔してたもん。そんな顔されちゃったら、私のちっぽけなコンプレックスなんてどうでも良くなっちゃうよ」

にこにことした笑顔で。その表情だけを見れば誰もが見蕩れ癒されるような表情で。余りにも重い言葉が、葵の口から流れ出た。

「……、」

これほどまでに葵の想いは深かったのか、と、戦慄にも似た気持ちでオレは立ち尽くす事しか出来なかった。

昨日感じ取った彼女のコンプレックスは、間違いなく根深いモノだった。それを如何でも良いとまで言い切るほどに、オレが大切だと言っのか。

（見誤った……ッ。これは拙い、流石に拙いだろ常識的に考えて。

何で葵のオレへの想いがこんなに深いんだよ!?)

「あ、ただ、一つだけお願いを聞いて欲しいかも。それさえ聞いてくれるなら、うん、何だってしちゃうよ、私」

その笑顔に、一点の曇りもなく。彼女はオレに情報を運ぶ事が出来る、何らかの根拠を元に確信しているようだった。

オレは。

(いや、ちょっと待て。テンパる前に、だ……お願いって何だ?)

「なあ、葵。そのお願いってのは何なんだ?」

「あは、秘密。だけど全然大した事じゃないよ。うん、本当に簡単な事だから」

どうやら葵はそのお願いとやらについて言うつもりはないらしい。それでも胡散臭さを感じる事が出来ないのは、やはり葵の放つ癒し系オーラとその笑顔が原因なのだろう。

オレは、葵の言葉に。

「それじゃあ、たの」

頼むぜ、と言おうとした直後。

脳裏で、昨夜夢の中で神代から告げられた二つ目のアドバイスが蘇った。

「それじゃあ、次は悠夜が取るべき二つ目の行動なの。悠夜が護りたいと考えている友達、悠夜にとっての日常　彼らの事情に対して、絶対に踏み込まない事なの」

「は？　何だよ、それ。何でそこであいつらの事情が絡んで来るんだ？」

「んー、悠夜も薄々感じてると思うけど、悠夜の日常はとても危うい均衡の上に成り立ってるの。ぶっちゃけ悠夜の友達ってみんな地雷持ちだし。流石にそれが何かまでは言えないけど、うん。踏み込んで連鎖的に嫌なフラグが立つちゃうから、友達とは今まで通りのスタンスでいてね。悠夜も、魔女に囲まれた今の自分に踏み込んで欲しくはないよね？」

「、……」

これは、御鏡葵の事情に踏み込む事にならないだろうか？

（考え過ぎなだけ？　神代の言葉を拡大解釈し過ぎ？　いやそもそも、あくまで神代の言葉は指針ってスタンスだったじゃねえか。それに縛られて良いのかよ。行方不明者に関する情報は、現状で魔女に繋がるかもしれない唯一の標なんだぜ？　それを不意にして良いのかよ、御鏡悠夜ツ。情報が入らず、結果として魔女の専横を許して、その拳句に健介や葵、神楽に被害が出たらどうするつもりなんだよ……！？）

特に健介は霧桜に関して調べているようだし、もし行方不明事件に魔女が関わっていたなら真っ先に狙われかねない。

そして、オレが幾度忠告しようといつが聞く可能性はゼロに近

い。三年の付き合いなのだ、それ位は分かる。

ならば、此处でオレが選ぶべき選択は。

「悪いけど、頼めるか、葵。つつても、無理はしねえ範囲で、な」

果たして、その言葉にはどれほどの威力があったのか。

少なくとも、目の前の恋する少女の笑顔を輝かせるだけの効果はあったようだった。

「うんっ。任せてっ、御鏡くん！ 私、絶対に調べて来るからっ」

「あ、ああ。頼むぜ、葵」

これが正しい選択だったのかは分からない。分からないが、

「それじゃあ、私からのお願いだよ」

オレは、

「もう二度と、夜遅くに出歩かないでね？」

瞬間、背筋にゾクツとした悪寒が走った。それは脊椎を丸ごと氷の柱と入れ替えられたような、心臓を凍てついた手で握り締められたかのような、怖気すら感じさせる悪寒。

何も変わっていないのに、目の前にいる葵の表情は何一つとして変わっていないのに、その笑顔が絶望的なまでに恐ろしい。

いや、違う。ただ一つ、先ほどとは決定的に異なる違いがその笑顔には存在した。

「今度は約束、破っちゃ嫌だよ?」

それは、瞳。ドロドロとしたこの世の闇を全て集めて煮詰めたような、ぐつぐつとした底なしの瞳。

喉がカラカラと乾く。頬が引きつる。オレの目の前にいるのは、一体誰だ? 何なのだ?

(これが、地雷、なのか……? オレが忠告を無視して踏み込み過ぎた所為、なのか?)

永遠にも感じられる時間は、けれど現実には数秒程度でしかなかったのだろう。

なぜなら更に次の瞬間には、既におぞましいまでの圧力は消え去っていたのだから。

「さっ、それじゃあ教室に行こうよ! もうすぐ先生が来ちゃうよ?」

「あ……お、おう。そ、そうだな」

はにかみながらそう告げた葵の様子は、オレがよく知る彼女のモノでしかなく。その立ち姿は、先ほどの絶望感が全て幻だったのではと思わせるに十分な愛くるしさを備えていて。

オレは、気の所為だったのだろうと思う事にした。

(いや、有り得ねえ)

直後にそれを否定する。

(そもそも、何で葵はオレが夜遅くに歩いていた事を知ってる？可能な限り人に出会わないルートを通って、人目は最低限しかなかった筈。その数少ない人目の中に、葵の視線があつた？ それとも葵の友人の視線があつて、その友人が昨夜か朝一で連絡をした？そんな可能性、どれだけあるってんだ！？)

明らかに不自然だった。今さっきの変容と言って差し支えない葵の様子も、告げられた言葉も。それらを見無視する事など、出来る筈がない。

何かがある。一之瀬葵には、オレが知らない何かが存在している。それは思慕の深さ云々ではなく、もっと根本的な部分において。

そう、知らなければ致命的になりかねない何かがある。

(つつても、今は迂闊に触れねえか)

恐らく神代の言っていた地雷とはそういう事。連鎖の最初の一步

目を既にオレは踏み抜いてしまっている。今ですら何が起きるか分からないと言うのに、そんな状況で更に地雷を踏みに向かう事など出来る筈がない。

（様子見、だな。何かあるのかは分かんねえけど、今までよりも注意しなけりゃいけねえか、これは）

魔女問題に続き頭の痛い問題が発生したと思うが、こればかりは仕方がない。完全なオレのミスだ。

（幸いなのは、神代のアドバイスが正しい確率が高まったって所で、葵が間違いなくでかい地雷を持つてるって把握出来た事だ）

そう思わなければやっていられない、という以上に最善を目指すという意志が渦巻いているからこそその思考。ポジティブ過ぎるかもしれないが、ネガティブになっても何も始まらない。

切り替えて、とにかく自分に出来る全力で事を成す。それだけ。

そんな風に頭の中で考えつつ、オレは葵と共に教室へと向かった。

第一章・7（後書き）

地雷フラグスイッチオン。ノベルゲームで言えば、二回ほど再確認の為の選択肢が出たにも関わらずゴーサインを出した、みたいな結果ですね。やる夫スレ的に言えばスナイプされた、とでもなるんですかねw

第一章・8（前書き）

ギリギリ一週間で更新wいや、本当、もっと余裕を以って更新した
いものですねww

「はいはい、皆さん注目して下さいね。この設問にはこの公式を当てはめれば簡単に答えが出ます。この公式はこの先もかなり重要になってくるので、色ペンとかで強調しとくと良いですよ」

当たり前障りのない会話を交わしながら葵と教室へ入ったオレは、他愛ない話題で朝のHRまでの時間を潰した。そして決まりきった言葉を担任がつつらつら述べるいつも通りのHRが終わり、現在。オレはノートを開きシャーペンを持ちながら、教壇に立つ教師の説明に耳を傾けるふりをしていた。

別に、この教師が嫌いという訳ではない。むしろ説明が簡潔で分かりやすく、人柄も温厚で親しみやすい良い教師だと思っている。だからこそわざわざ後で説明を聞き直せるよう、今も制服の胸ポケットにICレコーダーを録音状態に入れてあるのだから。

単純に、そう。今のオレにとっての優先順位において、彼女の授業は低いだけ。

(まあ、取り敢えず、これからどうするか、だな。行方不明者の件に関しては葵待ちで良いし、葵自体に関しても様子見するとして、もう一つ位は何か情報が欲しいんだが……)

欲張り過ぎている気もするが、想像以上にこの霧桜が危うい状況であると知った現状、呑気に構えている事など出来る筈がなかった。

焦燥感を心の片隅に抱えながら思考の海に沈んでいたオレは、やがて一つの致命的な事実気が付く。正確には、今まで考えないよ

うにしていた事実を。

(……つかよく考えたら、オレ、交友関係狭過ぎじゃね?)

霧桜で頼れそうな人間は健介、葵、神楽　とは言っても神楽は一昨日から会っていない訳だが　の三人であり、範囲をこの風羽市にまで広げても暗邸、華恋、ユエの六人。

(たった六人……だと? いや、え、ちょっ、マジで?)

慌てて考え直してみるも、知人程度のクラスメイトや魔女であるハンナ、アリスを抜くとやはりその六人しかいなかった。

何故そんなに少ないのか、中学時代はもつと多かった気がするが　などと疑念を覚えた直後に、それが解消される。

(……そう、か。“アイツ”がいねえから、か)

二年前に損なわれた、最愛の彼女。何て事はない、オレの交友関係が広がったのではなく、“アイツ”の交友関係が広がったから親しい奴が多い気がしていただけだったのだ。

“アイツ”が損なわれて、“アイツ”と親しかった奴らがオレから離れて行った、その結果生まれた今の狭すぎる交友関係。

“うつ……す、少なくとも友達が全然いないユウちゃんにそんな事言われる覚えなんてないもん!”

「……………」

軋む胸を抑えながら、大きく息を吐く。どうやら色々あり過ぎた所為で、心に打ち建てていた防壁が脆くなっていたらしい。

或いは、色々あり過ぎた事で抑え込んでいた蓋が外れてしまったか。

ついこの間までは、こんなに痛む事など無かったと言うのに。

整理がつき始めているなど嘘っぱちだ、単なる誤魔化しでしかない、自分の事だからこそオレが一番よく分かっている。

誰よりも何よりも、世界全てを敵に回しても後悔はないと言いつけるほどに愛していた彼女を損なった事実は、未だにオレの中でこんなにも強く楔を打ちつけている。

(いや、今は余計な事は考えるな。もう終わ…た事だ。今はそれより考えなきゃならねえ事があるだろうが)

何とかさそう言い聞かせながら心を落ち着けていたオレは、不意に隣の席で空気が揺れ動いたと気付く。

授業中に何事だと顔を向けたオレの視線の先には、席を立った葵の姿。

「先生！ 御鏡くんの体調が悪そうなので保健委員として保健室に連れて行きたいんですけど、良いですか？」

「ありやりや……そんなんですか？ 御鏡君」

いきなり何を言い出すんだ、と目を剥いたオレに掛けられるのは、教壇から降りて心配そうな表情を向けて来る教師の声。

「いや、オレは」

「わわっ、御鏡くん、凄い汗……それに凄く苦しそうに胸を押さえてたし、無理はよくないよっ」

「うん、確かに顔色もよくないですねー。分かりました、それじやあー之瀬さん、御鏡君を保健室まで連れて行ってあげて下さい」「分かりましたっ」

(いや、ちよっ、おま)

反論する暇すらなく交わされていく葵と教師の言葉。気付けばオレは葵に腕を取られ、気付けば既にオレが保健室へ行くという空気が教室内には流れていた。

「……」

こうなってしまうえば仕方がない。問題ないと言い張る事は可能だが、そうすると腕を掴むという動きまで見せた葵の立場がなくなってしまう。

加えて、先ほどからオレを見つめる葵の表情には打算の色など一切なく、純粹にこちらの身を案じるようにしか見えなくて。

そんな状況下で反論する事など、出来る筈がなかった。

「さ、行こう、御鏡くん」

そう口にしてオレを引つ張って行く葵に、小さく「ん引つ張らなくても良いって」と返しながら、オレは彼女に合わせて教室から出た。

*

「んで、どういっつもりだよ、葵。つかいきなりでビビったじやねえか」

教室を出て、保健室へと向かう道すがら。オレは葵と共に歩きながらそう問い掛ける。

「？ えっと、御鏡くんの体調が悪そうだったから、保健委員として動いたんだけど……ダメだった？」

きよとん、とした表情で首を傾げる葵に、どうやら本当にオレを案じる一心で連れ出したらしいと認識。

お人好し過ぎるだろう常識的に考えて、と内心で嘆息しつつ、「あー、いや、何でもねえ」と返しながら言葉を続ける。

「まあ、何だ。サンキュウな、葵。取り敢えず此処まで来たら保健室までそう遠くねえし、後は一人で大丈夫だぜ」

「うーん、確かにさっきよりは顔色良さそうだけど……でも、やっぱり心配だから保健室までについて行くね」

「……そうか」

そこまで言われれば、止める理由はない。

(つつても、これは言っておくべきだろ)

「まあ、何だ。それはそれとして、もう手は離して良いと思うんだが」

「……………え?……………!!」

その言葉を聞き、バツと勢いよく手を離す葵。見る見る内にその顔は赤く染め上がって行き、すぐに真っ赤になって俯いてしまった。

「え、えっと、そ、その、あのその……………ご、ごめんねっ、その、何て言うか、あのえと……………」

「どつどつ、落ち着け落ち着け。別にオレは気にしてねえから」

「あつう……………」

前にも似たような事があつたなーなどと内心で思いつつ、十秒ほど経って葵が落ち着いた事を確認してから口を開く。

「んじゃ、さっさと行こうぜ。あんま遅くなると、今度は葵が教室戻った時気まずいだろ」

「そ、そだね、うん」

頷いた葵と共に再び歩き出しながら、こつこつという様子は何処にでもいる女子なんだがなー、と思わずにはいられなかった。

(ああいや、今時珍しいほどに純情っつー前置きは付くだろうが……………んでこんなに地雷臭がすげえんだろうな、コイツ)

一時間ほど前に見せられた豹変した様子、そして、告げられた意

味深な言葉。それらが無ければこんな複雑な感情を抱く必要など無いのに、なんて、信じてもないカミサマへ怨み心。向ける言葉は何でこんなにハードモードなんだよ糞が、という雑言。

「そ、そう言えば、なんだけど……」

「ん？ どした、何かあったか？」

二人で無人の廊下を歩く中で生じた空白。その隙間を埋めるように発せられた葵の言葉に、首だけを動かして返事をする。

「その、あの時は流したんだけど、御鏡くんが霧桜に関して調べてるのって、後輩の子に頼まれたから、なんだよね」

「あー……、ああ、うん、まあそうだな」

今更嘘でした、などと言える筈もなく、オレは冷や汗を流しながら曖昧に頷く。

「その後輩の子って……華恋、って名前からして、女の子……だよ
ね？」

直後に、冷や汗が嫌な汗へと変化した。思う事は一つ。

(あれ……これ地雷じゃね？)

「あ、別にだからどうか言う訳じゃないし、さっきは御鏡くんの役に立てるのが嬉しくて意識してなかったけど、でも意識しても何

か思う所があるなんてそんな事は全然なくてね、ほら、御鏡くんって優しいから後輩の為でも一生懸命になるんだろうし、それが御鏡くんの良い所の一つで私が尊敬してる所でもあるから凄く良いと思うんだけど、でもそうやって誰彼構わず優しくするのもどうなのかなって思ったりして、あつ、でも勘違いしないでね、それで御鏡くんの後輩がどうのこうのとか御鏡くんに文句を言うつもりなんて全然なくて、ただ単純に確認がしたかっただけで、そんなに一生懸命になってもらえる後輩の子が羨ましいなとか思ったり思わなかったり、うん本当にそれだけなんだよ、だから御鏡くんも全然気にする必要はないし、別に私も気にしてないし、調査に関してはどんと任せてもらえれば良いんひゃけ　！？」

「ていつ」

相変わらずのぷにぷにとした頬を軽く摘み、強制的に言葉を止める。痕がつかないよう直ぐに指を離しながら、念の為に軽いデコピンをおでこに一発。

「ふやつ……あ、あれ？」

「正気に戻ったか、葵」

「えっと、あれ……？ 私、今何してたっけ？」

「まーよく分からんが、何かに憑かれてたのは間違いないな」

お被い行った方が良いんじゃないかね、と言えば、ふええ、と涙目になる天然娘。肩の辺りを必死でパタパタしている辺り、本当に幽霊に憑かれたと信じているのかもしれない。

いや、そんな事はどうでも良いのである。

(さて、さてさて……これはどう説明すりゃ良いんだろーな)

先ほどの葵は、明らかに尋常な様子ではなかった。一時間前の豹変とはまた異なる雰囲気だったが、目に光りがなく、明らかにいつもの葵ではなかった。

(マジモンの二重人格……正式には解離性同一障害、だったか。を、可能性として疑うべきなのか、こりゃ……)

専門的な知識がある訳ではないし、単純に先ほどの変容を今現在の葵が覚えていない事からの推測でしかない為、何か別な原因があるのかもしれないが、いずれにせよ、精神的な問題を持っている可能性を考慮に入れるべきなのかもしれない。

(この手の事はユエが一番詳しいんだがな。忙しいだろうし、こつちにも今は余裕がねえんだよな……いや、相談する位ならアリ、か?)

安易にユエに頼りたくないというのが偽りのない気持ちだが、だからと言って葵の抱える地雷は放置しておくには些か危険過ぎる気がする。

(様子見つつだったが、こりゃ方針変更も視野に入れるべきだな)

そもそも何が最善かも分からない現状、その場その場で自分が正しいと思う選択をするしかない訳だが。

そんな事をつらつらと考えつつ歩く事、一、二分。妙に長かった気もするが、ようやくオレたちは保健室の扉の前まで来た。

「到着つと。ま、流石に此处まで来たら問題ねえだろ。教室、戻って良いんじゃないね?」

「え、あ、うん。そだね。えっと、ゆっくり身体を休めなきゃダメだよ」

勢い良く行ってから去って行く葵。去り際にお祓い云々神社云々と呟いていたのは、きつと幻聴に違いない。

「はあ……面倒くせえけど、まあ、何とかするしかねえか」

取り敢えず今は降って沸いたこの貴重な一時を堪能させてもらおう、と完全に気を緩めた状態で保健室の扉を開けたオレは。

「……悠夜さん？」

「何……だと？」

目に見える地雷女、もとい電波女　花京院月子と、遭遇してしまった。

……どうやら、今日ほとんどん神様に嫌われているらしい。

「くちゅんっ」

「おや、珍しい。神代、貴女ほどの御方がくしゃみとは」

其処は、端的に言って狂気に侵された部屋であった。捻じれ曲がった椅子や机、絵具をぐちゃぐちゃに混ぜ合わせたかのような壁模様、上下が逆様な天蓋付きベッド、不気味に蠢く絨毯、時折響く

何かの呻き声……それら全てが絶妙なまでに最悪な調和を成し、常人ならば見るだけで発狂しかねない混沌とした空間。

そんな場所に、二つの人影があった。

一つは、ゆらり、ゆらりと揺らめく人影。今にも消えてしまいそうな儂さを持ちながら、同時に絶対に消える事がないと思わせる不気味な存在感を放っている。見ようによっては男にも、女にも、賢者にも、愚者にも見えるような矛盾を孕んだナニカ。

もう一つは、先ほど愛らしくしゃみをした存在。混沌なる空間に在って尚も美しさを主張する深い夜色のロングヘア。無垢な白雪の如き肌と芸術的なコントラストを描く豪奢にして格調高きゴシックドレス。

そして、神々が造り出したかのような完成された顔立ちの中でより一層目を引く、どんな金よりも美しい金色とどんな銀よりも気品ある銀色から成るオツドアイ。

それらを併せ持つ、眩暈を起こすほどに美麗で、一目見てこの世のモノではないと確信させる程に可憐な、童女のカタチをしたナニカ。

「うん、神代が風邪を引く筈はないから、うん。これはきっと悠夜が神代の事を噂してるからなの。うんうん、親友の息子まで魅了しちゃうなんて、神代は本当に罪な女なの」

「むしろ罵倒されている気もするのですがね。いやはや、相も変わらず私には理解出来ぬその深淵、神々しくも畏れずにはいられませんな」

「んー、貴方は考え過ぎなの、。神代は意外と単純なの。」

あと、貴方はもう少しポケとツッコミの機微を理解すべきかな？」
「さて、そのようなモノを求められても困りますな。それに第一、この身をこのように造り出したのは貴女のように。詰まらないと仰るならば、今からでも造り直してみますかな？」

愉快そうな色を交えた影のような存在の言葉に、神代はふるふると首を振る。

「それはやめておくの。今の貴方は貴方で悪くないし。それに、まだこのゲームも始まったばかり……ゲームマスターの貴方が退席するのは、とても詰まらないの」

「そう言って頂けるのはありがたい事ですが……。それにしても、いやはや、流石は貴女の選んだ駒と言った所ですか、あの少年

御鏡悠夜は。順調にこちらが用意したフラグを叩き折っている」

「それはそうなの。だって悠夜は、神代のマブダチである悠たんと神代の天敵である元祖世界のバグ、二人の間に生まれた子供だもの。神様から力を貰う事なく神様の領分を踏み越えていた二人の子供が、貴方みたいな偽りの神に操れるワケがないの。いわんや、偽りの神である貴方から与えられた玩具エンシェント・ワゴンの力でヒヤッハーしてるような魔女をや。イレギュラーにしてバグ、英雄にも超人にも魔王にもなれる存在、それがあの子」

「……ふむ。なるほど。ですが、それほど大それた存在の割には、フラグを叩き折りつつもかなり苦労しているようですか？」

興味深げな影の言葉に、神代はぺろつと舌を出しながら口を開く。

「その辺りは制限をかけちゃった。だって、チートなんて詰まらないもの。無様に見つともなく地を這い、時には泥すらも吸り、それでも歯を食いしばって最善を目指して頑張る……それが、あの子にはお似合いなの。まあ、その果てに最善が得られるかどうかは

分からないけどね？」

「これはこれは、何とも厄介な方に目を付けられたものですな、あの少年は。その重すぎる愛に潰されねば良いのですがね。いずれにせよ、安心しましたよ、神代。つまり、何かの拍子にあの少年が呆気なく死ぬ未来もあるという事なのでしょう？」

「うん、そうなの。主人公だから死なないとか、そんなの面白くないし。あ、だから安心して良いよ、別に悠夜が死んでも蘇らせたりとかはないから。貴方は安心して御鏡悠夜の破滅を願うと良いの」「そうですね。我が手より離れた此度のゲーム、それがどのような結末を迎えるかは現状未知ですが……一之瀬葵を始め、埋め込まれた地雷は順調に育っています故、後はイレギュラーさえ滅べば正常な運行を取り戻すのですから」

フフフフ、あはははは そんな笑い声を響かせながら、チエス盤を挟んで向かい合う二人は己が駒を進めるのだった。

これは、未だ届かぬ高みに座す超越者たちの会話。物語の盤外にて交わされる言葉。故に物語の登場人物たちの嘆きも怒りも届く筈がなし。

葵と分かれて保健室へ入り、核地雷級の電波女である花京院月子と遭遇した、数分後。保健室のベッドに寝そべるオレを、右隣のベッドにて上体を起こした月子がうっとりとした表情で眺めていた。

「ふふ、嬉しいです、まさかこうして悠夜さんの方から私に会いに

来て下さるなんて」

「勘違いすんじゃないやねえ、オレは純粹に体調不良で保健室に来ただけだ」

てめえがいると知ってたら絶対に来なかった、などと流石に面と向かって言うつもりはないが、だからと言って友好的な態度を見せる事などある筈もなく。

保険医がいないのを良い事にベッドを一つ占領したオレは、電波に背を向けて突き放すように告げる。

「ですが、こうして偶然とは言え会う事が出来たのですから……運命的な何かが働いていても不思議ではありません」

「知らねえよ、んなモン。つか、この程度で運命とか騒ぎ過ぎだろ常識的に考えて。やっぱアンタ可笑しいぜ」

「……やはり、思い出しては頂けないのですね。この出会いが、こうして誰彼憚る事なく話せる今がどれほど掛け替えなく貴重であるか、理解はして頂けないのですね……」

トーンダウンした声を聞き僅か感じる罪悪感。だがそれを大きく上回る不愉快さが胸中に渦巻いていた為、どれだけ憐れがましい言葉も吐かれようと受け入れる事など出来る筈がなかった。

「だから知らねえって。オレはユーヤ・ウエルシユタインとかいう意味不明な存在じゃねえし、前世の記憶なんてモンも当然ねえ。アンタとは昨日が初対面で、赤の他人なんだよ」

「初対面……悠夜さんは、それすらも……」

何かを小さく呟く電波。背を向けている為に顔も見えず、声で判断する事しか出来ないが 先ほどまでとは異なるシヨックを受け

ているように感じるのは、気の所為なのだろうか？

(あー……うぜえな。この既知外、マジ何とかなんねえのかよ)

魔女に霧桜に葵、唯でさえ厄介な事が増え続けているというのに、何故こんな電波女に関わらなければいけないのか。

(容姿だけ見りゃ普通に良家のお嬢様なんだが……いや、アレか、オレ以外の人間にとっちゃあ確かに何処に出しても恥ずかしくない良家の人間なのか、マジモンの)

「、それほどまでに黒き魔女の呪いは強いという事なのです。私たちの星を滅ぼしただけでは飽き足らず、来世にまで呪いを掛けるなど……だからこそ私は……」

更に何事かをぶつぶつと呟き始める電波。平時のオレならばハイハイ電波乙、とでも言っただけで無視たのだろうが　一つだけ、聞き逃さない単語があった。

「……なあ、花京院センパイ。今、黒き“魔女”つつたよな。それ、もう少し詳しく教えてくれねえか」

自分でも馬鹿な事を言い出している自覚はある。脳内お花畑の電波女の戯れ言に何を期待しているのだと、理性が嘲る声も聞こえてくる。

それでも、“魔女”という単語だけは聞き逃す事が出来なかったのである。

(これが藁にも縋る想いって奴か……いや、本当に血迷ったな、ク

ソが)

情けねえ、と自嘲しつつもベッドから上体を起こし、電波に向き合う。幾ら何でも、自分から話を聞いておいて背を向け続けるほど常識知らずではない。

「そうですね……全てを忘却してしまっていたのでしたら、確かに其処からお話するのが筋というモノ。それが悠夜さんの記憶を取り戻すきっかけになるかもしれませんし」

「前置きは良いんだよ、さっさと教えてくれ」

こちらが顔を向けた事がそんなに嬉しかったのかどうなのか、喜びをにじませながらも何処か真剣な面持ちで電波は口を開く。

ちなみに、礼儀知らずと知りつつオレの言葉遣いが変わらないのは、もうこればかりはどうしようもない事である。

「まず、黒き魔女というのはその名の通り漆黒の闇の如き色彩を持った災厄存在の事です。私たちが暮らしていた星へと影の軍勢を以って侵攻し、最後には死の星へと変えてしまった最悪です」

いきなりヘヴィな妄想だなあオイ、と、喉まで出かかった言葉を呑み込む。

「どうして生まれたのかも不明、生まれ落ちた時から黒き魔女はその身に超常の力を宿していました。その邪悪な力の前に、星の守護戦士であるユーヤ様と聖月の四騎士が死力を尽くして抵抗するも一人、また一人と欠けていき、最後にはユーヤ様が、私の……ルーナの前で黒き魔女の右腕と引き換えにその命を……」

さあどんな妄想話が飛び出すんだ、と身構えていたオレは、その時 不覚にも、言葉を失ってしまった。

目の前にいる電波が、深く静かに涙を流す姿を見て。絶望、悲哀、悔恨、自責 それらの色が緋い交ぜになったその表情が余りにも純粹過ぎて、眼前の光景が信じられなかったのである。

「わ、私が未熟だった所為で……私が縋りついて縛り付けた所為で、あの方はその命を……！！ 無残に、惨たらしく、幼子が虫けらを齧るように殺され、死して尚もその死体を辱められて……！」

声を震わせ、肩を抱き、懺悔するかの如く言葉を連ねて行く少女。それが例え妄想だったとしても、確かに目の前の少女は今、嘆きに心を震わせているのだと、それが痛いほどに伝わってきて。

(こりゃ……マジで極まった電波だな)

オレは、眼前の電波女子の妄想の根深さに改めて戦慄せざるを得なかった。前世などという何の根拠もない妄想を此処まで一途に盲目的に信じ、のめり込み、浸るなど、明らかに常軌を逸している。他の誰にそんな真似が出来るといえるのか。

(此処まで来るといつそ尊敬するぜ……いや、だからってお近づきになりたいかってえと全力でNOなワケだが)

「本当に申し訳ありません、ユーヤ様。私が、私が愚かだったばかりに英雄の中の英雄である貴方を……」

「あー、もう良いぜ、分かった。辛いならそれ以上喋らなくて良いぜ。更に言っとくと、オレはユーヤ・ウェルシュティンなんて男じゃねえからな、そういう謝罪とか懺悔とかは、オレに言われてもそ

の、何だ……ぶつちやけ困る」

「も、申し訳ありません、悠夜さん。見つともない所を、見せてしまって……記憶を取り戻していない悠夜さんにどれだけ告げても、それは私の自己満足……今聞いた言葉は心の片隅にでも留めておいて下さい」

忘れる、と言わない辺りに、どれだけオレをユーヤとかいう英雄様の生まれ変わりだと信じているかが窺える。何が其処まで彼女に信奉させるのだろうか？

(いや、にしても何つーか、何だろうなこの違和感。電波ゆんゆんなんだが、押し付けがましってワケでもなく……理性的ではあるっぽい、んだよな……)

一歩身を引いて観察しつつ、「さて、と……」とわざとらしく声に出してからベッドを出る。

「まあ、そろそろ二時限目も終わるし、オレはこれで教室に戻らせてもらうぜ。体調も大分良くなったしな」

端から有益な情報が得られるなど思っていなかったのだから、目の前の電波先輩がどれだけ真性かを知れただけでも良しとすべきだろう。

(ぜってえ関わらねえ、関わってなんてやるかバーローが)

「あ、悠夜さ」

電波でさえなければ普通に先輩として敬うのに、などと幾ばくかの心惜しさを感じながら、オレは電波先輩の言葉を待たず足早に保

健室から立ち去った。

.....

第一章・8（後書き）

病ん病んパニックに続く電波パニックの巻。悠夜の花京院月子に対する反応が厳しいように思えますが、別に彼女キャラクターが嫌いな訳じゃありません。むしろ信じて貰えないかもしれませんが、かなり鼻唄されてるキャラなんですぜ？w

感想批評、単純にこのキャラうざい に出番をなどなど、どんな事でも感想を頂けると作者は泣いて喜びますので、煩わしくなければ、是非お願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1241v/>

Accelerando-Amami poco, ma continua.-

2011年11月16日21時39分発行